

# ポケモンの世界へ迷い 込んだ、少女

セブンスランス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ポケモン世界へ迷い込んだ、倉田ましろ

果たして、彼女は元の世界に戻るか

そして、彼女の冒険は、今始まるうとしていた

### 注意

ポケモンとバンドリのクロスオーバー作品です。

苦手な方はブラウザバックを。

# 目次

9話	8話	ハナダシテイ編	7話	6話	5話	ニビシテイ編	4話	3話	2話	1話
70	63		48	37	29		19	12	6	1

20話	シオンタウン	19話	18話	17話	16話	15話	14話	クチバシテイ編	13話	12話	11話	10話
	タمامシシテイ編											
150		144	138	131	124	118	113		104	96	89	82

3 2 話	3 1 話	セ キ ク チ シ テ イ	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	2 5 話	2 4 話	2 3 話	2 2 話	2 1 話
—	—	ヤ マ ブ キ シ テ イ 編	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
218	215		211	204	198	191	186	180	177	171	165	155

	4 1 話	4 0 話	3 9 話	3 8 話	3 7 話	3 6 話	3 5 話	3 4 話	3 3 話
	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	272	268	262	257	249	242	236	233	224

## 1話

彼女の名は、倉田ましろ。目が覚めるとそこは現実とは違う世界にいた  
そう、彼女は、唐突にポケモントレーナーになっていた

ここは、カントー地方 マサラタウン

彼女の冒険は、今始まる

マサラタウン

「はい、どよう…」

「ここは、マサラタウンじゃよ、ましろ君」

白い髪をしたおじさんがこちらに話してきた

「えつと…貴方は？」

「ワシは誰だったかな…ああ思い出した

ワシはオーキド、みんなからオーキド博士と言われてるものじゃ」

「(あれ…?)」

「ましろ君? 草むらに入る前にこちらに来なさい」

「えっ? あ。はい!」

オーキド博士という人に後をついていくことにした

道なりにいくと大きな建物があり、オーキドとましろは研究所に入っていく。

オーキド研究所

説明省くと

私はオーキド博士から3匹のポケモンから1匹選び

そこから隣の街、トキワシテイに向かつて欲しいと頼まれた

「お届け物…ですか？」

「そうじゃ、フレンドリショップで受け取って欲しい」

「わ、分かりました！」

それでは行ってきますね！」

出ろうとしたが、研究者の白衣をきたメガネの人が話しかけてきた

冒険には回復が必要だと言われ、「きずくすり」を5個受け取り

最初にオーキド博士と出会った草むらの前に立ち止まった

1番道路

「あう、頼まれけど…なんで私…「ポケモンの世界」にいるんだろう？

確かあの時、朝起きて学校へ…うっ？」

頭痛がする

思い出そうとすると頭が痛くなる

「うう…」

しばらくして、頭痛が収まり

一息ついた所で、私は最初の一步を踏み出した

1番道路 トキワシティ入口前

目的地の場所が見えてきて、安心するましろ

その時だった、突如鳴き声が聞こえて、ふと振り返ると

「ぼっー」

野生のポツポが現れた

「あれは…確か小鳥ポケモンのポツポだったかな？

ってあ!？」

いきなり突撃して、間一発避けて

ポケットに入っていたボールが出てくる

それを見たましろはそのボールを取り。

ボールからポケモンを出した

「カゲー」

ヒトカゲだ、可愛い人目でこちらを見ていたから

この子にしたからだ。

抱きつくともぬいぐるみのように暖かい

「えっと…ヒトカゲは確か…そうだ、ひっかく攻撃があつたよね！」

私は迷わずにヒトカゲに命令をした

「ヒトカゲ！ポッポに近づいてひっかく攻撃をして！」

ヒトカゲが、ポッポに目掛けて爪を立てて

引つ掻こうとしたが、ポッポはそれを回避して

隙を見せた瞬間にヒトカゲに体当たりをかました

「かげ!!」

「ヒトカゲ!？」

やばい…どうしよう」

助手か、きずくすりを貰ったことを思い出して、ましろは

ヒトカゲに近づき、リュックからきずくすりを使い

傷ついたヒトカゲの傷を治してあげた

「かげ！（喜ぶ）」

「良かった…」

そうだ、ヒトカゲ！ひのこ！」



次の指示を出し、ヒトカゲがそれに応える

口からひのこが飛び出してきて、空に飛んでいるポツポに当たった  
少し傷を負ったポツポは地面に倒れ落ちていく

「ヒトカゲ戻って」

ましろはボールを出し、ヒトカゲを中に入れてあげた

その後ポツポの元へ急ぎ、担いで行き、トキワシテイの赤い屋根の所へ走っていく  
「今、助けるからお願ひ……！」

## 2話

トキワシテイ ポケモンセンター

ポツポを火傷をしてしまった原因でましろは急いでポケモンセンターにたどり着き、受付でジョーイさんに治療を頼んだ。

気が付けば夜だった為、今日はここで泊まることになった

朝方、ポツポを治療中、その間に私はフレンドリショップへ向かい

博士に届けるお届け物を貰い、すぐさまポケモンセンターに戻った私は

受付のジョーイさんに尋ねて聞いたら、ポツポの怪我はすぐに治ったようだった

「ぼっ！」

「お預かりしたポケモンは元気になりましたよ。」

「ありがとうございます」

本当にありがとうございます…」

「良いのよ、私達はこれがお仕事だから」

「ぼっ！」

ポツポは、私を見つめていて

それに気付いたジョーイさんは、私に声をかけた

「あら、この子、ましろちゃんの手持ちに入りたいみたいよ？」

「えっ？でも私…ポケモンの捕まえ方を知らなくて…」

「だったら、一度オーキド研究所に戻ってみるのも良いかもね

そのお届け物を届けなきゃ」

「あっ…そうでしたこれ、届けなきゃ。それではジョーイさん失礼します」

お礼を言ったあと、私はポケモンセンターを後にして

1番道路にいき、来た道を通り、マサラタウンに戻り

すぐにオーキド研究所に向かっていき

マサラタウン オーキド研究所

中に入り、オーキド博士に会いに行くと薄オレンジ色の少年がいた。

「おー来たかましろ君すまなかつたね、お使いを頼んでしまつて

…おや、ヒトカゲは随分ましろ君に懐いたようじゃの見栄えが違う」

「行ったり来たりしたのでそれで懐いたかも知れないですね。あ、それとはい。オーキ

ド博士宛のお届け物です」

お届け物をしっかりとオーキド博士に渡し終えたその時

隣にいた少年がましろに話しかけて来てきた。

「やあやあ、始めましてかな?」

「は、初めまして…まして言います」

「ましろか、可愛い名前だな。よろしく」

「ワシの孫である…えーと誰じやったかな?」

「おいおい、酷いぜ?俺の名前忘れちゃったのか?じーさんよ?」

「そうか、思い出したよ孫のグリーンだ、いやあ、すっかり忘れてたよ」

ボケが酷過ぎると、ましろは心の中でそう思っていた。

「それでじーさん?俺達になんの用があるんだ?」

「おお、そうじやましろ君達にこれを渡そうと思つてな少し待つておれ」

オーキド博士は机に置いてある赤い箱をこちらに持つてきて、ましろ達に渡した

「これはポケモン図鑑と言つてな。この広い世界にありとあらゆる場所に住んでいるポ

ケモン達を探すに役立つ道具じゃ、その為に、これを君達に託そうと思つてる」

ポケモン図鑑と一緒に渡された丸い赤と白のボールを受け取った

「これが…モンスターボールです…?」

「そうじゃ、それはポケモン捕まえる為の道具じゃ

「各地にいるポケモン達を捕まえるのゲットして完璧な図鑑完成を目指してくれ、これは歴史に残る君達の冒険じゃ!」

「はい！」

「俺は先に行くぜ？」

「そうだ、ねーちゃんからタウンマップを貰わないと

ましろもあとで俺ん家に来いよ、ねーちゃんからタウンマップを貰えるはずだから、それじゃバイビー」

グリーンは先に研究所を後にして、ましろも後を追う。その前にオーキド博士にお礼を言ったあと、彼の家へ寄り道をした。

グリーン家

「いらつしやいゝあら〜」

「貴方がましろちゃんね？わざわざ遠い地方からやってきたんでしょ？」

「お疲れ様、お茶でも入れる？」

グリーン家に着くとお姉さんが居て、笑顔で出迎えてくれた。だけど、ましろは、ひとつだけ疑問があった、それは

「私は目が覚めたらマサラタウンにいた事。そして、それを何故か、遠くの地方からやってきたとになってること。」

「あつ…えつと…お茶は大丈夫ですよ」

「タウンマップをここに来れば貰えると聞いたので」

嘘は言っていない、ましろはシゲルのお姉さんに伝えた、本人は少しがっかりしていたが、すぐにいつものペースに戻り、机に置いてあった地図を受け取った。

思ったよりも大きくて周りが見合わせるほどのマップであり

自分がどこにいるのかを一目でわかるように作られていた

「気をつけてね、どんな困難もポケモン達と一緒になら超えられるから

あ、あと弟の事をよろしくお願いしますね？」

シゲルのお姉さんと話をし終えた後ましろはマップを広げて次なる目的地へ向かう事にし。道中でいろんなトレーナーやポケモン達を戦ったりなどして、気が付いたら夕方になっていた

急いで、トキワシテイに向かい、夕陽が沈むごろの時間帯にたどり着き

ポケモンセンターに泊まることにした。

トキワシテイ ポケモンセンター

中に入ると、いろんな人やポケモン達が居て、空いているスペースを見つけ、そこに座ると、向こうからジョーイさんが来て、ましろを見つけたところらに駆け寄って来る。

「ましろちゃん、ここにいたのね」

「ジョーイさん？」

「あつ！ポツポはいます？」

「ちゃんといるわよ、はい」

指差す方に一羽の鳥の姿が見えてきて、やがてましろの上に飛び回るポツポの姿が見えていた。

「ほっ!」

「ジョーイさん、ポツポの面倒を見ていただきありがとうございます!」

「ふふ、別に良いわ。」

それより、早くポツポを入れてあげなさい」

「はい!これからもよろしくね?ポツポ」

こうして、2体目のポケモンをゲットしましたましろ

彼女の旅はまだまだ続く。

## 3話

次の街に向けて、旅の準備を済ませるましろ

トキワシティの北の方にトキワの森があり

そこを通らないとニビシティにはいけないと話聞いたましろは。2番道路を歩いて行き、トキワの森の入り口を見つけたところで後ろから声をかけられて振り返るとそこにはグリーンはましろの近くに寄ってきた

「やあ、ましろじゃないか。まだトキワシティで休んでる方思ってたよ。」

「グリーンこそ、先の街にもう行ってると思ってたけど

寄り道してたの？」

「ん、まあ左の19番道路の向こうにポケモンリーグの受付があるんだけど、警備員がいてさ、通れないから仕方なくバッチを集めることにしたんだ。それよりもましろ、せつかくだし俺とバトルしようぜ？」

グリーンの右手にはボールを持っていて

「どうやらポケモン勝負を挑まれたようだ

「わ、分かった。」



ましろもグリーンと同じようにボールを持ち

お互いにポケモンの出し合いをした

グリーンのポツポ

「ほっー！」

ましろのポツポ

「ほっ!!」

「あれ、グリーンもポツポを捕まえてたんだね？私と同じだ」

「へっ、俺のポツポはそこらでいる野性のポケモンじゃないからな

それじゃあ先生必勝！ポツポ！電光石火だ！」

目にも止まらない速さでましろのポツポに突っ込んでいき

反応が少し遅れて、ポツポに直撃し吹っ飛んでいく

「ポツポ!!」

ましろの声でポツポは空中で体制を変えて

こちらも技を指示をした

「ポツポ、お願い！かぜおこし！」

翼を羽ばたき、やがてグリーンのポツポの周りに風が舞い上がり

少しづつダメージを与えていく。

「やるな、だか少し甘いよ、ましろ！」

ポツポそのまま電光石火で相手に突撃した後に竜巻で迎え撃て！」

「……ポツポ避けて！」

「遅い！」

再び電光石火が炸裂し

上空のさらに上に飛び、そして素早い動きで竜巻を起こすポツポ  
なす術もなく、ましろのポツポは竜巻に飲み込まれやがて

傷だらけの状態でポツポは地面についたが、倒れてはなかった

「なかなかやるなましろのポツポは

だけど、これでおしまいにするぜ、ポツポ！つばめがえしだ！」

ほんろうし、ポツポは相手のつばめがえしをくらい

ましろのポツポは戦闘不能になり

心配になったましろはポツポに近づき、そっと持ち上げて抱き抱える

「お疲れ様、ポツポ

ゆっくり休んでね？」

ポツポをボールに入れて、もう一体のポケモンを繰り出した

「かげ！」

「ヒトカゲか、良いチョイスだな、ましろー！」

「負けないから！ヒトカゲ！ひのこー！」

命令をし、ヒトカゲはひのこを繰り出した

無数のひのこはポッポに目掛けて直進する

「避けるー！ポッポー！」

だか、ひのこをスピードが早く、先程の戦闘で疲れが出ていたのか

ポッポは避けられずに、ひのこを食らい、その場で戦闘不能になった

「ヒューやるじゃんましろ

お互いにポケモンは一匹だ、いくぜ？」

「うん、お願い」

「出でこいー！ゼニガメー！」

「ゼニー！」

ゼニガメはヒトカゲをいがみあっていた。どちらも譲れない、戦いの中、先に攻撃をしたのはグリーンのゼニガメの方からだった

「ゼニガメー！みずてっぽうだー！」

口から勢いよく、水をヒトカゲに目掛けて出し

ギリギリのところまで、避けヒトカゲの反撃が始まる

「かげー！」

連続でひっかく攻撃をしているが

とつさにゼニガメは甲羅の中に入り自身甲羅で盾にし、ダメージを防いだ

「ヒトカゲ！一旦距離を取って！」

攻撃をやめて、ヒトカゲは距離を取るが

その隙をグリーンは見逃さなかった

「よし、ゼニガメ！もう一度みずてっぽうだ！」

「……ヒトカゲ避けて！」

だかしかし、ゼニガメが放った攻撃が

ヒトカゲに当たり、勢い余って、大きな木にぶつかり

なんとか耐えたヒトカゲは膝をついた状態でいた

「かげ……」

「（ヒトカゲの体力が…相手のゼニガメはまだ元気がある…）」

「よし、このまま決めてやるか！」

ゼニガメ！たいあたりで決めろ！」

「ヒトカゲ！避けて！」

「か……げ！」

ゼニガメのたいあたりを避けてその隙をヒトカゲは口からひのこを喰らわせる、効果は今ひとつだが、確実にダメージを与えたとましろは判断する。

「おつ、やるな、ましろのヒトカゲは」

だが、次で終わりする！ゼニガメみずてっぼうだ！

「二度目はさせない！ヒトカゲ！煙幕を、出して！」

ヒトカゲは煙幕を出そうとしたが、青い光が口から出てきて竜の形をした、攻撃がゼニガメに直接発射される。グリーンは指示をしようとするが間に合わず。直撃をくらい、ゼニガメは吹っ飛んで行つて向こうの木にぶつかり、目を回しながら戦闘不能になつていた

「まじかよ…しかもその技…りゅうのいぶきじゃないか？」

「りゅうの…いぶき？」

「ドラゴンタイプが覚える技の一種みたいなもんだよまさか、そのヒトカゲがドラゴン技覚えてるなんてな」

「えつと…そんなに貴重な技…なの？」

「普通のヒトカゲはまずドラゴン技は覚えななんだわ。だけど、ましろのヒトカゲみたくにまぐれで出せるほどの能力持ちだな。」

グリーンに色々と聞かされて、お互いのポケモンの傷を回復したりした。

「それじゃ、俺は先に行くからな、バイビー」

そう言い、グリーンは一足先にトキワの森に入っていく、が何かを思い出したかのようにこちらに戻ってくる

「どうしたの？グリーン？」

「あーなんていうか、ましろもポケモン集めながらポケモンリーグに挑戦してみれば？」

「…ポケモンリーグ？」

「各地にある8つのジムバッチを集めるとポケモンリーグに受けられる挑戦権が得られるんだ、そこでお前、ましろと戦えれば良いんだかな」

「ポケモンリーグ…うん。良いかも」

私もグリーンと一緒にポケモンリーグに挑戦できるように各地でポケモン集めながらやってみるよ！」

「へへ、それじゃ今度こそバイビー」

グリーンは、トキワの森に入っていった。

「…グリーンって本当は優しい人なのかな…？」

ううん、今はニビシテイに向かわなきゃ！」

ましろの旅はまだまだ続く

## 4話

トキワの森に、入ってから1時間くらいだろうか？

ましろは、今、虫ポケモンたちに襲われていた

「いやあああ?!?!」

凶鑑の説明によると

トキワの森は、虫ポケモンが多いため、虫除けスプレーなどは入れとくと便利などと書いてあった。ビーダルや、スパアーなど

それを確認しないで毒消しときずくすりをしか買ってなかったましろは

涙目になりつつも、ポケモンを捕獲しながらニビシテイの出口を探していた

トキワの森 中央辺り

「はあはあ…もう…いやあ…」

覚悟は決めてたけどなんでこんなにも虫がいるの…」

ガサガサ

「ひゃい!?お願い出て、ヒトカゲー」

ボールを出し、ヒトカゲを外に出した

ヒトカゲはましろの状況を判断して、茂みの中にいるのを警戒する様に見つめていた。

「きやぴ……？」

緑の芋虫が茂みの中から出てきた

ましろは一度ヒトカゲに、まて。と指示を送り

少しずつ、緑の芋虫に近づいていく

「…見たことある気がする、このポケモン…」

凶鑑を開き、スキャンすると

名前が表示されて、ましろはそれを確認する

「キヤタピー。可愛い名前、進化したら蝶になるのかな？ 確か

こつちにおいて、キヤタピー」

ゆつくりと手を差し伸ばす、が。

キヤタピーは警戒し、戦闘態勢をとり、口から白い糸を吐き出してきた

「きやあ！ ベトベトする…」

身体の上半身上あたりが白い糸で絡まれていく

ヒトカゲに指示を送り、ましろに絡まれていた糸を切ってもらった

「ありがとう、ヒトカゲ」



「かげー！」

「きゃびー！」

警戒するキヤタピーはいきなり攻撃を仕掛けてきた

間一髪で避けた、ヒトカゲはひのこを放ち

キヤタピーにダメージを与えた

「ヒトカゲ待つて！」

えーとボールは、あつた！」

ボールをば投げようとした、その時だった

空から雀見たいなポケモンがキヤタピーに突っ込んできて襲われていた。

「このポケモンは……」

「かげー！」

ヒトカゲは、集団にいる雀ポケモン達を尻尾でなぎ払いをしたが

それでもキヤタピーに寄ってくる、ましろはもう一体のポツポを

ボールから出せて、ヒトカゲの応戦をする

「ヒトカゲ！煙幕をー！」

「ポツポ！電光石火で攪乱しながらかぜおこしをして！」

「（少し……怖いけど……お願い、私に勇気を貸して！）」

2匹のポケモン達はましろの指示に従い

3匹の雀ポケモン達を惹きつけた

その間に、ましろは下にいるキヤタピーを救助して、背後にいる

ヒトカゲとポツポをポケットからボールに入れ

その場を後にした。

トキワの森

なんとか、キヤタピーを助けたましろ達は

川があるところで休むことにした、ヒトカゲとポツポには

先程の怪我を治すきずくすりを使い。

キヤタピーにはポケモン専用のご飯をあげた

「きゃぴー」

喜んでキヤタピーは餌に食いついていく。

その光景に、ましろはボケーとしていた

「可愛い……あっ

ヒトカゲとポツポにもご飯あげなきや」

思い出したかのように、ましろは

ヒトカゲとポツポにご飯をあげるのであった

「きゃぴ…」

「ん、どうしたの？キヤタピー？」

「きゃぴー」

近くに置いてあった、まだ誰にもボールにキヤタピーは自分から入って行く。どうやらましろに懐かれたようで共にキヤタピーもましろの手持ちに加わった

「えっと…キヤタピーゲット…なのか？」

「かげー」「ぼっ！」

ヒトカゲとポツポも喜んでいたのであった

時刻は昼頃

トキワの森で、電気ネズミポケモンがいますと

トレーナーから聞いたましろは探索するが、気がつくくと

ニビシテイに向かう、出口を発見する

「ようやく、出られるんだね。」

ネズミポケモンは見つからなかったけど、うーんもう少し粘ろうかな？」

考えているうちにましろは出口の方へ向かうとする

が、どこからか鳴き声が聞こえて来て

ましろは声ができる方へ向かっていく

「カー!!」

さっきの雀達だ。

周りに集まっているのはどうやらネズミっぽいポケモンが突かれていた

「あれはさっきの!?!」

ヒトカゲ出て来て!」

ヒトカゲをだし、戦闘態勢を取り

指示を伝え、私はキヤタピーと同じ救い方をやろうとしたが

「カー!」

1匹の雀に不意を突かれ、ましろは背後に倒れ込む

2匹のポケモンはヒトカゲが相手をしていて、とても指示を送ることができない、ボールを取り出すにも相手は待つてはくれない。ましろは態勢を戻そうとするが、すぐに雀の行動が始まり、こちらに突っ込んでくる

「(やばい…間に合わない!」

それは、咄嗟の出来事だった

「フリーちゃん! つるのムチでなぎ払って!」

長いツタで、1匹の雀をなぎ払った

その光景をましろは見て、そのツタが来た方を見る

そこにはミニスカートを履いた、少女がポケモンと一緒に居たからだ

「君！オニスズメは集団で襲う習慣があるから

ヒトカゲに煙幕とひのこで応戦して！

フシギダネ！はっぱカッターで残りもおねがい！」

「ダネフツシヤア！」

ましろは言われた通りにヒトカゲに指示をした。

「ヒトカゲ！オニスズメ達に、煙幕！」

それからひのこでフシギダネと協力して！」

「かげ！」

「ポッポ出て！」

「ポッポ！」

「私について来て！ポッポ」

ポッポを出して、ましろは倒れているネズミポケモンを

抱き抱えて、ヒトカゲの場所に戻ろうとする。

さらにもう一匹のオニスズメがこちらに襲って来た

「しまっ!？」

「フシギダネ！眠りの粉で眠らせて！」

「ダネエ！」

甘い香りが辺りに舞う、オニスズメ達はその香りをすい、地面に吸い込まれるようにバタンと倒れ込む。その間にましろと少女はポケモンをしまい出口の方面へ向かっていき、建物の中へと入っていく。

トキワの森 休憩場 ニビシテイ方面

休憩所で、オニスズメ達に襲われたネズミポケモンを回復して

目が覚めるまで、さつき助けてくれた少女と話しをしていた

「さつきは助けて頂きあ、ありがとうございます…」

「良いのよ、私もトキワ森抜けようとしたところに貴方が違う方面に向かうのを見かけて追いかけて見たらオニスズメ達に襲われてるピカチュウを助けようとしていたとわね、あ、自己紹介まだだったね」

少女は席を立ち、ましろと顔を合わせて笑顔で、自分の名前を言った

「あたしはリーフ」

「グリーンの幼馴染でもあるよ」

「私は倉田ましろ、ましろって呼んでください」

「ましろちゃんだね、よろしくね」

貴方も、ジムに挑戦するために回ってるの？」

「はい、そうです。」

リーフさんも？グリーンと同じ旅を、続けてるんですか？」

「ん、まあそんな感じかな？」

でも私は他のと違ってまったりするタイプだからそこまで急ぎじゃないのよね。ポケモンリーグ開催までまだ時間あるし、ゆっくりとバッチ集めながらでもするよ」

リーフとましろが話していると、ネズミポケモンが目覚まし

周りを見渡していて、自分が置かれている状況を把握したようだった

「ぴか……？」

「うん、傷を治ったみたいだね、大丈夫だと思うけど一応

安定はしてるんだよ？ピカチュウ」

「ぴかー！」

ピカチュウは、トキワの森に戻っていき

戻る最中、何度かましろを見ていたが、別れがお礼が言いたかったのかなと、そう思っていた。

「それじゃ、行こうか？ましろちゃん

「ここを出て歩いていけば、ニビシテイに着くしき」

「はいー！」

二人は建物を後にし

ニビシテイに向かうのであった

ましろ達の旅は続く…



## ニビシテイ編

## 5話

ニビシテイ

宇宙から落ちて来た隕石や、珍しい化石や石など置いてある博物館など

沢山の街並みがある、ニビシテイに到着して、ましろ達は

ポケモンセンターで休むことにした。

「はい、お預かりさんポケモン達は元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

ましろは礼を言ったあと戻る道中、おじさんが電話で怒鳴りつけた声で会話をしていた

「ロケット団が!?!ええい、何をしてるんだ!」

ましろは目を合わせずに、リーフの所へ戻っていく

フシギダネの頭を撫で撫でして、ポケモン達と馴れ合いをしていた

「あ、お帰り〜」

「ポケモン達も元気になったよ、これから私はジムに向かうと思います、リーフさんはど

うします?」

「そうね…私はフシギダネとニビシティを見て回ろうかなって思ってるよ。ジムか、ましろならいけるよ!頑張って!」

リーフと別れたあと。ましろは一つ目のジムがある建物に向かい  
目的地に着き、中へ入ってゆく

ニビジム

そこには大きなグラウンドがあり

まるで別世界に來たのかと思うくらいに広がっていた

「わあ、広い…」

「おや?新たな挑戦者か?」

暗いライトが当たらない物陰から人はやってきた

「あ、あの!…このジムに挑戦しに來ました!」

「なるほど、俺は挑みに來るとはな

良いだろう!その挑戦を受けて立とう!」

フラッシュライトが全体に広がり

向こう側にいる男の人がましろの方へ來る

「自己紹介がまだだったね

俺の名前はタケシ！硬い石により！俺のポケモンも強さが現れる！  
硬くて我慢が強いぞ！」

「か、硬い石…!?!」

「ふはは！俺に負けるとわかってても俺に勝つつもりか！」

「いえ、勝ちます！勝つて見せます！」

「良いだろう！俺も手加減はしない！さあ！かかってこい！」

タケシとの戦闘が始まった！

お互いに指定された場所へ移り、審判のルール説明が行われた

「手持ちが全て戦闘不能になった試合終了だ！」

それでは両者！」

赤と白の旗を上に向けて

そして、両腕を振り落ろされる

「勝負始め！」

「いけ！イシツブテ！」

「いって！ヒトカゲ！」

二人はポケモンを出した

相手のイシツブテは強い意志を感じ、ヒトカゲは

自身に気合を入れていた。

「ほお？岩、地面タイプのにイシツブテにあえて、効果抜群のポケモンを出したか。」  
「相性の問題では無いです！先に攻撃を！」

ヒトカゲひっかく攻撃！」

「かげー！」

ヒトカゲはイシツブテにひっかくを連続で決めるが

相手にはあまり効果が無かった

「イシツブテ！そのままヒトカゲの尻尾を掴んで投げ飛ばすんだ！」

ヒトカゲの背後を取り、尻尾を掴み

そのまま投げ飛ばした、空中に舞うヒトカゲを見てましろは

指示をした。

「ヒトカゲそのまま煙幕を放って！」

空中でヒトカゲは上から煙幕を放ち

イシツブテの視界を潰した

「なるほど、いい戦略だ、だがそんなのは時間稼ぎにもならない

イシツブテ砂ホコリで煙幕を消せ！」

地面の砂を自分の周りに回し、煙幕を消した

「……！ヒトカゲ！距離を取って！」

「遅い！イシツブテ岩石封じ！」

イシツブテの投げた岩が距離を離れた直後に狙われてヒトカゲに直撃を食らった。投げた岩がフィールドを妨害させた

「かげ……っ！」

「一旦戻ってヒトカゲ！」

不利だと、判断したましろは

次の手持ちである、ポツポを繰り出した

「ポツポか、面白い！イシツブテ！岩石封じでポツポの動きを封じるんだ!!」

イシツブテは、岩石封じを繰り出し

空中にいるポツポに当てようとするが、狙うことが出来ず

その隙を見て、ポツポはかぜおこしを繰り出した

「ダア!?!」

「よし、少しは効いてる！」

ポツポそのままもう一度かぜおこし！」

「ほっ……！」

少しづつ風の勢いが強まっていき。

やがて、イシツブテを風に巻き込まれさせざるほどの威力が出た  
「イシツブテ！体当たりだ！」

タケシはイシツブテに指示したが、身動き取れない状態であり  
行動が出来ずにいて、やがて風が収まると、落ちていき  
戦闘不能になっていた。

「くっ！良く頑張ったなイシツブテ  
ゆっくり休んでくれ」

「ポッポお疲れ様！」

ましろはポッポの頭をナデナデしてあげて  
ポッポは気持ち良さそうな表情をしていた  
「次のポケモン、君は倒すことができるかな？  
いけ！イワーク！」

タケシの最後のポケモン、それは巨大な大きさで  
岩と蛇が合体したような感じだ。

ましろは息を飲むように、ポッポで戦闘を開始した

「電光石火！」

電光石火でダメージを与えるが、岩の肌には傷一つ合わせることができなかつた。

度上空でポツポはイワークを見つめていたが

「イワーク！いわなだれでポツポの行手を阻むんだ！」

「イワア！」

空の裂け目から無数の岩が一斉に落ちて来て、ポツポは間一髪避けるが  
次々の岩を避けられずにいわなだれの餌食を食らった

「ポツポ！」

辛うじて、ポツポはフラフラになりながらも

立ち上がり、翼を広げて、無理やりでも飛ぶことをやめなかった

「ポツポ！一旦ボールに……」

「イワーク！アイアンテールだ！」

「えっ!？」

いつのまにかポツポの目前にイワークがいて

尻尾の先が光やがて、ポツポにダメージを与えた

「……ポツポ!？」

「少しの油断が命取りだ！チャレンジャーよ！」

「……っ！」

ましろはポケットからボールを取り出して

ポツポをボールの中に入れる。

「…（私が…もう少し…ポツポをボールの中に入れていたら…

ごめん、ポツポ、私のせいで…）」

「どうした？チャレンジャー！」

さっきの意気込みは嘘だったのか？」

「いえ…私はまだ負けていません！」

最後の最後まで争って見せます！お願い…いつて！ヒトカゲ！」

「かげ！」

「その息だ！チャレンジャー！」

「頑張ろう！ヒトカゲ！」

ヒトカゲとイワーク、果たしてどちらか勝つか

果たして、ましろはジムリーダーに勝つことができるのか

次回へ続く



## 6 話

ニビジム 観客席

「あちやもう始まってたかー」

リーフは、色々と街を回っていたため

ましろの試合を見るのは2匹目を出した所からだつた

「ましろ達、いい勝負してるぜ？リーフ」

「グリーン？いたの？てつきり早めにいつてると思ってたけど

あ、もしかしてましろちゃんのが気になるの？」

顔を赤くするグリーン

本人は否定しているが、リーフは笑いが止まらなかつた

「冗談だよあはは本気にしちゃつたえ」

「う、うるせー」

とりあえず俺は次の街に行くからな、じゃあな！」

カバンを持ち、グリーンはニビジムの後にした

「もう、冗談なのに…ああーこういう時にレっ…」

その時だった。

大きな音が響き、リーフはその先のフィールドを見た

時は数分前

「ヒトカゲ！移動しながらひのこ！」

「かげ！」

ヒトカゲはイワークの周りをひのこで少しづつダメージを与えていく

イワークの反応が少し鈍いが、ヒトカゲ小さいため、簡単に避けられた

「イワーク！尻尾でなぎ払え！」

「ジャンプして！ヒトカゲ！」

タイミングよくヒトカゲはイワークのなぎ払いを交わしていく

「イワーク続けて体当たりだ！」

「いわあ！」

「かげ!？」

「ヒトカゲ、防御して！」

イワークの体当たりを両腕でガードするが

押されるがままにヒトカゲは壁に大きな音ともに激突し

壁に押し潰された

「かげえ!!」

「ヒトカゲ!？」

「イワーク、一旦距離を取れ!」

イワークは先程の位置へと戻っていった

「ヒトカゲ!!お願い目を覚まして!ヒトカゲ!」

「かげ…!」

ギリギリに意識を保ったヒトカゲが

イワークに向かっていく。

「ヒトカゲは体力の限界のようだな

これでとどめだ、イワーク!たたきつける攻撃だ!」

「…!ヒトカゲ!!」

「かげええええええ!!」

ヒトカゲの口から強烈なりゆうのいぶきが放出され

直線へ向かってイワークに直撃を喰らわせる

「何!？」

「いわあ!？」

「イワーク!？」

「…すごい、ましろのヒトカゲ凄いいじゃん！」

「ヒトカゲ、ナイスだよ！」

ましろはヒトカゲに向かって親指を立てる

ヒトカゲもましろと合わせて親指を立てた

「まさか隠し球を、持ってたとはな

「これは俺も油断してたようだな」

「ヒトカゲまだ！行けるよね？」

「かげ！」

「やる気は十分だな、イワーク！もう一度体当たりだ！」

「いわ…」 ビリビリ

「…!?しまった麻痺ったのか!？」

さっきのりゅうのいぶきで運良くイワークを麻痺らせていた。

ましろのヒトカゲはもう一度りゅうのいぶきを出そうとしたが不発で終わった。

「ふはは、不発で終わったようだな

イワーク！たたきつける攻撃だ！」

「いわあ！」

「ヒトカゲ、イワークの目にひのこ！」

「かげ！」

口から放ったひのこは、イワークの目に当てようとしたが  
イワークはそれを回避し、こちらに向かってくる

「ヒトカゲ避けて！」

ヒトカゲは、イワークの攻撃を避けたが

それを読まれたのか、イワークは自分の身体を紐のように巻き

ヒトカゲの行動をできなくした

「かげ……！」

「くっ！ヒトカゲひのこを思いつき放って！」

ひのこを浴びさせようとイワークの顔に何度もひのこを与えようとするが、それを軽く避けていく。

天井まで放っていったひのこはスプリンガーに当たったような気がするが、誰も気にしてはいなかった。

「よし、そろそろとどめを出してやれ！イワーク

いわなだれだ！」

「かげ かげ かげ！」

「ヒトカゲ!?!…だめだ…終わりなの…!?!」

その時だった、警報が鳴り響き

上のスプリンガーから大量の水が放射されて来た

その水を浴びたイワークは巻きついてたヒトカゲを解放し

避けようにもない雨に打たれていた

「かげ!？」

とつさにヒトカゲは自分の尻尾の炎が消えないようにお腹で守っていく

その光景にタケシもましろも驚きを隠せなかった

「まさか、狙ってやったのか? チャレンジャー」

「い、いえ違います…むしろ

上の警報機が反応したのに私は驚いただけで…」

「…ふはは、やっぱり君は面白い子だ!」

さて、そろそろ水が止まる。

恐らくこれが最後の技決めになるだろう」

「…いきますー!」

スプリンガーの雨が止み

イワークとヒトカゲの最後の技が繰り出されようとしていた

「イワーク! これでおしまいにしろ! たたきつける攻撃だ!」

「ヒトカゲ！もう一度！りゅうのいぶきー！」

ヒトカゲのりゅうのいぶきは先程の威力は出ないが

イワークを倒せるくらいの威力は残っていた

対するイワークは雨に打たれながらも必死に最後の技をこちらに向かって来て、お互いの技がぶつかり合い、そして

「いってええええええええ!!！」

「かげええ!!！」

煙が舞い、両方の姿が見えなくなった

しばらくして、その煙がなくなっていく

イワークはその場で倒れ込み、ヒトカゲは膝をつく

なんとか立ち上がるくらいの体力を残していた

その時だった

ヒトカゲの、身体が眩い光に包まれていくのを

「えっ!?!ヒトカゲ?！」

「これは…進化か?!！」

タケシの口から発する言葉「進化」

そう、ましろのヒトカゲは進化を成し遂げていき

観客席から覗いていたリーフは上から見ていた

「グウオ！」

身体が大きくなり、ヒトカゲはリザードに進化した

「戦闘中に進化とは、凄い人だなチャレンジャー！」

「ヒトカゲ……？」

凶鑑が反応し、説明してくれた。

「リザード……よろしくね！リザード」

「グウオ！」

「おめでどう、チャレンジャー！」

どうやら、俺は君を少しみくびっていたようだ。すまなかった

「いえ！わ、私もタケシさんと勝負できて、良かったです」

「君に渡す物がある、これを受け取ってくれ」

タケシからグレーバッチを貰ったましろ

「綺麗ですね……これがバッチなんだよね？」

「そうだ、ポケモンリーグ公式から認められた際に受け取られる

バッチだ。8個集めれば君もポケモンリーグを受ける権利ができるようになる。」

「ありがとうございます！」



リザードもお疲れ様！」

「グウオーン！」

「君達二人はいつか、ポケモンリーグのチャンピオンだつて慣れるはずさ、世界はこんなにも広い、何処にいてもまだ見ぬポケモン達もいるはずだ。そうだ、この先にハナダシテイがあつて、そこに俺の知り合いの子がジムリーダーを務めるから、会いにいつてみたらどうだ？」

「わかりました、色々教えていただきありがとうございます」

「ましろー！」

振り返るとリーフが観客席から手を振っていた

どうやら先程の戦闘を見ていたようだ

「リーフさん、今行きますね！」

「頑張れよ、未来のチャンピオン！」

ニビシテイ 夕焼け

「おめでどう、ましろー！」

「あ、ありがとうございますリーフさん」

「今日は遅いし明日になったらハナダシテイに向かった方が良いかもね？今日はポケモンセンターに泊まろうか？」

「うんー！」

ましろとリーフはポケモンセンターで泊まることにした。

後に、リーフは朝早くからニビジムに行きバッチを貰ってきたと

話していた。

### 3 番道路

「もう、リーフさん先にいつちやうなんて…」

けど、ポップの怪我也直ったから今度こそ出発だね！」

一歩踏み出そうとしてたが、背後から誰かが話しかけてきたようで

そこにはタケシが慌てた様子でましろに会いに来たようだ

「た、タケシさん!？」

「ようやく忘れる所だったよ

朝、渡そうとして忘れててね、ちようどましろがハナダシティに向かうまで良かったよ。はいこれお弁当だ。お昼になったらポケモン達にもあげてやってくれる」

「タケシさん、料理も作れるんですか？」

「ありがとうございます。」

「いやあ、こんなの朝飯前だよ。それよりましろ

気をつけて行ってくるんだよ?」

「はい！では

またいつか勝負しましょう！タケシさん！」

ましろ達はタケシと別れを告げ

また、いつか再会を信じて、ましろ達の旅はまだまだ続く

## 7話

4番道路 ポケモンセンター お月見山前

タケシと別れを告げ、ましろはグリーンとリーフを追うべく

お月見山の近くにあるポケモンセンターで休んでいた

道中で、ポツポは進化して、ピジョンになったりした

気がつくときヤタピも進化をされていて、いまはサナギと化していた

そんな中、ポケモンセンターではある噂が流れていた

「ロケット団がいるらしいから気をつけた方が良いらしいな」

「そうらしいな、たく、ここの警察は何してるんだが。」

一向にロケット団の悪さが治らないからみんな少しずつ怯えてるんだしよ。」

などとトレーナーから情報を得ていた

ポケモン達と触れ合いを忘れないうちに済ませたましろは

お月見山に向かうのであった

お月見山

中に入るとひんやりした空気でしんみりとした

洞窟、お月見山と言われた場所で夜になると月の石が手に入ると言われている。探索するうちに黒っぽい服を着た怪しい人達がいた

「…ピジョン出て？」

ましろはピジョンを出して

防衛として警戒をしていた

「俺たちの今回の仕事はピツピを捕獲することだ

時間が大事だ、いくぞ」

黒い人達は、洞窟の、奥へ進んでいく進んでいった

あとを追うようにましろ達もその背後へついていく

お月見山 F1

階段を登り、辺りを見回すと先ほどの人達がいた。

どうやらピツピの他にも何かを探していたようだ

「少し怖いけど…行くしかないよね？」

ましろは、人に見つからないように歩いていくが

その気配に察知して、振り返るとバレてしまった

「お前は誰だ？ガキだと？作戦を邪魔されても困る

ここで排除させてもらうぜ、いけ、ズバット！」

「っ！お願いリザード行つて！」

ましろはリザードを出して、戦闘態勢を取る方に

対する男もそれになっかかり、相手のポケモンを繰り出した

「ズバツ！」

「グウオ！」

「やれ！ズバツ！超音波だ！」

素早い動きでズバツは超音波を出し

リザードはその音を聞いて混乱するようになってしまう

技が繰り出せないため、避けるしか方法がなかった

「リザード避けて！」

ズバツの攻撃を避けて

次の攻撃も避けていく

「あーむかつくぜ！」

ズバツ！つばそでうつ攻撃だ！」

大きく翼を広げて突進してくるズバツ

タイミングが良いのかリザードの混乱が治り、覚えた技

「メタルクロー」でズバツを切り刻んで、倒した

「やった！リザードありがとう！」

「ぐぬぬ…てめえブラックリストになるからなあ？」

そう言い残して、黒い人はどこかへ去っていた

「…あのマーク…R？」

…なんかの略なのかな？」

「グウオ？」

「どうしたの？リザード？誰かいるの？」

ましろはリザードの後ろについていき

壁の向こう側の奥に小さい姿が見えてきた。

リザードに待機と指示を伝えて、ゆっくりと近づいて行く

「（お化けじゃ…ないよね？）」

息を飲むように、ましろはその影の場所まで辿り着く

そこにはピンクの姿をした、ポケモンが倒れていた

「た、大変！…凄い怪我してるよー！」

傷ついたポケモンを抱き抱えてリザードと共に

かけ走っていく、途中で外に出られる場所を見つけ

ましろ達は一度外に出ることにした

お月見山 山外

外に出ると、湖と古屋が建っており

中に入り、調べる人がいなかったため、ましろは古屋の中で

傷付いたポケモンをベットに寝かせて、回復をした。傷の手入れが終わりましろ達は古屋で休む事にした。

「出てきて、トランセル、ピジョン」

手持ちから2匹のポケモンを出して

ましろは傷付いたポケモンの看病をする事になった

「大丈夫かな…」

心配する、ましろの姿を見てリザード達は

ましろに内緒できのみを撮りにいく事にした。

数時間後…

怪我をした、ポケモンが目を覚まして

ましろの方を見る、すると凶鑑が反応し、説明が表示された

「ピツピ…宇宙から来たポケモンなんだね…怪我の治りもいいし明日にはちゃんとみんなのところに戻るんだよ?」

「リザード達もそろそろ…ってあれ?どこにいったの!?み、みんなあ!」



怪我の具合も良くなり、もう少して元気になると確信したましろはりザード達に声をかけようとしたが、いない事に気がつく

「トランセル…って寝てるし!？」

うーん探しに行った方が…いやダメだこの子を置き去りに出来ないよ…」

すると、扉の方から声が聞こえて、ましろは扉を開けると

きのみを沢山持ったりザード達が帰ってきた

「みんな!? もう…心配したんだからね!」

その後、ましろはりザード達に説教を喰らわせていた

今後はしっかりと怒られたかを理解したつもりでいるりザード達であった

お月見山 夜

どこからともなく鳴き声が聞こえて、ましろは目を覚ます

りザード達も目が覚めて、泣き声が聞こえる外へ出た

「びっぴ びっぴ びっぴ びっぴ!」

どうやら、ピッピ達が踊っていたようだった

ましろ達はその光景を見て、月と光で反射してとても綺麗だと感動していた。古屋の

中からピッピが出てきて

ピッピもその集団のピッピ達に入っていく

「あつ、ピッピ」

「びいー！」

ピッピからキラキラと光る石を貰い

ましろは大切にカバンの中へ入れた

「グウオー！」

「ピジョー！」

「か〜ん」

ましろのポケモン達もピッピ達と踊り出していた

その踊りは奴らに邪魔が入るまでは

「いたぞー！」

突然大きな声でピッピ達の踊りを中断させた黒い人達

胸にはRと書かれていた。

「あなた達は!?」

「おいおい今時知らねーのかよ俺達ロケット団のことをさ?」

ロケット団、確か人々達に噂されてる悪い奴ら

ましろの脳裏にそう浮かんでいた

「夜しか出ないと言われているピッピ…俺たちの手で捕まえるぞー！」

「リザードひのこで応戦れ

ピジョンは、トランセルを安全な場所に運んだ後に  
かぜおこしで援護してください！」

「いけ、ズバット達！」

先制で放つたひのこが端つこのズバットに当たり戦闘不能にさせ  
残る5匹がリザードに襲いかかる

「リザード！そのまま防御して持ち堪えて！」

「へー！一匹に何ができる？」

ズバット、エアカッターだ！」

しかし、横から強い風によりズバットの攻撃は無くなつた  
ピジョンが目にも止まらない速さでズバットを倒していく

「隙あり！エアカッターだ！」

ズバットの強烈な風がリザードに襲いかかる

が、風向きが変わり、ロケット団の方へと飛んでいく

「な、何?！」

指示を出したズバットはカウンターエアカッターをくらしい  
戦闘不能へと持ち込んだ。誰かが手助けしてくれたと思ひ

ふと振り返るとピツピが、背後のピツピ達と協力し合いながら、残りのズバット達を片付けていく

「なんだこいつら!？」

「ちっ、撤退だ！覚えてやがれー！」

大勢のロケット団のしたっぱ達は逃げるようにこの場を去っていった

「みんな、お疲れ様良く頑張ったよ！」

戦闘後の終わりには必ずというほどのポケモン達と馴れ合う事は忘れなましろ、ポケモン達は笑顔になっていた

「びっびー！」

「あっ、ピツピ」

先程の戦闘で助けたピツピ達が感謝のお礼として

ましろ達の前で踊り始めた。

しばらくして、ましろはトランセルの方へ向くと、身体が光っていた。

「えっ？進化？」

ピカーンと光でやがてトランセルは、羽が出始めて

やがて、銀色に光る蝶が生まれてきた

「…」

美しさに惹かれ、ましろは凶鑑の説明を見る

名前はバタフリーと書かれていた

「バタフリー……これからよろしくね！バタフリー！」

「フリー♪」

ましろ達は夜が開けるまでピツピ達と

お月見山で踊りを見つめていた

お月見山 洞窟内

ピツピ達と別れを告げ、ましろ達はハナダシテイに向かうため

出口を探していた。道中でロケット団の人達と会ってしまい

なんとか、勝利するが、リザードが毒を受けてしまい

今はリザードをなるべく戦闘に出さないようにしていた

「風の音が聞こえる……この近くに出口あるのかな？」

風が吹く方面へ歩いて行くと、白衣を着た眼鏡の人が

何やらニヤニヤ顔で石？みたいな物を見つめていた

「ふひひ、この化石は僕のもの♪誰にも渡せないもんなあ」

「…」

「ん？誰だ？なんだねちみは？」

まさか、僕の化石を奪いに来たんじゃない?!

何かを勘違いしている白衣の男は取り乱していた

ましろはなんとか説得するが聞く耳持たず

そして、案の定ポケモン勝負する方になった

「ふひひ、いけーコイル!」

「ビー!」

「いってー! バタフリー!」

「フリー!」

相手のコイルのタイプは電気と鋼

対するましろのバタフリーは飛行と虫

相性は不利だが、なるべく短期決戦で持ち堪えたいところ

「バタフリー! かせおこし!」

「ふひひ無駄だよ! コイル電気ショックだ!」

「ビビビビ!」

電気ショックの方が速く、バタフリーは電気技をくらい

戦闘不能になった。焦ったましろは次のポケモンピジョンを繰り出した

「ふひひ! 鳥は電気を通すってわかんないかな」

コイル！もう一度電気ショックだ！

「ピジョン電光石火でコイルの攻撃を止めて！」

電光石火が炸裂し、コイルにダメージを与えた。が

多少の電気技をくらい、ピジョンは片方の翼が羽ばたくなつた

「ピジョ！」

「さて、これでおしまいだ！

コイル電気ショック！」

コイルの電気ショックがピジョンに当たり

ピジョンまでもが戦闘不能になつた

「ふひひ！やっぱ僕つて化石のことになるとこんなにも強くなるんだねーさあトレー

ナーさん！僕の化石は渡さないよ？」

「(どうしよう、さっきの戦闘でリザードは毒を、持つてる

仮にコイルを倒せたとして、毒が身体に回るのは危険

う…こんな時どうすれば…)」

「おやゝもしかしてもう降参ですか？

じゃこの化石は僕のも物だ！ふひひ」

「いえ、まだです (ごめんリザード恨むなら…恨んでもいいから！)」

リザードを繰り出そうとする、その瞬間

どこからか、声が聞こえてきた

「むっ?」

「この声って…」

後ろへ向くと、ピンクの色をしたポケモンがこちらにやってくる

そうあれは一夜を共にした、ピッピの姿だった

「ピッピ!?なんで来ちゃったの!?!」

「びっぴびっぴ!」

「えっ?私を助けに…?」

どうやら、あの時助けてくれたお礼をしたいが為に

ピッピはましろ達に会いに来たようだった

「うん、ありがとう!」

「決まったのかい?まあ僕のコイルは君のポケモン2連勝してるだ

だから勝たせてもらうよ!僕の化石のためにね!」

「ピッピ!往復ビンタ!」

「びっ!」

タイプは不利だが、ピッピの往復ビンタが想像以上に威力があるため



コイルの自慢の鋼ボディが瞬く間にボコボコにされていく  
「嘘ー!?!」

やがて往復ビンタの嵐が終わりを告げるころ

コイルは地面に落ちて行き戦闘不能になっていた

「びっぴー!」

「んあああ僕のコイルがあああ!」

「ピッピありがとう!よしよし」

「うっぐす…仕方ないな僕のお気に入り化石一つあげるよ

「二つはダメだからな!」

「と、とりませんよ…」

ましろはなんとなく左の化石を手に取り

バックに入れた。

「それじゃピッピ。よろしくね?」

「びっぴー」

ピッピをボールに入れて新たに仲間が一人増えたましろは

リザードの毒を早く治すべく、ハナダシテイに向かうことにした。が

「返せ…僕の化石やっぱ返せ…」



## ハナダシテイ編

## 8話

誰かの声が聞こえる

あれ、誰かが私を運んでる…？

あなたは…誰なの…

教えて…

ハナダシテイ ポケモンセンター

目が覚めるとそこは良く見るポケモンセンターの休憩室だ。

ましろは上半身を半分だけ起こし、辺りを見回す

「…私…確か…あの時…」

…あ、リザード…リザードは!?ピジョン!?バタフリー!?ピツピ!?」

ましろの寝ていたところに誰かがやってくる音が聞こえ

扉は開けられる、そこには息を切らした、リーフの姿だった

「リーフ…さん」

「良かった…気が付いたんだね、ましろ

安心して、リザードと他のポケモンは治療室に入ってるからさ？」

その言葉を聞いて安心したのか、ましろはホツとしたが

リーフの、口からこんな事を言われた

「ただね、毒の状態が酷いから

しばらくは旅に連れて行かないと方が良いつてジョーイさんが」

「えっ…それつてしばらくはリザードと一緒に旅ができないつて事…」

「あつ、えーと違う、なんだ？明日くらいには完全に復活するから大丈夫つて話だよ。ごめん！」

「そうなんだ…良かった…」

少しして、ましろはリーフから貰った飲み物をいただき

これまで何があったのかをリーフが詳しく教えてもらった

数十時間前 お月見山

「フシギソウ！つるのムチ！」

「ふしやあー！」

リーフのフシギソウの技が当たり

野生のポケモンは逃げていった

「ふう、これぐらいかな？お疲れ様フシギソウ」

フシギソウをボールに戻し、リーフはお月見山の出方を探していた  
向こう側から怒る声が聞こえてきて、咄嗟のように岩陰に隠れると  
白衣の服を来た音がそのまま通り過ぎていくのを確認した後  
さらに奥へ進んでいく。

「なんだったの？切れてたような気もするけど…あれ？」

あれは、ましろとリザード!? ええ! なんだあんとところに倒れてるの!? それとあれは  
ピッピ!」

後から来たリーフは状況が読み込めずにいたが

リザードの顔色がおかしいことに気がつく

身体に毒が回っている事、それを責任を感じてましろは気を失った事

「フーちゃん、わーちゃん出て!」

フシギソウとワンリキーを手持ちから出して

リーフはましろをおんぶして、残りの2匹はリザードを担いで

ハナダシテイに向かつていった

現在 ハナダシテイ ポケモンセンター

「つてことがあつてね

大変だったよ、リザードは毒が身体に回ってるから急いでポケモンセンターに向かつ

たからさ、それにピツピはずつと貴方のことを看病してくれてたみたいよ」

下を向くとピツピがいた。

リーフは笑いながらましろに伝えていているが、本人が一番大変な想いをしてたから命の恩人だと、そう思うましろであった

「本当にありがとうね、リーフ。リザードのパートナーとして、リザードの所に看病したいの。ダメかな…?」

「うーん?」一応ジョーイさんが、ラッキーに聞かないとわかんないかも

ましろ、今大丈夫なら私について来て?」

ましろはリーフと共に、ジョーイさんの所へ向かっていく

受付には丸いピンクボールがかわりにいて、そのポケモンに事情を話すと、分かってもらうことができ、リザードがいる所へついていくことになった

ポケモンセンター 治療室

「ラッキー!」

頭を下げたあと、ポケモンとリーフはましろを置いて

一人にしてあげる、ましろはカプセルに入ってるリザードの治療をただ、見守ることしか出来なかった。

「……めんね……リザード。あなたが治るように私……ずっと一緒にいるから……うう……」  
すすり泣きが部屋に響いていく

ましろはリザードと一夜を共にした。

ポケモンセンター 受付

リーフは勝手に治療室に入った事をジョーイさんから説教を喰らうかと思っていたが、ラッキーが事情を説明してくれて、今回だけよと

許しを貰った。

ふと、空を見上げると、お月様が雲ひとつもないあたりがとてもよく見えていた。

「……ましろとリザード……か。」

本当ポケモンを愛してるわねあの子……ふふ。きつとポケモンリーグの頂点になるかもね。」

しばらくして、リーフはフシギソウと一緒に眠るようにソファで一夜を明かした。

次の日、ましろは起きて、リザードの状態を見る

リザードは元気に口から火を吹いていた、毒が完全にきれいさっぱりに

無くなっていたからだ。

ましろは喜び、リザードを抱きついた

「良かったあ……本当に良かったよお……うああ！」





その声は、ポケモンセンターの部屋を全体に響くような音が反射をしていた。周りにいた人達はましろに注目して本人は顔を真っ赤にして、ポケモンセンターを後にしたのであった

次回に続く

## 9話

ハナダシテイ 噴水前

ましろは近くにあつた壁に顔をを当てていた

リーフから横から見るましろの顔が怖いと本人はそう語っていた

「ふへへへあ、ダメだよ」

「ましろ……？」

彼女が正気に戻るまで、5分くらいはあの状態にいた

「ましろちゃん、カスミがジム開けてるから」

マサキの家に行かない？ほら、色々、マサキはポケモンの事知ってるからさ？」

「マサキ……うーんカスミさんが居ないならそこに行くしか無いのでしようね……どこに行けば会えます？」

リーフにタウンマップを開いてもらい

この先のゴールデンボールブリッジを通らなきゃ行けない事を伝えられて

ましろはリーフと一旦別れて、一人でマサキの家に向かつていった

ゴールデンボールブリッジ前

「…本当に金色に輝いてる…しかも人が5人いるし…」

「仕方ないよね…いこう」

一歩踏み出した、その時

聞き覚えのある声が始ろが進む方にいた

「ぐ、グリーン!?!なんで」

「な、なんでって…俺はマサキから珍しいポケモンを見せてもらったからその帰りだよ。それよりもましろ、ここであつたのも何かの縁だ

どれぐらい強くなったか勝負しようぜ？」

グリーンはましろにポケモン勝負を仕掛けてきた

ましろもグリーンと同じボールを取り出し投げた

初手に出したのはグリーンはピジョン、ましろもピジョンを繰り出した

「お互いにピジョン同士か！」

それなら俺が先に…」

ましろのピジョン

「ピッジョー！」

ましろの電光石火がグリーンのピジョンに当たり

少しよろめく相手のピジョン。そのまま連続で攻撃を仕掛けてた

「やるな！ましろ！だが！」

ピジョン！ファザーダンスで羽をガードするんだ！」

ピジョンの周りに白い羽が囲むように円ができて

ましろのピジョンの電光石火のダメージを和らげていく

「ピジョン！かぜおこしでファザーダンスをかき消して！」

ピジョンは一度電光石火をやめて、上空に舞う

翼を大きく開けた、強烈なかぜおこしを繰り出した！

「ピジョン！」

フェザーダンスで壁を作っていたピジョンはましろのかぜおこしに巻き込まれていく。

「やるな！ピジョン！そのかぜおこしを利用してやれ！竜巻だ！」

お返しにグリーンのピジョンは自身で竜巻を起こし

そのかぜおこしは竜巻と合体し、ましろのピジョンに跳ね返した

「！ピジョン避けて！」

ましろの指示は少し間に合わず、そのままピジョンは竜巻かぜおこしのコンビで巻き込まれていく。ましろのピジョンには守る技を覚えてないため、ダメージは加速していき

「やるね、グリーン！」

「へへ、さあどう攻撃を避けるんだ？」

余裕そうなグリーンを見て、ましろはピジョンに吹き飛ばしで竜巻と同じ動きをして、と指示を伝えた。大きな翼を竜巻と同じように回転し、

やがて竜巻かぜおこしは吹き飛ばしのおかげで消えたいく

「なかなか面白いやり方するな、ましろ！」

「だか、今回は俺の勝ちだ、ピジョンつばめがえしだ！」

それは、一瞬だった

目には止まらない行動により、ましろのピジョンはグリーンに切りがぎまわって、地面に落ちていく

「嘘でしょ…ピジョン!!」

「ましろが竜巻の方に意識してるときに指示を伝えといたんだ

つばめがえしだ！とね」

余裕の喜びで、グリーンはピジョンに手を振る

ましろのピジョンは目を回していて戦闘不能になっていた

お疲れ様とピジョンに伝えて、ボールの中に入れる

「さすがに強いよ、グリーン。だけど私だって強くなってるんだから！」

ましろは次のポケモンをピッピを繰り出した

「おっ？ピッピか、可愛いよな」

「油断はしない！、ピッピ往復ビンタ！」

「さすがに引つかからないか、ピジョンかわせ！」

ピジョンは空高く跳び、ピッピの攻撃を避けた、とも思つてはいたが

意外にもピッピのジャンプ力がピジョンより高く飛び跳ねて

ピッピはピジョンに抱きつくように往復ビンタをした

「ピーー！」

見事にピッピの往復ビンタがピジョンを叩き込み

ピジョンと共に落ちていき、地面に直撃する直前にピッピはピジョンから降りたつた。

「ピジョンー！」

目を回して、グリーンのパジョンは戦闘不能になっていた

ボールに戻し、次のポケモンを繰り出した。

「いけーガーデー！」

子犬みたいな犬がグリーンの、手持ちから出てきた

…が、様子がおかしかった、息を切らしているようだった

「…グリーン？この子…」

「…あーわりの、ガーディに戦わせてくれないか？」

ましろが言いたいことはわかる、だけど今か目をつぶってくれないか？」

「うん、分かったけど。無理だけはさせないでよ？」

「サンキュー、それじゃいくぜ！ガーディ遠吠えだ！」

ガーディは、大きな声を上げて、自身の攻撃を上げ

すると、先ほどまでの気合が違う感じになり

ガーディは、攻撃を仕掛けた

「ガーディ！ピツピに噛みつく攻撃だ！」

「ガウー！」

素早い動きでガーディはピツピに噛みつく

痛さが先に走ったのかピツピは驚いて動けなかった

「ピツピ！マジカルリーフで攻撃して！」

カラフルな葉っぱを飛ばして、ガーディに向かっていく

もちろん避けてもついていくため、対策をしないとついてくる追尾式だ

だからグリーンはそれを読んでいたかのように炎技を繰り返し出し

焦げて無くなった

「ガウ……」

「(ガーディ……大丈夫かな?)」

「……無理しすぎか、戻れガーディ!」

グリーンはボールを前にだし、ガーディを戻した

「グリーン?」

「悪いな、ガーディは戦闘不能だ、これで最後の1匹だ出てこい!カメール!」

グリーンは最後の1匹である、カメールを繰り出してきた

前に戦ったゼニガメを進化させていたようだ。

「私はこのまま行くよ!ピッピ!往復ビンタ!」

ピッピはカメールに近づこうとしたが、避けられて

もう一度技を繰り出そうとしたが、カメールの蹴りがモロにくらい

ピッピは吹き飛ばされていく

「ピッピ!」

「今のはメガトンキックだ、命中率は低いけど相手が少しの隙を狙ったのさ。さあ、ピッピは立ち上がるかな?」

「ぴっ……ぴい……」 バタンッ

ピッピは戦闘不能になり、ましろボールの中に入れる



ピジョン同様しつかりとお疲れ様とピッピに伝えた

「これで…あつ…」

「ん？どうした？ましろ、リザード出さないので？」

「（今リザード出すと病み上がりだから無理はさせられない…バタフリーで行った方がいいかな？）」

バタフリーが入っているボールを出そうとしたが

リザードが入っていたボールが勝手に開き

戦闘に出てしまい、合わせたましろはボールに戻そうとするが

何回も避けられてしまう

「なんだリザード戦いたって気持ちになってるぜ？ましろ」

「うう、まだ病み上がりなのに…リザード」

「？なんの事か知らないけど、先にいかせてもらおうぜ？」

カメール、メガトンキックだ！」

「っ！避けてリザード！」

カメールの蹴り技が当たりそうになった直前にリザードは回避し

ましろの次の指示を待っていた

「リザード！無理はしないで！」

そのまま接近してメタルクロー！」

「グウオ！」

距離を攻めて、リザードの爪は銀色に輝きカメールに切り裂くが

「からにこもれカメール！」

前とおんなじ戦法でカメールは殻にこもり

リザードの攻撃を受け流した。

距離を一度取りひのこで応戦するが、微かに当たるぐらいのダメージであった。

「しまった、またやつちやつた!？」

「このまま、殻をこもった状態で回転してみずてつぽうでリザードな攻撃だ！」

甲羅が回転するように穴から水が噴射されて、リザードに接近してくる、回避しよう  
と心あるが、水の方が速く技を食らってしまう

少し濡れた状態のリザードは煙幕でカメールの視界をつぶそうとするが、水の噴射に  
より、消されてしまう。

そのまままたもダメージを喰らいながらやがて。カメールの攻撃は止んだ

「リザード!?!大丈夫?」

「グウオ！」

「よし、一気に決める！」

カメール、みずのはどう！」

大きな水の塊がリザードに向かって発射される

ましろはリザードにあることを指示を与えた

「リザード！メガトンパンチで跳ね返して！」

「グウオン！」

精一杯の拳に気合を入れて、リザードはメガトンパンチを放つ

本来なら水は跳ね返さないが、技と技のぶつかり合いなら打ち消すか跳ね返すことができる

「いっけええ！」

「グウオオオ！」

メガトンパンチでカメールが放ったみずのはどうを跳ね返すしカメールに向かっていく。

「カメールよけっ！」

だが、跳ね返したみずのはどうは思ったよりも速度が速く

カメールは避けきれずに直撃をくらい、背中から倒れ込み

目を回しており戦闘不能へとなっていた

「…流石だな、ましろ！」

「やったー！リザード！お疲れ様ー！」

ましろとリザードはお互いの手を拳に変えてタッチをした

「どれ、お互いに傷付いたポケモン回復してやるよ、ましろの

ポケモンも貸せ」

「あ、うんー！」

グリーンにましろのポケモンを預けて

傷の手当てをしてもらった。

お互いのポケモンが元気になったようだ

「ありがとうね、グリーン」

「ま、まあな、そんなぐらいいお安いご様子だ

それじゃ俺は行くからな？」

グリーンは、歩き始めて

手を挙げて彼と別れた。

「また！勝負しよー！グリーンー！」

ましろの声が聞こえたのかわからないが、グリーンの姿は見えなくなっていた、支度を済ませ、彼女はゴールデンブリッジを渡り、マサキの家へと向かっていくのであつ

た

ましろ達の冒険はまだまだ続く

## 10話

ゴールデンボールブリッジをなんとか潜り抜けて

トレーナー6連続戦をやり遂げた、ましろは橋を渡り切り

ふっと一息を付いていた。

それから道なりに進み、湖の近くに一軒家を見つけたましろは

その家に向かうのであった。

マサキの家

「ここだね……」

トントン。と扉を叩くが

中に人の気配……というよりもポケモンの気配を感じ

ましろは一声掛けた後、中に入る事にした。

「誰もいない……？ それにピッピの人形しかない見たいけど……？」

あたりを見回すが、怪しい機械しかなかった

「いないのかな？」

その時だった、ピッピの人形が喋り出した

「ちよつと待てつて！ワイはここにいます！」

「あ…」

その後ましろの驚く声が、近くを通ったトレーナーまで響いたという…

「いや〜急に驚く事ないやんか。」

ワイは悲しいぞ…」

「うん、わかりましたとりあえず喋るポケモンなんていませんし！

そうですよね！ね！ね！」

「ワイはポケモン！

ってノリツツコミしよって言うのか!？」

後に名前を聞くとどうやらこの人？がマサキ本人らしく

ある実験でポケモンと合体をしてみたい、戻そうとするが

ボタンが届かなくて、誰かが来ることを待っていたらしい

「それでこのボタンを押せば良いのですね？」

マサキさん？」

「そうやで！それじゃワイはこの転送マシンに入ってるで」

マシンの中に入るピッピ（マサキ）

ましろは言われた通りに転送マシンのボタンを押した

「これでよし」と

ましろはマサキさんが人間に戻るのを待ちながら  
ある、フォルダーに目を通した

「ブイズ…進化系？」

そこには8匹のポケモンがずらりと並んでいて  
それぞれの特徴などをしっかりと書かれていた。

すると、転送マシンの中から人が出てきて、その人はましろに近づいてきた。

「いやあ、助かったでホンマ命の恩人だわ

何度も言うけどワイはマサキ、色んなことを知ってるで？」

「えっと、始めましてましろって言います」

「助けてくれたお礼にこれをやるで

ワイは船の旅行なんて興味ないからさ」

マサキから船のチケットを受け取ったましろは

パソコンで見えていたブイズ関係のフォルダーを閉じて

改めてマサキに、色々説明を聞いた

「つまり、クチバシテイに行けば豪華船に乗れるって事で良いのですか？」

「せや、ハナダシテイから南の方へ降ってけば、クチバシテイに辿り着くで？そーういえば



ましろはん。ブイズ関係の事調べておったな？

気になったポケモンとかいたんか？」

「あつ…その…この子が気になって…」

「ほほー？このポケモンはグレイシアっていうポケモンやな

カントーじゃほとんど見られないポケモンなんやで」

「えっ？そうなんですか？」

「そうなんやで、寒い所、北の地方ならイーブイから進化させる事は可能なんやがね」

「（いつか、一緒に旅出来たらいいな…）」

「うわーなんだ貴方は!？」

外の方が騒がしく、誰かがいるようで

ましろはマサキと一緒に外へ出ていくと

そこにはロケット団が、人のポケモンを奪う最中だった

「離してください！この子は僕のポケモンで！」

貴方に渡すわけに…うあ!？」

「へへーお前の物はおれのものだ！」

逃げようとするロケット団のしたっぱ

ましろはピジョンを繰り出して、ロケット団の一人を追い詰める

マサキは、盗まれた人の看病をしていた

「いたあ!!てめえ!やんのか!」

「人から奪ったポケモンを返して!」

「いやに決まつてるんだろ!おりや!」

ポケットから煙玉を出して、その間にロケット団のしたっぱは

逃げ出した、深追いする理由がないと判断したましろは

マサキの所へ戻っていく

「お、お帰り犯人は捕まえたのか?」

「ごめんなさい、逃げられました」

あの…大丈夫ですか?」

「うう…僕のポケモンが…サンドパン…スリープう…」

「本当にごめんなさい」

私がおう少し気付いていけば…」

「ましろはんのせいじゃないで?最近ロケット団が人のポケモン奪う事件が後をただないらしいからなあ、ほれ、トレーナーはん

警察の人に通報してやるからましろはんと一緒にハナダシティへ向かうんや」

「えっ…あ、よ、よろしくお願ひしますましろさん」

「マサキさん、またいつか会いましょう！」

ましろと一般のトレーナーはロケット団を追いかけて、

ハナダシティへ向かっていく、マサキはましろ達が見えなくなるまで手を振っていた

リーフサイド

「もう！何よあのぼったくり自転車屋は！」

10億なんて買えるわけじゃないじゃない！」

リーフは自転車屋に立ち寄っていたが、値段が高く

店員に訴えたが、何も意味がなかった

「それにしても、ましろちゃんちゃんとマサキさんと会えたかな？」

そう考えていると、向こう側から黒っぽい服装をきた男性がこちらへ走ってきた、か

なり汗をかいていて、リーフは怪しいと判断して

ボールからワンリキーを繰り出し、通る場所を足止めした

「ぬあ!?邪魔だ！」

無理やり通ろうとワンリキーを蹴り飛ばそうとする男性

だが、ワンリキーの力を甘く見たのか、足を掴まれて

そのまま投げ飛ばされた

「ぐあ!?ち、邪魔しないでもらおうぞー！小娘が」

逆切れをし、手持ちから二匹繰り出した

「ズバァー！」

「ドガァー！」

「いきなさい！フシギソウ！ワンリキー！」

ロケット団と戦う事にした彼女

それは単に時間稼ぎしかないが、腹いせにストレス解消法になると思い、その喧嘩を買ったリーフであった

次回に続く

## 11話

ハナダシテイ

ましろ達が辿り着くと、既にロケット団の一人が、ポケモン達と一緒に倒れていた、その衝動で、警察にはリーフがお世話になっていた。

「リーフさん…何が…」

奪われたポケモンはちゃんとトレーナーさんに返されて

警察の人やトレーナーさんにお礼を言われた

リーフと共にポケモンセンターでマサキに出会ったことを伝えて

1日を終えた。その日の夜

「ましろちゃんいる？」

リーフがましろを探していたようで

ましろはいつもの場所にいたのですぐに見つかった

「どうしたの？リーフさん？」

「いや、ハナダジムのカスミが速ければ明日の夕方にはジムを再開出来るみたいなのよ、それも昨日のうちにね、これだけは伝えにきたよ」

「あ、ありがとうございますリーフさん

それにしても、今日のあれ。凄かったですよ」

「あーあれね…あははまさかましろ達も追つてたなんて知らなくてさ

腹いせにストレスの対象として勝負させてもらったよ」

リーフがストレスを溜めるほどやばかったと、想像してみると

震えが止まらなかった。リーフが頭にハテナを出していたが

ましろは口が裂けても言えるわけではなかった

次の朝、ましろは朝早くから起きて

湖のところへ向かった。朝の気温はとても肌寒くて

ボールからリザードが出てきた

「グオン？」

「リザード…暖かいな…」

ぎゅつとましろはリザードに抱きつく。

ぬくぬくとあつたまってる、足音が聞こえて、ましろ達はその音の方へ向く。そこ

にはリーフの姿があった

「ここにいたんだましろ」

「リーフさん？」

「…つと、ここに座んなよ」

ましろはリーフの近くに座り、朝日が登るのを待っていた

リザードもましろの隣に座りまだ眠いのかウトウトしていた

「リーフさん…あつたかい…」

「甘えん坊さんだね〜まあそこがましろの可愛いところだと思うよ」

「ところで…リーフさん何が用があつて来たんですよね…?」

「よくわかつたねー、そうだよましろに話したくてね」

ベンチから立ち上がり、リーフはましろの方へ向く

「私も貴方達と同じポケモンリーグに挑戦しようかなと思つてるの

でもね、私はましろとこれ以上いたら貴方にまた甘えかしちゃう

だからね、私はここのジムを後回しにして、先にクチバシティのジムの挑戦受けよう

と思つてるの」

「…それじゃ…リーフさんも…?」

「うん、だからね私は朝を迎えたらこの街を出る

しばらくは私は貴方とグリーンもライバルとしてみる

それが…私の決意だから」

リーフはましろに背中を見せて

湖の方へ向く、風と共に彼女の髪はゆらゆらと揺れていた

「リーフさん」

「ん？何かな？」

「すう…はあ…。わ、私は！リーフさんと当たっても私は負けません！

だから、一緒にポケモンリーグにいきましょう！ライバルとして！」

微笑だか、リーフの口は微笑みを見せて

当たり前だよ！とましろに伝えた。

ハナダシテイ 昼頃

リーフと別れたましろは、ミラクルサイクルに立ち寄る事にした

そこにはカラフルな自転車がたくさん置いてあり、じっくりとみるだけでも時間は過ぎていく。だか、自転車の値段があまりにも高く

とてもじゃないがましろのお小遣いではとても足りなかった

「た、高すぎる…いくらなんでも10億って…」

「お客さん？買いますか？」

「ひゃい!!いや…見てるだけで充分です」

店員は、少しがっかりした表情でみていた、値段を変えない限り

誰も買わないと思うと心の中でそう思うましろ。



「あら？ 貴方自転車が欲しいのかしら？」

他の自転車を見ていた、青いキャップをかぶってる女性の人が

ましろに話しかけて来た。ゴルフアールの人だろうか？

「え？ いや私は……」

「でも欲しそうな顔していたわよ？」

「……はい」

誘惑に負けた、というよりも女性の気圧感が半端なくて

それに負けたましろ、ゴルフアールの女性は店長にあるカードを見せた

店長の顔が青ざめた表情で口をガタガタと震えていて

ましろに似合う自転車をプレゼントとして、ましろは礼をいい自転車を受け取った

「あ、あ、ありがとうございます」

涙目になる店長。

ましろと女性はその自転車をあとにした

ハナダシティ 噴水前

「あ、ありがとうございます。」

「良いのよ、あれぐらい安いものよ

それにしても貴方ジムを周りながら旅をしてるのかしら？」

「あ、はい…そうですね。私の名前はましろって言います」

女性はましろの名前を聞いたあと

自分の名前を言おうとしたが、電話が入り

名前を聞き損ねた。

「それじゃね、ましろちゃん

どこかで会えると良いわね、アローラ」

アローラ、と言いつ残して。女性の人はボディカードの人とどこかへ行ってしまった、ましろは、時間をみると、カスミが帰ってくる時間がもうすでに過ぎてる事に気が付き、急いでハナダジムに向かつて行った。

ハナダジム

中に入るとプールが広がっていて

泳ぐ人や、子供のトレーナーなど沢山いた。

ましろはジムの人であろう、人に話しかけた

「あの」

「ん？貴方ね？タケシから新米のトレーナーがいるって聞いて

予定よりも早めに終わらせて来てみたら、女の子だったのね？」

オレンジ色の髪をした少女はましろに近づき

観察を始める、周りの人たちもぞろぞろと集まってくる

「あわわ！私はただカスミさんにジムを挑戦しに来ただけなのですー！」

「カスミさんに相手挑むの!?!勇氣ある子だな！」

「おてんば女のカスミに勝てるかな？」

「おねーちゃん達ガンバレー！」

などの、批判や応援など沢山あり

大いに盛り上がったところで、本題へ移る

「良いわよ、受けて立とうじゃない！」

知っているとと思うけど私の名前はカスミ！

水タイプ専門家よ！」

「わたしはましろって言います！」

よろしく願います！」

「良いわね、その意気込みだけは認めてあげるわ！」

でもね、アタシのポリシーわね！水タイプのポケモンで責めまくる事よ！」

こうして、カスミとましろのジムチャレンジが今

始まろうとしていた

ましろ達の戦いは次回へ続く

# 12話

ハナダジム

審判員

「これから！ジムリーダーカスミとチャレンジャーましろの対戦を行う！それぞれお互いにポケモンを出し、戦闘不能にさせれば勝ちだ。交換の自由はチャレンジャーのみとする！それでは両者！」

旗が上がり、そして

「勝負開始い!!」

旗が降り立ち、勝負が始まった

「いきなさい！ヒトデマン！」

「シュワ！」

星形の形をした、ポケモン。ヒトデマンを繰り出して来た

対する、ましろはバタフリーを繰り出す

「へえ！空中でこのヒトデマンを倒そうって事ね！」

「フリー」

「バタフリー！空中で眠り粉を撒いて！」

「そうわせせないわ！ヒトデマン！ハイドロポンプで

バタフリーに狙いを済ませなさい！」

ヒトデマンのハイドロポンプは勢いが強く、バタフリーが

ギリギリに避けられるラインだった、バタフリーの羽から眠り粉をばら撒くが、すぐ

にヒトデマンは水の中に入って粉の影響を受けなかった

「バタフリー！どこから飛んでくるか判らないから気を付けて！」

「(どこから飛んでくるんだろう…水中の中だと判らないよ…)」

「今よ！ヒトデマン、ハイドロポンプ！」

「フリー!?!」

水が始めだ所をかわした、バタフリーだったが

「残念それはフェイクよ！」

かわした先には、水が飛び出してくる。

さっきのは幻覚で、今出て来たのがハイドロポンプの本物であり

直撃をくらひバタフリーはボートの上で倒れ込み戦闘不能になった

「お疲れ様バタフリーゆっくり休んで」

「やったわね！ヒトデマン」

「シューワ！」

「一つ聞きます、いつのまに幻覚をしていたのですか？」

「あの時よ、貴方がバタフリーと警戒してる時に

怪しい光で幻覚を見せて混乱させてたのよ」

「まさかあの時のハイドロポンプの中に怪しい光という技を混ぜていたって事…？  
だったら混乱させられる前にヒトデマンに技を出さなければ良いのかな」

「さ、次のポケモンを出しなさいましろ！」

ましろはボールを取り出し、ピッピを繰り出した

ボールの上に乗るとバランスが取りにくいのか、ピッピが落ちそうになった

「ピッピ！なんとかバランスをとって！」

「びいー！」

「やるわね、でもわたしの方が有利ね、ヒトデマン！」

スピードスターで攻撃して！」

ヒトデマンの先から星形の技が出てきて

ピッピの方角へ飛んでいく

「ピッピ！マジカルリーフでスピードスターを打ち消して！」

ピッピも負けずにマジカルリーフで迎撃をする

お互いの技の打ち合いが決まり、出した技が消えていく  
「良いわね！だけど！ヒトデマン水中に隠れっ！」

その瞬間、指示を送る前にマジカルリーフが飛んできて  
ヒトデマンにダメージを与えていく

一度は水中に落ちそうになったが追尾草がそれを許さなかった  
「なっ!？」

カスミ本人も驚いていた、何故なら先程の技のぶつかり合いで  
全部消えていたマジカルリーフの残党が残っていた事に気付かなかった

「ナイスだよ！ピッピ！」

「びい♪」

「このまま、もう一回マジカルリーフ！」

ましろのピッピはもう一度同じ技を繰り出す  
流石に見切ったのか、カスミはヒトデマンに

回転しながらマジカルリーフを切れと指示した

「よしこのまま高速スピンドで倒しなさい！」

スピンドをかなり上げて、ピッピに突撃するヒトデマン

だが、一瞬の油断が命取りだった

ピッピはヒトデマンの攻撃をギリギリに避け。

ギリギリなところでヒトデマンの先を掴み

スピードを納めて、手を大きく開けて

「往復ビンタ！」

ましろはピッピにそう伝えた

「びいー！」

ビンタの音が大きく鳴り響き

ヒトデマンの先っぽが折れていく、再生が間に合わず

赤い宝石がピコンピコンとなっていた

どうやら戦闘不能に出来たようだった

ピッピは一度ヒトデマンから離れてましろの方へ戻っていく

「ヒトデマン！戻って！」

カスミのヒトデマンはボールへ戻り

もう一匹のポケモンを繰り出そうとしていた

「ましろって言ったかしら？」

貴方強いわね、ポケモンのことをしつかりと育ててるし流石ね！」

「カスミさんも強いですよ！でも私は負けるつもりはないから！」



「言ったわね！、なら私の最後の一匹を倒すことは出来るかしら？ 行きなさい！ あたしの相棒 スターミー！」

ヒトデマンの進化系だろうか。

さつきの色と違い、大きさもだいぶ大きくなっていた。

「スター！」

「ピッピ、まだいけるよね！」

「びい！」

「いくわよ！ スターミー10万ボルトよ！」

身体から電撃を放ち、ピッピに目掛けて飛んでいく

ピッピは、避けるが、水が飛んだ瞬間、電気は流れ込み

ピッピを感電させた

「ピッピ！」

「ここは水のフィールド、水は電気を通す

さあ！ 貴方はどうここを攻略するか！ 楽しみね！」

「ピッピ！ マジカルリーフで迎撃を！」

マジカルリーフを飛ばすが

対策されてしまう、電気技の他に超能力を使うことができていた

「サイコキネシスよ！スターミー！」

「びっ?!びいー?!」

空中に浮かばされる、ピッピ

ましろはなんとかして技を繰り出そうと指示をするが

指先を動かすことができていた

「そのまま地面に叩きつけてやって！」

「スターア!!!」

ピッピを地面に3回ぐらいは叩きつけてやり

スターミーの技が終わるとピッピはその場で倒れ込み、戦闘不能に落ちいていた。

「お疲れ、ピッピ…ありがとう」

ボールを戻し、ましろはリザードを繰り出した。

「グオン！」

「あら？水タイプに、不利じゃないかしらね？炎タイプは相性悪いわよ？」

「知ってます、だからリザードで向かい撃ちます、いけるよね？」

「グオンンン！」

「良いわね！私も本気でいくわよ！スターミー！ラスターカノンよ！」

「向かいあつて、リザード！メガトンパンチ！」

ジムリーダーカスミVSチャレンジャーましろ  
果たして勝負の行方は果たして…次回へ続く

# 13話

ハナダジム

「グオン！」

メガトンパンチが、スターミーの赤い部分に当たり

スターミーが放った技がリザードの腹部にあたるがダメージはそこまででかくは無かった。

「スターア!!」

負けじとスターミーは踏ん張った後水中の中へ入っていく。

「スターミー！私が出て良いよって言うまで水中に隠れてなさい！」

リザードは水の中には入れないわ！」

「うっ…リザード一旦陸地に戻って！」

「グオン！」

リザードはましろと同じ陸地に戻り

体勢を整える、いっどこでスターミーの技が飛んでくるのか

わからない状況の中、水の中にある影が出て来た

「今よ！スターミー！冷凍ビームでリザードにあてなさい！」

水中の中から飛び出し、リザードはスターミーの技を避けるが尻尾の炎に当たり、みるみるうちに凍ってきた。

ひんやりしているのか、リザードの動きが少し遅くなっていた

「リザード！ひのこで溶かして！」

「グオンン！」

ひのこで尻尾の氷を溶かそうとするが、火力が出ないため、氷を溶かすことができなかった。リザードはスターミーの攻撃が来ると予測して

水のフィールドのボートへと戻り出した

「あら、氷を溶かささないのね？」

だったら私が氷を砕けさせてあげるわ！スターミーサイコネシスよ！」

「そうはさせません！リザード、スターミーにりゆうのいぶきを放って！」

リザードの青い炎がスターミーに向かって飛んでいく

スターミーの技よりも速く、避けきれずにダメージをくらう

再び水中の中に身を隠す

「やるわね、だけど次は同じ手を喰らわないわ！」

「グオン…グ！」

リザードも水の溶かそうとひのこでやっているがとてもじゃないが溶けるにも時間がかかる。その間にカスミのスターミーは次の技を繰り出そうとする

「スターア！」

「スターミー！ハイドロポンプで決めなさい！」

「グオンン!!」

「リザード避けて!!」

だか、ましろの指示は遅く

リザードはスターミーの水技をくらい、カスミのいる方へと飛ばされていき、壁に激突する。その衝撃で氷は砕けたり、炎の尻尾はいつも以上に燃え上がっていた

「グオオオオオオオオオオン！」

「嘘!?!猛火を発動したの!?!」

「り、リザード？」

「グオオオオ!!」ギロツ!

「スターア!?!」

リザードのいつもよりも怖い目つきでスターミーに遅いかかる

逃げようとするが、リザードは先程の同じ事スターミーに壁に向けて

激突させてた、口からものすごい炎が口からでてきて、ひのことは違う技を繰り出してた。ましろはリザードに一度距離を取ってと指示したが

暴走気味なのか主の声に全く耳を貸さないリザードの姿だった

「スターミー！ハイドロポンプで押し返さない！」

カスミはスターミーに技を出すようにと指示をしたが

リザードはその隙を逃さなくて、もう一度口からりゅうのいぶきなどを繰り返していた

「リザード！落ち着いて……っ!？」

熱気がとても熱く、ましろは近づくことすらできない

「まずいわね、ましろ！リザードにボールに戻さない！じゃないと

このままじゃスターミーも貴方のリザードもどちらか死ぬことになるわ！」

「……戻ってボールに！」

ボールで戻そうとするが、熱気が邪魔しているのかりザードを戻すことができない、カスミもスターミーを戻そうとするが、無理があつた

「……リザード！」

ましろは暴走しているリザードに近づき

熱気が酷いが、我慢して、一歩ずつ歩いていく

「ましろ！危ないわよ！離れなさい！」

審判員

「カスミさん、まずは子供たちの避難をさせた方がよろしいかと」

「そうね、みんな！ジムから出なさい！私達がなんとかするから」

ジムにいた人達は外へと避難して、カスミはましろがいる所へ向かう

「ぐっ…はあ…はあ…リザード…落ち着いて…ね？」

ましろはなんとか暴走リザードのところに辿り着き

抱きつくとするが。

想像以上の暑さにめまいがする、ましろ

「うう…リザード…私だよ…ましろ…だよ…」

「グオオオオオオンン！」

近づいたからか、リザードはましろの声を聞いた。

隣にいるスターミーを見ると、すでに戦闘不能になっている状態だった。

「リザード…もう…終わったよ…だから…落ち着いて！」

私は、嫌だよ…またリザードが無理するところ嫌だよ…」

「グーグオオオオオ！」

少しづつだか、リザードの熱気はだんだんと治まっていき



いつしか、ジム全体に広がっていた、暑さは平常に戻っていく

カスミと審判員が、ましろ達のところへ駆け寄り、カスミはスターミーを戻したあと、審判員と共に気を失っているましろとリザードを医務室へ運んでいく。

ハナダジム 医務室

「凄い火傷、普通の人ならこんな事しないわよ…本当

無茶だけはするんだから」

カスミは、医務室で運ばれたましろの姿を見て

少し驚いていた。リザードは治療室で回復をしているところだった

「う…ううん…？はっ…ここは!?」

「おはよう、ましろ」

「えっ?カスミさん?」

えっえっ?あの試合はどうなったのですか?」

「落ち着きなさい、私達が貴方達のところにとどり着いた時は

わたしのスターミーが戦闘不能になっていたわ。その間にましろ達をここに連れて

きたのよ、あとリザードは別のところで治療受けてるから問題はないわ」

カスミの言葉を聞いて安心するましろ

部屋を見回して、机にましろの手持ちであるボール達があり

手に取った。

「あら、ましろ貴方火傷の跡があるのよ

無理に立ち上がったらだめよ！」

「ですが、うつ…!？」

いたあ…」

涙目になるましろ、火傷の跡は響いていた

カスミはやれやれと、言いながらも、ましろと肩を借り

再びベットへ戻された

「今日は安定してなさい、後で貴方にポケモンリーグ公認のバッチをあげるから、それじゃ私はジムの後処理しなきゃいけないから」

そう言い、カスミはましろの部屋を後にする

身体が痛むましろは仕方なくベットで一夜を明かすことになった

次の日、火傷の調子が良くなっていき

ましろは、リザードがいる治療室に向かいに行く

中に入ると前とは別に元気に火を吹いていた

「リザード！、良かったあ！」

「グオン!？」

驚いたのかりザードはその場で尻を打ち、ましろを大事そうに抱きついた。しばらくして、カスミがやってきて。

昨日戦った場所に行くことになった

ハナダジム

「はいこれ、ポケモンリーグ公認のバッチを貴方に捧げるわ」

カスミから、ジム公認のブルーバッチを貰ったましろは

大事そうにバッチケースにしまっていく。

「あと、昨日は済まなかったわね

本来ならジム側の責任でリザードの暴走を止めるべきだったのは

アタシだったのに」

「別にカスミさんが責める理由なんてないです

私がリザードの特性を知っていたらこんな事には…」

「そうよね、もし何かあったらアタシを呼んでね？」

いつでも貴方の手助けをしてあげるから」

カスミは笑顔でましろに挨拶を交わした

ジムにでて、ましろは次の目的地を向かうため、タウンマップを開き

次の場所を確認した

「クチバシテイこつからだど、南を下つていくんだね？良し！頑張るぞ！」  
「ましろ、いるかしら？」

カスミがジムから出てきて、ましろにある事を伝えた

どうやら、ヤマブキシテイという所はわけがあつて入れないと教えられて、今度こそ、ましろはパートナーのリザードと共に

クチバシテイに向かうのであつた。

ましろ達の旅はまだ続く

## クチバシテイ編

## 14話

ヤマブキシテイに入る建物がそびえており

中に入るが警備員さんに足止めをされて

ましろは近くにあった、ハナダシテイからクチバシテイに通じる

トンネルを通っていく。

中は、薄暗く、ましろはりザードとバタフリーを出して灯りを灯した

真つ直ぐに続いていた。

「りザード、バタフリー、お願い。は、離れないでえ」

涙目になるましろ、バタフリーは上で光を照らし

りザードは炎の尻尾で周りを照らして

ましろを守っていた。

階段から光がさしていて、ましろはりザードとバタフリーをボールに戻して、地上に出る。そこは潮風がましろを貫いていき

外の空気を吸ったましろの姿があつた。

「あそこだよね、クチバシテイは？」

丘から見た景色の向こう側に青い海が見えて

そこには街並みがあつきりと見えていた。

「よし、図鑑も集めつつクチバシテイに向かおう！」

張り切っていく、図鑑完成のために各地のポケモンを

探し求めている、時間は過ぎていき

クチバシテイの範囲のポケモンを全て登録をした。

「お疲れ様、リザード！」

そろそろクチバシテイにいこ！」

クチバシテイにたどり着いたのは夕陽が沈む頃だった

ましろは近くのポケモンセンターにより、一夜を明かす予定でいた

クチバシテイ ポケモンセンター

「はい、お預かりしたポケモン達は元気になりましたよ」

「ありがとうございます。」

ポケモン達を回復してもらい、ましろは空いてる席に座り

ポケモン達を出して、共にご飯を頂くことにした。

「頂きます」

リザード達はましろが出してくれた

ポケモンフードを美味しくそうに食べており、みんな嬉しそうな表情をしていた。ご飯を食べていると、横から声をかけられて

振り返ると、リーフの姿があつた

「ましろじゃん、その様子だと勝つたんだね？」

「はい、カスミさんから貰いましたよ、ブルーバッチを」

「おめでとう〜♪私から大したお礼はできないけど

これあげるよ。」

リーフのカバンから釣竿をだし、ましろに渡した

「釣竿…ですか？」

「ほら、ポケモンって陸だけで暮らしてるわけでもないからさ」

空に、海に、いろんなポケモン達もいるしき。持ってた方がいいと思うよ？」

「そうですね…ありがとうございますリーフさん」

「うん、あつ、それとねこのマチスさんだけどね」

リーフの話によると、ジムの前に邪魔な木があつて

クチバシテイの豪華船にいる、いあいぎり達人の人から教えて貰わないといかないと  
教えられた

「その、豪華船っていつまでクチバシティの港にいるんですか？」

「えーと、確か乗客の確認と船長の体調が良くなったかな？」

ほら、マサキから船のチケットとかあるよね？それ見せれば入れるよ」

「そうなんですけど…その…」

「ん？どしたの？」

ましろは頬を赤くして、リーフにこう言った

ドレスを着ないといけないのか？」と

リーフは、笑っていた

いつも通りの服装で大丈夫だよ、ましろに伝えた

「それと、明日私はハナダシティに行ってジム受けてくるから

お互いに頑張ろう！」

「うん！」

クチバシティ 夜 ポケモンセンター 屋上

冷え込む夜、冷たい潮風がましろに当たる

ましろは、上を見上げていて、お月様を見つめていた

「…みんな出てきて！」

リザード、ピジョン、バタフリー、ピッピがましろの投げたボールから



飛び出し、みんなを抱きつくように空を見上げた

「綺麗だね？お月様」

「グオン」「ピジョー！」「フリー♪」「びい！」

それぞれの声が一つに変わる

しばらくして、ましろ達はポケモンセンターに戻り、深い眠りに付いた。

「お休み、みんな」

## 15話

クチバシテイ 港

いくつかの船が海の上に浮かんでおり

一番高い船が止まっていた。船のチケットを受付の人に見せて

ましろは、豪華船「サント・アンヌ号」に乗り

いあいぎり達人の船長を探す事にした。

サントアンヌ号 F1

様々な人達とすれ違いながら時に、ポケモン勝負を仕掛けにくる人もいたりし、ましろは情報を集めながら、船長を探していた。

甲斐に出ると潮風に煽られて、ましろのスカートはめくられそうになりつつ、両手で抑えて、広い海を眺めた。

「わあ……すごい……」

空や海からもポケモンが出てきて、ましろはそのポケモン達に手を振ったりなどした。外から中へ入り、さらに奥へと進んでいく

左の奥の方に階段が見えてきて、ましろはその先に向かうとすると

階段からグリーンが、降りてきて。外国の挨拶をましろに交わした

「ボンジュール、あれ？ましろもこの豪華船に招待されたのか？」

「ボンジュール、ううん。私はマサキさんから船のチケットを貰って色々見学しながら船長を探してたの。船長はこの上にいるの？」

「ああ、と言つても俺はクチバシティのジムを攻略した後だからな

ほら、ジムバッチだぜ」

グリーンは、金色に輝くバッチをましろに見せつけあと。

大事そうにバッチケースにしまい。かわりにボールを手に持ち

こちらに向けた

「せっかくここで会えたんだ、どれくらいましろがクチバシティに挑める強さか、確かめてやる！勝負だ！」

「わ、わかった！いくよ！グリーン！」

お互いにポケモンを出し合い、船の中での戦闘が始まった

「ガウ！」

「フリー♪」

グリーンの相手のポケモンはガーディ、以前に見せたポケモンであり息切れが激しかったが。今は落ち着いている状態であった

「グリーン？ガーディの具合は大丈夫なの？」

「なあに、心配すんなって。ましろ。」

それよりも油断してるとバタフリーが倒れるぜ？」

ふと目を離れた際に、バタフリーはガーディ炎技の攻撃を受けていた

「ば、バタフリー!?!」

ましろのよそ見の原因でバタフリーは戦闘不能になり、急いで

ボールの中に戻し、次のポケモンを繰り出した

「ピジョン！」

「ピジョン！つばさでうつで反撃して！」

ピジョンの速さはガーディの速さよりも速く

そのままガーディは攻撃をくらうが、吹っ飛ばされた反動で壁に足をつけて、加速し

て、ピジョンにほのおの牙をくらわせた

「ピジョン!?!」

避けた、後ろには壁があり、ピジョンはそこで壁に迫られていた

ガーディはもう一度、ピジョンに攻撃を仕掛ける

「ピジョン！ガーディに吹き飛ばしした後で電光石火で向かい合って！」

翼を大きく広げて、強い風を巻き起こす。ガーディは風に乗せられて

流されていく合間にピジョンは目にも止まらない、電光石火を喰らわせた。

「ガウ!?!」

「ガーデイ! かえんぐるまで押し返せ!」

身体に炎を纏い、ガーデイはピジョンに向けて突進をしてくるが

電光石火の方が早く、ガーデイの技はあたるところがなく

空振りで終わった

「ガウ…ガウ…」

「今よピジョン! つばめがえし!」

ほんろうし、ピジョンの翼はまるで刀のようになり

ガーデイに一撃を喰らわせたあと、倒れ込み。戦闘不能へとなった

「戻れ、ガーデイ」

グリーンはボールに入れたあと、なにかを呟いていたが、全く聞こえずにいた。そう

しているうちに次のポケモンを繰り出してきた

「でな、ピジョン!」

「ピジョ!!」

「ましろ、こっから本気出すぜ!」

「負けないよ! グリーン!」

ピジョン同士の激突が、ましろ達の周りに響き

やがて壁に穴など空くのではないかと心配されていたが。

思ったよりも頑丈で作られているため、ちよつとの衝撃では目立たないようだ。

「ピジョン!？」

「!ピジョン!つばさでうつでグリーンのパジョンに近づいて!」

「そうはさせるか!ピジョンこつちもつばさでうつ攻撃をしろ!」

お互いのつばさでうつが炸裂し、そしてその衝撃で。お互いのピジョンは地面に落ちていくように引き寄せられて、両方とも戦闘不能になっていた。

「やるな(ね)」

「次はこいつだ、いけ!ユンゲラー!」

「いって!ピツピ!」

「先制は先にいかせてもらおう!ユンゲラーねんりきでピツピの動きを止めろ!」

ユンゲラーは、スプーンを前に差し出して念を送る

するとピツピは、宙に舞い。思うように遊ばれていた

「びい!」

「ピツピ!マジカルリーフでユンゲラーに集中を切らして!」

なんとか、指先を動かして、ピツピは技を放つ

七色の葉っぱは、ユンゲラーに当たり、念が途切れピツピはねんりきから解放された。「やるな！だか、これからだぜ？ましろ！」

「うん！」

グリーンと、ましろのポケモンは残り2匹ずつ

果たして、どちらが勝つか。

次回へ続く

## 16話

サントアンヌ号

「びいー！」

ピツピの往復ビンタが、ユンゲラーにあたり

ユンゲラーの両方の顔が赤くなった。お互いに体力が切れつつも

負け時にユンゲラーも特殊技を使い、ピツピを床や壁などを何回か当てたりしていた。

「びい、びい……」

「しゅら……しゅら……」

「ユンゲラー！踏ん張れ！」

「ピツピ！そのまま！往復ビンタ！」

先に動いたのはユンゲラーではなくピツピだ。

最後にピツピの往復ビンタが決まり、ユンゲラーはその場で倒れ込み

気絶させた。グリーンはユンゲラーをボールに戻し、カメールを繰り出してきた。

「カメール、また厳しくなるが頼むぜ？」



「カメエー！」

やる気の満ちた表情でカメール戦闘体制へ移行する

「ピッピ、戻ってきて」

ましろのところへ戻り、ピッピはこれ以上の戦闘は無理と判断した彼女は。頭を撫でた後、ボールに戻した。

グリーンと同じ、リザードを繰り出し。カメールと対面をする

「グオンー！」

「カメエー！」

睨めつけながら、どちらが技を出すのか様子を伺っている二匹のポケモン。緊張感が走る中、先に先行したのはカメールの方だった。

「カメール！みずのはどう！」

「リザード！メタルクローで、跳ね返して！」

水の塊がリザードに向かって発射される同時に

リザードを爪が銀色に輝き出し、両腕をバツテンにし

カメールが放ったみずをはどうを跳ね返した。が

その不意を突かれ、カメールの技がリザードに喰らう

「かみつく攻撃だ！カメール」

「グオン!？」

「カメエー！」

避けてと、指示をしようとしたが間に合わず

リザードは噛み付かれて、必死に追い払おうとするが。

なかなか離れずにいた。

「えつと……り、リザードに……りゆうのいぶきを出して！」

「グオン！」

痛みを耐えつつ、リザードの口から青い炎が放出し

カメールに直撃を喰らわせたかに見えたが

「嘘!？」

「ふう、さすがに今のは危なかったな。ナイス判断だ、カメール」

噛み付いている間、攻撃が来るだろうと予測していて

攻撃をくらう前にカメールは自分の甲羅に身を隠し

リザードが放つたりゆうのいぶきを耐えきった。

驚いて身動きが取れないましろを見たグリーンはましろに話しかける

「ましろ、まだ勝負は終わってないぜ?」

「……そうだね、リザードまだいける?」

リザードはましろに向かつて首をこくりとして。

カメールの方へ向く。気合が入るような雄叫びを出して

リザードは、口から強烈な炎技を放った

「グオオオン！」

「！カメール避けっ！」

カメールは回避が間に合わず、リザードの行列や技を喰らい

自慢の甲羅が熱くなり、殻に止まることができなくなつたカメール

「今の技、かえんほうしやだな。いつのまに覚えたんだ？」

「多分だけど、ハナダシテイで覚えたと思うけど……ひのこじゃないんだね、でも凄いよ！」

リザード！」

「へっ、やつぱおもしろーよ。ましろは！」

だか、この技で決めてやる！カメール！アクアテールで迎え撃て！」

尻尾を水のような刃物に変えて、カメールはリザードに向かつてくる

リザードもさつきと同じ技を繰り返そうするが二度目が出ず

一度、避けて距離を取った

「私もこれで決めるよー！リザード！切り裂く攻撃！」

お互いの技がぶつかり合いそして

「カメエ!!」

「グオオン!!」

アクアテールは、リザードのお腹に当たり

または、リザードの切り裂く攻撃はカメールの頭を切り刻んだ。

着地し、お互い背中を向き合い。先に倒れたのは

「グオ…」

リザードは目を回して、戦闘不能になっていた。が。

対するカメールも流れるように、倒れて、戦闘不能になり、

結果は、了解とも引き分けとなり。勝負が付いた

「ひ、引き分けか…」

「なあに、こういうのも経験だろ」

ほら、ましろのポケモン達回復してやるからこつちに渡しな」

ましろはグリーンズのポケモン達と回復を済ませた

「なかなか楽しめたぜ? ましろ、次会うときはまた勝負しようぜ。それじゃあなましろ」

「うん、グリーンも気を付けて」

グリーンと別れて、ましろは船長がいる部屋に辿り着く

すると、ゴミ箱に顔をつつませていた船長の姿があり

慌てた様子でましろは近づき、船長の背中を優しくさすってあげた

「うっ…ぬ…助かったよ。君は？」

「ましろって言います。ここに来ればいいいきりの達人に会えるとお聞きしまして。」

「なるほど、分かった。さっきましろちゃんに、助けて貰ったから

お礼に教えてあげよう。」

ましろは、リザードを出していいいい切りを覚え込むため一緒に見ることに。船長は、一つの木を立てて、刀を持ち気合を入れて、すると

その木は真つ二つに切れていく。

「ふう…これがいいいい切りのやり方だよ。」

「ありがとうございます、船長さん」

「ほっほっ良いんだよ。」

…さて、気分も良くなったしそろそろこのサントアンヌ号は出発時間だ。ましろちゃん、旅は辛いと思うがポケモン達がいる事を忘れずにね。君は一人じゃないのだからね」

「はいー」

船長と別れを告げ、ましろはサントアンヌ号から外に出る

ちようど良いタイミングで船の煙突から煙が始めて

ゆつくりと進んでいく姿にましろは釘付けになった。

完全に見えなくなるまでましろはサントアンヌ号を見届けた後  
ジム戦に向けて、ポケモンセンターで休む事になった

## 17話

クチバジム 入り口前

大きな木を、ましろはサントアンヌ号で教えてもらった船長から

いあい切りをリザードに指示をして、ようやく大きな木は真つ二つに切れて、後がたもなく消え去った。

撤去したおかげでクチバジムは再開をし。

ましろ達は万全な準備をしながらクチバジムへと向かっていく。

クチバジム

中に入ると身体中に電気が走り。ましろはピリピリを感じていた。

広いフィールドの真ん中に背が高い人が腕を組み

何かを待っている様子だった。

「あ、あの……」

「オー？アラタナ挑戦者デスネー！」

ハジメマシテ！ミィはマチス！戦争でエレクトリックでポケモンを使い生き残った

者ネー！」

「は、初めまして。ましてと言います

マチスさんにチャレンジしに来ました…」

威圧感がすごく、ましては緊張気味でマチスと会話をした。

「オー！オー！オレにチャレンジシニキタンデスカー！」

OK、早速バトル開始スルカネ？」

「はい！」

両方二人は、指定された場所に移り

審判官の声と共に、お互い礼をして。

バッチをかけた勝負が始まろうとした

「イケー！ビビリダメ！」

モンスタールボールと同じ色をしたポケモンを繰り出してきて

ボールのように丸く、表面には顔がニコツとしていた

ましては、バタフリーを繰り出した

「フリー♪」

「オーバタフリーデスネ！それではイキマスデス！」

「それでは！マチスVSチャレンジャーまして！

両者！ポケモンバトル開始！」



「バタフリー！ねむりごな！」

バタフリーは上空で、羽から甘い匂いの粉を振り撒く

下にいる、ビビリダマに降りかかるが

「オービビリダマ！こうそくスピンドで追い払うのデース！」

「ビリー！」

ボールが右回転し、風が舞い上がり、上空にいたバタフリーもねむりごなと一緒に巻き込まれていく。

「嘘!?そんな使い道があるんなんて…」

「ウマク、技を使うのがコノバトルには大事かとおもいマース！」

ビビリダマ！ソノママスパークでバタフリーに痺れさせるのデース」

電気を身体にまとい、突進するビビリダマ

地面にへばりついているバタフリーをましろは指示を伝えた

「バタフリー！転がって！避けて」

羽を縮めて、バタフリーはビビリダマの技をギリギリに避けて

難を逃れたバタフリー、そのまま空に飛び。次の技を繰り出した

「バタフリー！エアスラッシュしながら、動きで攪乱しつつ接近して！」

バタフリーはビビリダマに向けて発射をするエアスラッシュを出しつつ

動きで攪乱をし、徐々に近づいていく。怯んだ隙にバタフリーの技が炸裂する。

「むしくいでビビリダマに攻撃して！」

勝った、という油断がましろにはあった。

マチスはニヤツと笑い。ビビリダマに技を指名し

ビビリダマの体が光だして、自爆の餌食に飲み込まれた

「ば、バタフリー!?!」

少し黒影になる、ビビリダマ。

ましろのバタフリーは戦闘不能に落ちいていた。

「バタフリー！戦闘不能！」

「オーノーオシカッタデス！あと少し遅ければビビリダマがマケルトコロデシタヨ！ナ

カナカ良い判断でした！マシロクン！」

「お疲れ様、バタフリー。ゆっくり休んでね」

あと一步、そう思った瞬間に返り討ちを喰らうましろ

その悔しさを堪えて、次のポケモン。ピッピを繰り出す

先程の戦闘でビビリダマは弱っているため。

その戦闘はましろが有利かと思われていたが

「オワリネー！ビビリダマソニックブーム！」

先程のバタフリーの件で引きつっていたのか、ましろはピッピに指示を送るのを忘れて、相手の攻撃を許してしまい。

素早い攻撃に反応が遅れてしまう。

ピッピは、なす術もなく、倒れてしまう。

ましろは少し不安そうな表情でボールを見つめた

「ごめんね…バタフリー…ピッピ

私がしっかりしてれば…」

落ち込む姿を見たマチスは大声でましろに一言伝えた

「チャレンジャーマシロクン！」

まだ！勝負はツイテナイデース！

君の友情はソコマデタツタノデスカ？君を信じたポケモン達の期待を裏切るのですか？」

「ち、違う…私は…」

「私は…！」

すると、手持ちからリザードが出てきて

リザードは、ましろに何かを伝えていた

「リザード……こんな私でも……ついてきてくれるの……?」

「グオン!」

大丈夫だ、俺を信じて俺はましろを信じる、だから安心して、と言ってるかのようにリザードは自信満々に胸に指を当てて、態度を示していた

「…話はつきましたーカ?」

「はい! マチスさん!

いって! リザード!

リザードが戦闘に出て、ビビリダマと対面する

技の出し合いで、先にビビリダマのスパークがリザードに当たるが

踏ん張り、リザードのりゆうのいぶきを喰らわせた。

マチスのボールに戻されて、最後の手持ちだろう。

最後の一匹がバトル場に出てきた。

「イッテクルノデス! ミーの相棒、ライチュウ!」

「ラアアアアアアイ!」

電流が流れているライチュウ。

今までのポケモンとは違い。気合が違っていた。

「リザード!」

リザードはましろの方を向いた。

「頑張ろ！絶対に勝とうね！」

「グオン！」

ましろの笑顔がリザードに元気を貰い、マチスの方へ向く。

マチスとの戦いは、始まろうとしていた。

「オー！ライチュウ電光石火ネー！」

「リザード！電光石火を受け止めて！」

電気と炎のぶつかり合い

果たして、勝負の行方は。いかに

次回へ続く

## 18話

クチバジム

電光石火と炎がぶつかり合い、一時期は攻撃が止み

もう一度仕掛けてきたのはリザードの方だった。接近して、リザードはライチュウにメタルクローを喰らわせようとするが、避けられてしまい

ライチュウのパンチがリザードの顔面に殴られる。それでも負けず嫌いなリザードは火炎放射でライチュウと距離を離れて。マチスのライチュウの攻撃がまた来ることになった

「リザード！尻尾でなぎ払って！」

「ライチュウ！たたきつける攻撃ネー！」

ライチュウの上からの攻撃をリザードの尻尾でなぎ払い

右の方へ飛ばされるが、ライチュウの尻尾をクッション代わりにされて

壁に激突する直前にもう一度、ライチュウはリザードにたたきつける攻撃を仕掛けてくる

「リザード！りゅうのいぶきでダメージを和らげて！」

口から竜の息吹で衝撃を収めようとするが。相手のスピードの方が早く、リザードの攻撃が真つ二つに割れていき、ライチュウの尻尾からのたたきつける攻撃がリザードに当たり、あたり一面砂煙が出始める

マチスの様子は真剣な表情で決して態度に出てない感じでした

砂煙から二匹のポケモンの姿が見えてくると、その二匹ほ両手が使えない状態で揉み合いになっていた。

「リザード！踏ん張って！」

「ライチュウ、10万ボルトでリザードに攻撃デース！」

ライチュウのほっぺから電撃が走り、その電気がリザードの方へ通る感じに来る、ビリビリを耐えながらもリザードは技を出さずひライチュウの攻撃を受けている。

余裕の微笑みを見せるライチュウに対して、リザードの様子が少しづつおかしくなっていく。そして、いつもと違う尻尾の炎の燃え方が違ってくる。何かを察知してライチュウはリザードの手を離そうとするが

がっちり繋がつているため、思うように離せない状況に陥っていた

「グオンオオオ!!」

「(猛火だ、だけど信じてるよ。リザード!)」

「ライチュウ、一瞬の隙でいいデス！手を離れた瞬間に雷のパンチを喰らわせてやり

ナーサイ！」

「ライ!!」

リザードの炎が高まり、ましろはリザードに一度離れるように指示を伝える、前にカスミ戦で猛火をコントロール出来ずにいたあの時の特性を生かそうとするリザード。だか、先にマチスのライチュウの攻撃である

かみなりパンチが、リザードのいたる身体に連続で攻撃をくろうがそれを耐えつつ、好機のチャンスを伺っている。

決してバレてはいけけない、この一撃でリザードは決めるつもりでいた

「オーナカナカやるネー!だが、これでおしまいにするネー!」

「リザード!いくよ!」

「ライ!」「グオン!」

火花を放ち、リザードの尻尾は高温でましろが離れているところまで熱が高まっていく。対して、ライチュウは気合を込めた雷のパンチを一発喰らわせるために、加速して、リザードに当てていくが。熱で雷パンチが思うように当たらず、ライチュウは電光石火で壁を利用して。熱の温度を貫けるようなスピードを、上げにいく。

「リザード!壁に向かって火炎放射!」

言われた通りに、リザードは、周りに炎技を当てた。





を収める。一瞬の間がうまれリザードのカウンターがマチスのライチュウに当たり、ライチュウはマチス側の壁に激突し。

目を回しながら、ライチュウは戦闘不能になっていた。

「勝者！チャレンジャーましろ！」

「やった…やったよ！リザードありがとう!!」

「オーお疲れ様デシタ、マシロクン。これジムバッチよ。」

受け取ってください！」

マチスからクチバジムの証であるジムバッチを受け取り

これでバッチは3個になった。マチスやいろんなポケモン達と触れあ

いの経験でましろはとても嬉しくなっていく。

リザードと手を合わせてハイタッチをした。

ポケモンバトルな終わった後は二人で握手をし。

ましろはこのクチバジムを後にする。

時刻は夕方近くに近く。ましろは近くの海に近いところまでいき、少しの間だけ、息抜きをする事にした。潮風に当たりながら、鼻歌を歌っていた。手持ちから出てきたのは、先ほどまで一緒にいたポケモンだった。

夕陽が海に静かまりそうになる、この頃。ましろは海を見つつ、ポケモンセンターに

戻り、今後の旅の準備をするのであった。

## 19話

クチバシテイ

日が登ってくるこの時間帯、朝日がカーテンの隙間から光が差し込み

ましろの目にあたる。ゆっくり目を開けて、背を伸ばしながらあくびをする、彼女の姿。周りを見回すと、ましろの手持ちである、リザード達がスヤスヤと眠っていた、ましろはニコツ微笑みながら起こさないように顔を洗いにいく。様々な人達とすれ違いながらも挨拶は忘れずに

返した。

「ご機嫌よう」

この世界に来る前に口癖のように言っていた挨拶をするましろの姿を見て、一般の人達はお嬢様ですか？と尋ねられるのが多い感じだった

「はう…」

ましろが泊まっていた部屋に戻り、着替えを済ませると、ポケモン達が目を覚まし、ましろに近づき。じゃれついて来る。

みんなにおはようと言いながら、ポケモンセンターのホームに向かっていく。ジョー

いさんに話しかけて、ラッキーが食卓を持ってきてくれて

ましろとリザード達は朝食をいただく事になった

クチバシテイ

フレンドリーショップで買い物を買ませた、ましろ達。

タウンマップを開き次の目的地を把握する為、赤丸を示した。

すると、通り過ぎたトレーナー達の会話を耳を澄ませてくと

どうやら、以前なかった穴が出来たらしく。トレーナーの話によれば

デイグダ達が作りあげたという長いトンネルがあるということ

さらに向こうの道路、シオンタウンやセクチシティにいく橋にカビゴン。というポ

ケモンがいるらしく。特別な音が出る笛がないと起きないという事らしい。

ましろは仕方なく、リーフが行ったハナダシティに戻る事にした。

道中、トレーナー達にポケモン勝負を挑まれたりしたり

1日の長い時間を感じていた。

ハナダシティに着いた頃には夕方になっていて、木が邪魔で通れなかった、道を切り

刻んで、その奥へ進んでいき。気が付けば夜になっていて

ましろ達ははじめての野宿をする事になった

7番道路 道中

「えっと……こうすれば……あつ……折れた」

いつ覚えていたのかわからないが、やったことある昔の火の付け方を真似してやろうとしたが、折れてしまい、落ち込んでいます。隣にリザードがましろの肩をツンツンし。ましろはリザードの方へ向く。リザードは炎を使えるのを忘れていたましろは顔を真っ赤になりつつもリザードに火を起こしてもらった

周りにはましろがいままで捕まえたポケモンが彼女の近くにより

抱きしめている状態でした。ましろの膝にバタフリーがいて

胸辺りにピッピ、左肩の隣にピジョンがいて、リザードは見張り当番で

あたりを警戒していた

「リザードもこっちに来ないの？」

「グオンー」

俺は大丈夫だ、だからバタフリー達の面倒でも見てな。と

例え声を通じなくても心は通じ合っているため、ましろは安心してリザードに見張りを任せた。ふと、上を振り向くと

キラキラ輝く星空がましろの目に映りこむ。決して街中では見られない

大自然にいるっていう気分が満ちていた。

星を眺めていると、だんだんと眠くなり

いつのまにか寝てしまっしる。

次に目が覚めるのは翌朝を迎えた頃だった。

「みんな、ご飯だよ！」

朝起きて、すぐに朝ご飯を作るましろ

ポケモン達は一つの場所に周り、一斉にご飯を食べ始めた。

食器を片付けを済まし、拭いて改めてシオンタウンに向けて出発する

ましろ達。険しい道を超えると川が見えてきた

「ふう…川が見えてきた…となるとイワヤマトンネルを抜ければシオンタウンに着くのかな？その前にポケモンセンターで休憩して行こう」

降っていき、川の横を通るように道に進む。

赤い屋根が見えてきて、安心できる。そう思っていたましろ

だか、前から二人の男が現れて、背後に逃げようとするが

さらにもう一人の男が現れて、完全に追い込まれたましろの姿があった

「おいこいつか？あの任務を邪魔されたトレーナーって言うのは？」

胸にRと書かれた印があり、彼らはロケット団の下っ端と判断したましろはポケモンを繰り出そうとするが。背後の男に捕まられて

ボールを投げられなくなった。なんとかして振り払おうとするが

男性の力の方が強く、とてもじゃないが振り払うことすら出来なかった  
「へへ、いけーズバット!」

相手はポケモンを出してきて、絶体絶命のピンチの中

隣にいた、ロケット団の下っ端の一人が。凍りつけにされていた

どこから共なく声が聞こえてきて、ましろは声ができる方へ首を向けると

そこにはポケモンに乗った、赤い髪をして、眼鏡をかけてるクールな女性が現れた、ロケット団達は青ざめた表情で、口を開いた

「まじかよ…四天王がなんでこんなところにいやがる!」

「あら、か弱い女の子をいじめて何が楽しいのかしらね？」

ラプラス…れいとうビームでそのゴミを凍らせなさい!」

ラプラスの口から冷気を発するビームを放たれる前に、ロケット団達は名前を一人置き去りにして、どこかへ逃げ去っていく。

安心したのかましろはその場に座り込み、息を整えていた

ラプラスから降りて来る女性は心配しながらましろの方へ近づいてくる

「大丈夫?怖かったでしょ?もう安心して、ね?」

「はい…はい…」

しばらくして呼吸も整え、ましろは眼鏡をかけた女性にお礼を言った



「良いのよ、たまたま私はラプラスとお散歩を楽しんでただけだから  
それより、貴方バッチ集めをしてるのかしら？」

「はい、そうですよ。」

女性は「そう…」と言い残して、ラプラスをボールへ戻した。

ましろときた道にいき、彼女は背後を振り返りり自分の名前を伝えた

「私はカンナ。いづれ貴方と戦える日を楽しみにしてるわ

それじゃ、またどこかでお会いしましょう。」

「は、はい…また…（ラプラス…可愛いな…）」

波のように消えていく。ましろは近くのポケモンセンターで

休憩を取った後、イワヤマトンネルを通り過ぎていき。

目的地のシオンタウンへ辿り着いたのは、夕陽が沈む時間帯だった事を

ましろ達の旅はまだまだ続く

## シオンタウン タمامシシテイ編

## 20話

シオンタウン ポケモンセンター

シオンタウンについた頃には、夜となっていて。今晚ポケモンセンターに泊まる事にした、ましろ達。たまたま席が隣りになった女性達の会話から驚く事を聞き身を立てて聞いていた。

「(ガラガラのお母さんが：?)」

女性達の話によると、ロケット団の下っ端が。

親子のガラガラとカラカラがいて、親のガラガラを殺してしまったという事件があった。未だに子供のことが心配なガラガラはどこかで見てるって話よ?、と。いう話を聞く、ましろ不安になりつつ泊まる部屋に戻り、寝たのであるが夜眠れなくなり。リザードをぬいぐるみのように抱きつき朝を迎ええた。

「ん…朝…ふああ…おはようリザード、みんな」

ましろは目を擦りながら、朝起きて。服に着替える。

シオンタウンに着いた時にある、一軒家にポケモン預かり所があると

ジョーイさんから聞いて、ましろはその一軒家に向かう事にした。

ポケモンセンターから出ると、骨の兜？を被ったポケモンが隣にそびえ立つ、タワーに入っていく。一度足を止めるましろだったが、先にポケモン預かり者に向かう事にした。

「……だね？」

トントン、と扉を叩くと。中からは子供達が出てきた。

みんな不思議そうな顔でましろを見つめていた。その奥から大人の女性が現れて、話をした後。ポケモン預かり者の建物の中に入っていく。

中は広く、子供達も何人かいる部屋の中。

その中の一人である、フジ老人という人がいたが。今はロストタワーで黒い服を着た悪いお兄さん達に連れて行かれたと子供達はましろに伝えた。

ましろは、さっきのポケモンがロストタワーに入っていく所を見たのを思い出し、教えていただいた女性の人にお礼を言った後。ロストタワーに向かつていくましろがいた。

ロストタワー 前

「……だね……」

目の前にあるのが、ポケモン達が死んだ時、お墓参りなど人が来る場所。三階の場所

で特定の所に行くと幽霊に会えるなどと噂されていた

「グオン！」

「ふふっ、リザードは頼りやすいよ。ありがとうね？」

（お化けなんていない…いないよね…？）

不安になりつつましろは中へと入っていく。

中に入ると。しみみりとした空気が流れており、沢山の人やポケモン達がお墓参りを、してる人がいた。階段に登ろうとすると、隣にいた、寄稿者が、ましろに話しかけてきた。

「お主！」

「は、はいいい!？」

「この先に登るには気を付けろおお！我々でも太刀打ちができぬ、正体不明のポケモンがいるのじゃ。対策なしで行くのは危険じゃ引き返せぬか!？」

目を大きく広げて、説教をしてるのか？、というぐらいの声で

ましろは片耳を指で押さえつつ。ある程度の話を聞いた後。

2Fへ登っていく。広い広場にいきもう一つの階段を見つけていこうとすると、そこには見覚えのある姿があり。それはグリーンの姿だった

「グリーン？久しぶりだね！」

「…ん、ましろか。なんだ…ましろのポケモンも亡くなったのか?」

「えっ?それどういう…」

グリーンは、落ち込んだ表情でましろを見ると目を逸らした。

不思議と思ひ、ましろはグリーンの背後にあるお墓を覗くと

そこには以前に戦っていた「ガーディ」の名が刻まれている

さつきまで、ずっとここにいたのだらうと、ましろはそう思っていた

「…ごめんグリーン、変なこと聞いちゃって」

「別に良いさ、ガーディは捕まえた時から弱ってたけど負けず嫌いなポケモンだったよ。

まさか急な倒れ込んでポケモンセンサーに駆け寄ったが、もう常にダメだったんだ。そ

れで今はあいつの為にポケモンのお墓を作ったんだ」

「…辛かったんだよね?私も今の手持ちのポケモンが居なくなったらどうしようかと、考

えると。ね」

二人はお互いの本音を言いつつ、ただ時間だけが過ぎていく。

本調子を取り戻したのか、グリーンは、ましろにポケモン勝負をしようぜ?と挑んで

きた。勿論ましろもそれを承認して、グリーンとのバトルが始まろうとしていた。

「いけーギャラドスー!」

青と白が混じった色合いで図体が高い、まるで竜の大きさぐらいはあった。負け時に

と、ましろもピジョンを繰り出した。

「ピジョー！」

「ギョオオ!!」

「いくぜ！（よ）ましろ！（グリーン!）」

ましろ達の旅はまだまだ続く

## 21話

シオンタウン　ロストタワー　2F

ギャラドスとピジョンの戦いが始まり、先行したピジョンは翼で撃つ攻撃を放つが、ボデイが硬いのか、傷を負わせることができなかつた。

ましろは一瞬だけ焦りを見せるが、先程の戦闘でギャラドスの特性

「いかく」をして、攻撃力を下げた事により、ピジョンの攻撃が全く通らない事を知り、もう一度ピジョンに、翼で撃つ攻撃を連続で放つように指示した。が。グリーンのギャラドスの攻撃力は圧倒的な強さで空中にいたピジョンを地面に叩きつける程の威力を叩き出した。

「ピジョン!?!、大丈夫?」

「ピジョン…!!」

なんとか羽を広げ、ピジョンは飛ぶ。先程の勢いは出ないが

技一つくらいは出せる余裕があつた、ギャラドスは再び攻撃をしようとし。尻尾の先を青く光、技が出てくる。だか、それを見切りギリギリ避け、その隙にピジョンは翼を羽ばたいて竜巻を巻き起こした

「ギャオ!!」

竜巻に巻き込まれて、ギャラドスは宙に舞う。身動きが取れないギャラドスに、グリーンはある指示を出した。

「ギャラドス! 竜巻の回転と合わせて水を発射しろ!

それからピジョンに当たるとだ!」

「ええ!? そんな無理な!」

ましろは驚いたが、グリーンのギャラドスは言われた通りに竜巻に水を発射して竜巻は渦巻のように青くなり。その中からギャラドスは脱出し、水竜巻をピジョンに向けて尻尾で薙ぎ払った。飲み込まれる程の威力があった。ピジョンはなんとか逃げようとするが、竜巻と水のコンボの勢いにより、ピジョンはその中に飲み込まれていく。解放されたギャラドスは

いてつく牙を水竜巻の中にいるピジョンにダメージを与えた

「ピジョン!!」

解放されたピジョンは地面に落ちようとしますが。最後の踏ん張りを見せ

低空で電光石火をギャラドスに、食らわす。微かにダメージを与えたピジョンは、離れた後に気を失い、今度こそ地面に落ち、戦闘不能になった。ボールに戻しましては「お疲れ様」とピジョンに伝え、次のポケモンを繰り出した。



「いつて！ピツピ！」

「ギャラドス、まだいけるな？」

ピツピは、気合充分でましろを見つめた。

ギャラドスは大きな声でピツピに叫ぶが、ピツピの精神力が強いのか、驚くどころか、むしろ喧嘩を売るような感じで指先を立てた

「(ピツピ…いつのまに…)」

「あはは！さすがだなましろのピツピは。」

だが、ギャラドスはまだまだ元気だぜ？どう立ち向かう？」

先程のピジョンが与えた技がギャラドスにどれくらいダメージを与えたのかは、ましろでもわからない。ただ一つだけわかってることは

強い相手には負けたくない気持ちがある、それだけのこと。

ましろはピツピに技を指示し、ピツピは右手をビンタするように

往復ビンタをギャラドスに与えていく。

避ける暇もなく、連続技を受けるギャラドス、尻尾でましろのピツピにダメージと威嚇で相手を翻弄するが

ピツピはお構いなく、ビンタを喰らわし。そしてとどめのギャラドスの顎にアツパーを喰らわせて、ギャラドスは顔に地面が当たり戦闘不能になっていった。

「やるな、ピツピ。お疲れだ。ギャラドス」

「びいいー」

「(ピツピ怖いからね…何があったの!?)」

グリーンは次のポケモン、ピジョンを繰り出してきた。

ピツピは、ギャラドスと同じように同じ技をしようとするが避けられて

電光石火と翼で撃つ攻撃をくらい、ピツピは空中から地面に落ちていく

床に穴が少し開くくらいの衝撃でピツピは立ち上がり

上にいるピジョンにマジカルリーフを出し、追尾させていく。

「ピジョン…吹き飛ばせー」

強い風でマジカルリーフ追尾が吹き飛ばされて、ピジョンは次の行動を起こす。翼が銀色に変わり、突っ込んできた。ピツピはピジョンの攻撃を避けるが、次にくる攻撃を何回か避けていくが、だんだんと体力がなくなっていく。次の着地した瞬間にピジョンの攻撃が変わり

電光石火を使用し、ピツピに向かってつるどいくちばしがお腹に直撃をする。涙目になるピツピは、壁を張り、ピジョンの攻撃を防いだ

「リフレクターか。少し厄介だな…」

「ピツピ、そのまま月の光で回復してー」

すると、ピツピよ真上に月の光が出始めて。先程の傷を癒してくれた

その間にピジョンはリフレクターを壊そうとするが、フィールドがうまく壁になり。なかなか割れずにいた。

「ピジョン！鋼の翼だ！」

「ピツピ！往復ビンタで対応して！」

お互いの技があたり、周りに煙が舞う。

グリーンとましろの表情はいつもよりも険しく。晴れるまで見守っていた。煙がなくなると、ピジョンの翼をピツピは受け止めていて、勢いがなくなった瞬間、ピツピは壁に向かってピジョンを投げ飛ばし、マジカルリーフでピジョンに向かっていき、ダメージを、与えていった。

攻撃が終わるもピジョンは目を回しながら、床に落ちて戦闘不能にさせた。

「ぴゅー！」

親指を立てて、ピツピはドヤ顔をましろに向いてする

苦笑いするましろ。それを見たグリーンは少し笑っており

さつきまでの落ち込んでいたグリーンは少し晴れていた

ましろもグリーンに釣られては一緒に笑って場を和ませた。

「なんだよそれ…ましろのピツピおかしんじゃないのか？」

「ピッピ…それリザードの真似だよね…いつ覚えたのよ。」

「びっびい!!」

二人がなんで笑ってるのか理解したピッピは少し怒っていたが

まだ、戦闘が終わってないのに気がつく。グリーンは3体目のポケモンを繰り出してきた。

「ゲラー!」

「ユンゲラーだ、ピッピ油断はしないで!」

ピッピは、ユンゲラーに向けてマジカルリーフを打ち放つも。

ユンゲラーのサイコパワーにより、打ち消されたしまう、

今度は接近戦で近づこうとするも、いろんなものが飛んで来るように

ピッピに向かっていく。避けつつも距離を攻めるが

ユンゲラーのスプーンが曲がり、急な曲がりでピッピは壁に激突する

「ピッピ!」

「びい〜」

顔を赤くして、おでこを抑えるピッピ

するとユンゲラーが攻守交代のように攻めてくる。

混乱中のピッピはユンゲラーを見るが避けきれず、接近戦でユンゲラーのサイコパ

ワーに圧倒されてしまう。

身動き取れないピツピはおでこの痒みを取りたいのに邪魔されることにイラつき、強引にサイコパワーを打ち破り、怒りの往復ビンタと

覚えさせたこともない技を自由自在に出していた。

「げ、ゲラ…」

「戻れユンゲラー!!」

戦い気力をなくし、ユンゲラーは倒れる直前にボールに戻された。

ピツピは疲れからか、自分で頭を床に当てて、戦闘不能になり

慌ててましろはピツピの近くに駆け寄り、怪我の治療を済ませ

ボールに戻していく。グリーンとましろのポケモンは後一匹ずつの状態になった。

「ましろ、いくぜ?」

「うん、来て!」

お馴染みのポケモン、リザードとカメールがフィールドに出されて  
戦闘が始まる、先に先行を取ったのはましろのリザードの方だった

「グオン!」

いきなり火炎放射を放ち、カメールに一直線に向かっていく

甲羅で身を隠せずに技を貰い、火傷を少し負った

慌てるカメールを見たグリーンは水で火傷を治せと指示して。

上に向かって水の塊を発射させて、落ちてきた水を浴び、火傷を治していく。落ち着いたカメールは、リザードに近づきメガトンキックを喰らわせようとするが、足を掴まれて、投げ飛ばすような感覚でカメールは叩き突かれる。

掴みから解放されカメールは甲羅に身を隠し、甲羅が回り始め、再びリザードに向かっていく。受け止められるだろうと思いい、リザードは受け構える体制を取った次の瞬間。

「カメール！そのまま飛び越えて、水の波動だ！」

「!?リザード離れっ！」

指示をしようとするろはリザードに伝えようとするが間に合わず

グリーンの間によって、カメールの皆の波動がリザードに直撃し

リザードは吹っ飛ばされていく。壁に激突する直前に硬い爪が床に切り込みを入れて、なんとか踏ん張りを見せたリザード。

カメールは余裕を見せて、リザードに挑発的な行動をみせた。

「グオン!!」

ずぶ濡れだった身体を尻尾の炎で乾かし、リザードの本領発揮が出て始める。カメールはもう一度甲羅に籠り、今度は新しい技でリザードに、立ち向かっていく。

「カメール! ロケット頭突きだ!」

「リザード! メタルクローで防御して!」

ロケット頭突きかりザードに向かって突撃を喰らわすが、リザードのメタルクローにより、ダメージを受け流した。壁にぶつかりそうになるカメールだが、身体を出し壁にキックして、気を取られてるリザードの背後を蹴ろうとするが、勢いがありすぎて。狙いとは違う方向へ飛んでいったカメールの、姿があつた

「カメール! 無事か?」

「カメエ!」

「グリーン! 次の技で決めるからね!」

「そうだな! カメール。」

リザードにもう一発、技を喰らわせてやれ!」

「カメエ!」 「グオン!」

「水の波動!」 「火炎放射!」

グリーンとましろの戦い

果たして、どちらが勝つが。  
次回へ続く



## 22話

シオンタウン ロストタワー 2F

「グリーン、これ」

「おうありがとうな」

グリーンの戦闘を無事に終わらせて。

ましろとグリーンはお互いのポケモン達を回復していた。

勝負の行方は、リザード側の勝利だった。理由としてはリザードの火炎放射の威力が高く、カメールが放った水の波動が蒸発したからというのが。理由だった。

「行くのか？ましろ？」

「噂じゃ幽霊がいるらしいからさ？」

「うん、さつきガラガラ？みたいなポケモンがこのロストタワーに入ってく姿見たからさ。気になってね」

「あー？恐らくましろが見たのは進化前のカラカラだな？」

「そうか、なら俺は止めはしないぜ？。ただひとつだけ言うとしたら」

「幽霊が見えるスコープがあるらしいが。それを探してみるのもありだろうな」

「とりあえず今は上に行ってみるよ。何か分かるかもしれないし」

グリーンはましろのポケモン達に回復を済ませた後、別れたましろは

ロストタワーの3Fに登っていく。先程のフロアと違い、霧が出ていた。操られている寄稿者達を正気に戻しながら。幽霊が出るという

ロストタワー5Fに辿り着く。

「(うう…怖いけど…いくしかないよね?)」

6Fに繋がる階段を見つけ、幽霊なんていないと安心したましろはその階段へ向かうとするが。どこから共なく声が聞こえてくる。

ゾツとしたましろは肩が震える程に鳥肌が収まらなく、そつと背後を振り向く、そこには正体不明のポケモンが目の前にいた

「ブダイケエエー！タチサレエエエー！」

「…あ…」

ましろは気を失った

気がつくと、ましろはシオンタウンのポケモンセンターで目を覚ました

さっきの記憶を振り返ろうとすると、恐ろしい体験をした事を思い出した。誰に運ばれたのか、受付で、ジョーイさんに話しかける。

「あの」

「あら、トレーナーさん！無事だったのね良かったわ」

ジョーイさんは、ホツとした表情でましろを見つめていた。

理由を聞かされると、ましろと同じように5Fに登った人が居たらしく、たまたま倒れてるましろを見つけて、ポケモンセンターに連れてきたというらしい。

「そのトレーナーさんにお礼言いたいのですが、何処かに居ますか？」

「あーごめんなさい。そのトレーナーさんはもう居ないみたいなのよ。あと、あの子が目を覚ましたらこれを渡してって」

カウンター越しから、ましろはネットクレスを受け取る。

不思議な雰囲気が高い、何かに倣るような窪みがあった。

受け取ったあと、首にネットクレスを巻き、鏡に映ったましろの姿が映し出される。

シオンタウン

外に出て、次の街へ足を運ぶましろ。前にグリーンと戦って

幽霊の姿が見えるスコープを探す事にした。左の方角に

タマムシシテイという場所へ向かうことになった、

いざ、行こうとすると。昨日見た、カラカラが、目の前を通り過ぎていく姿を目撃を

し、ましろも後を追うようにカラカラについていくが。

足が速いのか、曲がり角のところで見失ってしまった。

息切れを起こすましろは一度息を整えた後、タمامシシティに向かっていくのであった。

タمامシシティ

目的地の場所へ辿り着くと、最初に目に付いたのが。大きなマンションや、大きなデパートや、大人達が遊ぶ店など、建っていた。ましろは近くのポケモンセンターでポケモン達を預けて。近くのテーブルに座る方にした。

「ふう、着いた。でもなんでロケット団があんな街中でうろろしてたんだろ…?」

「あれ?ましろ?」

振り返ると、クチバシティ以降会ってなかった。リーフと再開した

ましろは久しぶりに会うリーフと目を合わすのが恥ずかしかったが

リーフはましろの頬を引っ張るようにと強引にこちらに向かせて

ほっぺが赤くなっていた。

「リーフさんも、タمامシシティに今着いた所ですか?」

「いや、タمامシジムのの人と対戦して、勝って終えたところでポケモンセンターに寄ったのよ。まさかましろちゃんがいたの知らなくてね

それより、ましろちゃんはタمامシジムを受けるのかな?」

「そうなんですけど、まず。ロストタワーにいるかも知れないフジさんに会おうとしたのですが。あいにく事情があつてですね…」

ましろはこれまでの事をリーフに話をした。

最初は驚いていたが、幽霊が見えるスコープとカラカラの話になると

リーフは、何かを知っている表情をしていた。

「多分、シルフカンパニーの発明した部品のことだと思うよ。」

グリーンが話していたの。あつ、でも最近泥棒が入った事件があつたからそのスコープは今も何処かで盗まれてると思うよ」

「シルフカンパニー…?」

「えーと、ほらハナダシテイやクチバシテイの間にでかい街並みがあつたでしょ?そこに世界一有名な会社があつてそこがシルフカンパニーっていう場所。今は外部からの連絡も途絶えてるからしばらくしたら、通れるようになると思うよ?」

「(そつか、前に警備員がいて通れなかつた理由がそれかも)」

「…ん? あれは…」

「どーしたの? ましろ?」

その時、外からポケモンを持ったポケット団が走るところを見かけたましろはボールのポケットに入れて後を追うように追いかけていき

突然の行動にリーフも驚くが、すぐにましろの後を追いかけていった

「はあはあ……ど、どこに行つたんだろう……カラカラ……はあはあ」

「ましろちゃん、どうしたの？ そんなに慌てて？」

後から追つてきた、リーフに事情を話すましろ。リーフは。もしかしたら、と言つてましろの腕首を掴み、何処かへ連れて行かれると。そこには大きな看板が光つており。そこは子供も大人も楽しめる

ゲームセンターという場所に辿り着いた。

「ここは……ゲームセンター？」

「うん、私の勘だけど。ロケット団はここに入つていったんじゃないかな？ 他に思いつく場所ないしよ。」

「……リーフさん。いこ？ もしかしたらここにスコープを盗み出した犯人がいるかもしれない」

「おーいいよ。私も付き合おうよ」

二人は、ゲームセンターの中に入つていった。

いざれ知ることになるだろう。スコープを盗み出した犯人そして

カラカラの行方はいかに。ましろ達の旅はまだ続く。

## 23話

タママシシテイ ゲームセンター

ましろ達は、激しい音がするマシンの道を通り。

ロケット団を探していた。色んな人がいるためもし、逃げられたとしても入り口にリーフがいるという最低限の保険は付けられていた。

必死にロケット団を探すましろ。するとカウンターの横にロケット団らしき人がポスターを見つめていた。怪しいと思いましろはゆっくりと背後から話しかけることにする。

「あの…」

「おわあ!?!な、なんですか?べ、別にここに怪しい階段とか隠してるわけじゃないからな!…怪しい?」

ましろとリーフは二人声揃えて言う。

「怪しいです!」

ロケット団のしたっぱは。慌ててボールを取り出し

ポケモンを繰り出してきた、応戦しようとリーフもましろと2体1体の戦闘が始まっ

た。

「ひ、卑怯だぞ！俺なんてまだ一匹しか居ないんだからよ！」

「問答無用です！バタフリー！かぜおこし！」

「フリーちゃん！葉っぱカッターでラッタに攻撃して！」

ロケット団が繰り出した、ラッタはあつという間に倒されて

手持ちに戻される。涙目になるロケット団はポストのことを押すなよ？と。忠告したあと、よろよろ足で何処かへ去っていく。

だが、二人ましろとリーフはすぐさまポストを調べると裏に秘密のボタンがあり。押すと右奥の方に怪しい降りる階段が出てきた。

「リーフさん、ここですよね……」

「そうみたいね、ましろ、気を引き締めて行くわよ！」

二人は階段を降りて行き、辿り着いた先は。ロケット団の秘密基地のようだった。中は広いが、警備してる人の姿が見えなかった。どうやら

まだ、侵入者が入った情報がまだ伝わっていない状態であり。

ましろとリーフは二手に分かれて、探索をする事になった

ロケット団 アジト F2

エレベーターでさらに地下に降り、ましろは部屋の探索を始める



奥にロケット団の一人が何かを隠している行動を見かけて、声を話しかける。その声に反応したのか、ニコツと笑顔の表情でこちらを見つめていた。

「へえ？お前がさつき部下から侵入者がアジトに入ったって連絡が入ってたが、お前俺達のボスに用があるのか？」

「えつと…：貴方たちのボスの事はわかりませんが。ロケット団の一人がカラカラを持って追いかけてみたらここに辿り着いた…：感じかな…？」

「クツヒヤヒヤ!!マジかよそんな一匹のポケモンのためにわざわざここまで足を運んで来たってわけかよッ！オモシレー！良いだろう」

お前が俺は勝つたらそのカラカラがいる部屋の鍵をくれてやるよお？出てこい！  
ゴルバットお！」

ロケット団の一人がゴルバットを出してきて、ましろも対抗するためリザードを繰り出した。技の指示を送ったのはましろだが、相手のゴルバットは素早い動きでリザードの技を軽く避けて行く。技を出し過ぎて

息を整えるために距離を取ったがその隙を突かれ、ゴルバットの噛みつく攻撃がリザードの腕にしがみつく。

「グオン!?グオオ！」

振り払おうとするが、噛みつく力が強く。ゴルバットは離してくれない

ましろはリザードに接近で火炎放射を放てと指示し。口から炎が飛び出てくる。強く嘔んでいたゴルバットはそのまま炎の餌食となり

黒掛けとなった状態でその場に倒れるように戦闘不能になった。

「なかなかやるな…だか、次は簡単に行かないぜ！」

次に出してきたのは顔が二つくっついていて、ガスを放射しながら浮いているポケモンを繰り出してきた。お腹辺りにはドクロマークが描かれていた。

「あれは…」

「マダドガスだぜ？ どう対処するか見せてもらおうぜ？ 侵入者！」

リザードはそのまま戦闘続行し、マダドガスに接近技メタルクローを出すのが、空中に避けられてしまい、口から黒い煙が出始めてくる。

それに巻き込まれるリザードとましろ。ましろは息ができなくまともに指示を送る事ができなかつた

「げほっ…うう…リザード…りゆうの…いぶ、き…」

あまりにも強烈なガスが舞い、ましろは気を失ってしまふ。

リザードは彼女を見て、怒りだし、先程のりゆうのいぶきをマダドガスに当てる。衝撃が強かったのか、壁に穴がめり込まれて、マダドガスは戦闘不能になっていた。すかさずリザードはましろを助け出し、ガスが届いていないフロアまで戻る事にした。その

間、ロケット団が何かを投げつけてきて、リザードはそれをキャッチしカードキーが入ったポケットケースを受け取った。

「…良い勝負だったぜ」

といいのこし、マダドガスを手持ちに戻すロケット団の姿があった

ロケット団 アジト F1

「…しろー！」

「う、うーん？ハッ！ここは…？」

目が覚めると、先程のフロアとは違う場所にいて。

近くにはリーフがいて、エレベーター付近ではリザードが眠っていた

状況をリーフから説明を聞かされると。

リザードはましろを担いだまま、マダドガスが撒いたガスが届いていないフロアまで戻って行く途中、さつきまで戦っていたロケット団の一人がポケットケースをリザードに投げ込み、さらに地下に行くカードキーをリザードが手に入れていた事。そしてリーフが辿り着いた時には二人とも気を失っていたらしい。

「ありがとう…リザード」

ましろは眠っているリザードの頭を優しく撫でてあげて

しばらくして、ボールに戻した後。カラカラがいるだろう

ロケット団のボスがいるフロアに向かって行くのであった  
ましろ達の旅はまだ続く。

## 24話

ロケット団 アジト F4

例のカードキーを差し込み、さらに地下に行けるようになり

ましろ達は、エレベーターに乗り込み。カラカラがいるだろうフロアへと辿り着いた。慎重に進む。ましろとリーフの二人は

とあるシャツターの前にロケット団のしたっぱ達が経ち塞いでいた

「数は…二人、丁度私達も二人だね、リーフさん」

「そうだね、ちやつちやつと片付けようか！」

「ここからは先にいかせん！いけラッター！」

「この先はボスの部屋だ、簡単には通らせるわけにはいかない！」

いけ！ゴルバット！」

シャツターの前でロケット団とましろ達の戦闘が始まり

ましろはリーザードをリーフはフシギソウを繰り出し

先制攻撃をしたのは相手側のゴルバットの方だった。

ゴルバットは、フシギソウを一直線に狙い、つばさでうつ攻撃をしようとしたが、リ

ザードのメタルクローでフシギソウを守りその後ろでフシギソウの葉っぱカッターが炸裂した。

次の攻撃、ラッタが電光石火で攻めてきて。リザードはその動きを合わせるように横へ移り、真後ろにいたフシギソウのつるのムチでラッタを持ち上げて、投げ飛ばした。

「よし、リザード！このままゴルバットに火炎放射で倒しちゃって！」

リザードの方から火炎放射が放出し、ゴルバットは焼けるようにと地面に引つ張れるように落ちていく。ラッタはまだ体力が残っており。

力を振り絞り、つるどい歯でフシギソウを噛み砕こうとしていた

「ふーちゃん避けて！」

「フシヤ！」

間一髪ラッタの攻撃を避けたが、後ろは壁があり。追い込まれたフシギソウ。助けようとするリザードだか、先程まで倒れていたゴルバットが葉をだし、色が変わり噛みつきこうとしていた所をましろは気付きリザードに避けてと指示して、避けたあと。尻尾を薙ぎ払うようにとゴルバットに打撃を与えた。今度こそ倒れ込み目を回していた。

「フシヤ!?!」

叫び声が聞こえ、ましろ達はリーフの元へ向く。

ラッタがフシギソウに噛み付いたあと、フシギソウの蹴りがあたり

壁に激突し、戦闘不能に落ちいていた。

噛まれたフシギソウはそのまま大の字になり、倒れ込んでしまう。

慌てたリーフはカバンからきずくすりを取り出そうとするが、無くて

ましろが出そうとしたが、本人はポケモンセンターに運ぶといい。

フシギソウを担いで、その場を立ち去った。

立ち去る前にリーフはましろに振り返り

「頑張つて！ましろ。必ずカラカラを助け出して！」

と、言い残して。急ぎ足でアジトを後にした。

ましろはロケット団が開けてくれただろう、シャツターが開いており

その奥へ進んでいく、回転椅子に腰をかけて座つてる一人の黒いスーツを着た男がい

た。その隣には怯えてるカラカラの姿もあった

「ようこそ、私のアジトへ君の願望はなんだい？」

回転椅子を来るつと変え、ましろの方へ向き

膝を立てるように親指を顎に乗せ、こちらを見つめていた。

「カラカラを……返してください。」

ましろはそう、ロケット団のボスに一言伝えた。

次回へ続く

## 25話

ロケット団 アジト

したつば達をなぎ払い、ようやくロケット団のボスの部屋まで辿り着いたましろ、そこには捕まっていたカラカラが怯えた表情で右端の壁に寄り添っていた。机越しにいる、黒いスーツを着た男性。彼は口を開き、

ましろに問いかけた

「なるほど…カラカラのためにわざわざアジトに乗り込んできたのか…フハハ！面白い少女だな！いいだろう、返してやる代わりにこの俺と戦え、そして勝ったらこのカラカラはお前に返してやろう」

「…嘘じゃないんですね？」

「ああ、約束しよう。では、こちらに来たまえ」

ロケット団のボスは隣の部屋に行き、ましろそのあとをついて行く。

場所が変わり、そこはポケモン達が戦える広いフィールドがあつて

向こうにいるボスの手にはボールを持っていて

ましろも同じようにボールを持ち、勝負が始まろうとしていた



「自己紹介がまだだったね。俺の名前はサカキ

ロケット団のボスでもある。」

「サカキ…私はましろと言います。」

「フツ…礼儀正しい人は俺は好きだな。」

では、早速ポケモン勝負といこうか！」

サカキはボールを投げ、フィールドから、猪のような岩でできたポケモンを繰り出して来た。ましろも続けてボールを投げ、ピジョンを戦闘へ

出した。

「あれは…」

「サイホーンだ。俺の自慢のポケモンでな。ましろ君のピジョンはとても育てられてるようだな。」

「…いい、一緒に旅してきた仲間ですから。」

お互いにポケモンを出し合い、ましろとサカキの戦いが始まろうしていた。先に動いたのはましろの方が速く、得意の素早い戦法で攻めるが

全く傷つかない、いや、あまりにも硬さでピジョンの翼から血が少し浮き出ていた。

「ピジョン!?!」

「どうした? 大事な翼から血が出ているぞ?」

来ないならこっちから行かせてもらおう！サイホーン！突進だ！」

サイホーンの猛烈な突進がピジョンの方へ向かってくる

痛みからか、ピジョンはまともに飛ばでいなく。ギリギリなところでサイホーンの攻撃を交わすが、サイホーンの向きが急に変わりピジョンがいる方角へ、振り返り。牙から電流が流れ。そして、そのまま突撃する様にピジョンにアタックしようとしていた。

「ピジョン！フェザーダンスで防御を……」

「遅い！サイホーン雷の牙！」

口が開き、サイホーンの雷の牙がピジョンのフェザーダンスを貫通して

噛みつかれて、即座に電撃が走りダメージを喰らうピジョンの姿。

なんとかして振り払おうするがサイホーンの力が強くそして、ピジョンは力尽き、戦闘不能になった

「お疲れ様、ピジョン」

「……次のポケモンを出すんだ。そこにいるカラカラを、助けたいの难道？」

折にいたカラカラの目から涙が流れており、ましろは負けられないと次のポケモンを出した。空高くバタフリーの姿が目に移り

ましろは降りてきたバタフリーの頬を優しく指先で撫でてあげた。

戦闘に飛びだし、サイホーンとバタフリーの戦いが始まる。

「フリー♪」

「バタフリー！サイケこうせんでサイホーンの動きを止めて！」

目からサイケこうせんでサイホーンの動きを封じ込め

その間に羽を強く飛ばたいで強烈な風を起こし、サイホーンを吹き飛ばそうとするが、相手の体重が重く吹き飛ばすところが逆に踏ん張ってしまい、強烈な風が止んでしまった。

「グアガ！」

「サイホーン、つのでつく攻撃だ！」

後ろ足をバネにし、思いっきりバタフリーの前に飛び込んできて

避け切れずに、バタフリーのお腹にツノが突き刺さり。そのまま壁に追突し、わずかに体力をギリギリに保てるバタフリーをみたましろは

ボールを入れることにした。

「戻ってバタフリー」

「ククク、ポケモンの大事にする方にしたのか。いい判断だな

そのまま行っても勝ち目がないと分かっていたのだな？」

「…」

ましろは無言で次のポケモンを繰り出す。

ピッピは気合が入った状態でバトルに挑もうとしていた。

サカキのサイホーンは鼻息を反射して、まだまだやれるぞと相手も気合が入るような状態であった。緊張が走る中先に行動したのはサイホーンの攻撃だった。

「サイホーン！じならしだ！」

地面が揺れ始め、ピッピはバランスを崩し。サイホーンはピッピに。向かってきてツノを突き刺して来るが。ピッピは地ならしを利用してようと右手でコロリンして回避した後、マジカルリーフで追尾させ

サイホーンにダメージを与えて行く。

「なに!?サイホーン！もう一度突進だ！」

もう一度突進をし、サイホーンはピッピを狙うが

ひらりと避けて。その隙にピッピのメガトンパンチがサイホーンの横腹を思いつきり当たり、吹っ飛んでいき壁にぶつかり戦闘不能になった

「戻れサイホーン」

…やるな、少女。俺のサイホーンを倒すとはな。だが次はこうは行かんぞ」

サカキは紫と白色の色をした大きいポケモンを繰り出し

大きな雄叫びをだし、そのフィールドが響き渡り。ピッピはそれでも目の前にいる、敵を倒そうと意気込んでいた

「強そう…だけど負けられない…」

「このニドキングに勝てるかな？」

「ピッピ！往復ビンタ！」

ピッピは咄嗟にニドキングの前に立ち往復ビンタをしようとするが

手首を掴まれて、ピッピはニドキングに振り回されて地面に叩きつかれた。地面に穴が開くくらいの音が響き、ピッピは辛うじて立ち上がるが

ニドキングの攻撃は止まない

「ピッピ！リフレクターをはって！」

ピッピの前にリフレクターを張るが、ニドキングの攻撃は想像以上に強く、2・3回くらいでバリアが壊れる。そして、その拳がピッピの顔面に当たり、戦闘不能に化した

「びっい…」

「お疲れ様、ピッピ！」

ましろは最後のポケモン、リザードをだし、目を合わせる。

リザードは炎を吹き出してやる気十分な状態でした。

「リザードか。だが、俺のニドキングを倒す事はできるかな？」

サカキは余裕な表情でましろを見ていた。

ましろは果たして、カラカラを救えるか、次回、続く

## 26話

ロケット団 アジト

ニドキングとリザードの殴り合いは、しばらく続いていた。

最初は、お互いの技を繰り返す。お互いの技がぶつかり合い合戦が続いていた。それでも諦めずにリザードは炎を吐き、ニドキングがそれを交わし、右手を握りしめ拳が炸裂する。

「グオン……！」

「グギヤ……！」

「リザード！メタルクローで攻めて！」

「ニドキング！にどけりでメタルクローを跳ね返せ！」

鋼の爪がニドキングに当てようとするが、蹴りが爪を跳ね返し

よろついた隙にニドキングのパンチがリザードの顔面に当たり

横に飛ばされていく。なんとか体勢を立ち直し、再び立ち向かっていく

「リザード！火炎放射で周りにばらまいて！」

「ニドキング！そのまま攻めろ！」

火炎放射がニドキングの道を邪魔するが、そのまま突撃し

リザードは、避けようとするがニドキングの攻撃が当たり顔面に頭突きを喰らう、なんとかして踏ん張り、リザードはニドキングの両腕を掴み、口から竜の息吹が直撃する。大ダメージを食らったニドキングは

膝をつくがまた立ち上がり、最後の抵抗で思いっきり地面を大きく揺らした。

「グオン!？」

「さつきよりも揺れが激しい!？」

「いけーニドキングそのままにどけりで止めをさせー!」

油断した懐にニドキングはリザードのお腹ににどけりをし

リザードはその衝撃で攻撃を喰らってしまい、そして。

その場に倒れて、戦闘不能になった。慌てたましろはリザードに近づき

リザードを抱えた。

「リザード……ごめん……!」

抱えた状態でましろはリザードの胸で泣き続けた。

ボールをしまう、サカキはましろに近づく。

「……いい勝負だったよ、少女。だがまだまだ未熟だな。……今回だけは見逃してやろう、カラカラを好きにするんだな!」

「…な、んで…」

「…なんでだろうな…だが、これだけは言っておこう」

ましろの耳に聞こえるような声で、サカキは彼女に伝えた

「勝ち上がれ。」

と、言い残し、ロケット団のアジトを放棄し。

ましろはしばらく落ち込んでいたが、リザードをボールに入れて。

折に閉じ込められていた、カラカラを助け出したあと、机の上にスコープが置いてあるのに気が付き、持っていくことにした

ロケット団のアジトを後にした。ゲームセンターまで戻ってきたましろは疲れからかカウンター越しで倒れ込み近くに通った人に助けられ、ポケモンセンターに運ばれていった。

タママシシテイ ポケモンセンター

「う…ううん…」

目が覚めるといつものポケモンセンターのベットにいたましろは近くには誰もいなく、腰に巻いていたボールも無くなっていた。

ベットから起き上がり、靴に履き替えて、受付のところに行く

怪我の回復で抜けていたリーフの姿があった



「ましろ！無事だったんだね！良かったよ…もう心配したんだから！」

「お騒がしてすみません、リーフさん。」

「ううん、ましろちゃんが無事なだけで良かったよ。」

あの後にながあつたか覚えてら限りでいいから話してみて？」

「うん、その前にリザードとカラカラも返してもらわなきゃ」

受付でポケモンを返して貰ったが、カラカラが一人でシオンタウンに向かったと聞いたましろは。一度リーフと一緒にテーブルのところへ向かって行き、先程起きたこととこれからの事を話しかけると

リーフは少し悩んだ後、ある事を告げる

「ヤマブキシティですか？でもまだ通行禁止じゃなかったですか？」

「一時的にそんな事なつてたけど、通行禁止は解除されたみたいよ。」

セキグチシティに向かう先に居眠りポケモンカビゴンがいるから倒れないしね。なので私はそこに行こうと思うけど、ましろちゃんはこのジムを受けてから再びシオンタウンに向かうの？」

「いえ、一旦シオンタウンに戻ってカラカラのお母さんを探さないといけないの。もしかしたらあの幽霊がお母さんの可能性もあるし…」

あ、別にわ、私はお化けが嫌いなわけじゃないからね！」

「へえ、意外。とりあえず目的は決まったようだね。

私はこの後すぐにセキグチシティに向かうけど、ましろちゃんはロストタワーに向かう際には気をつけてね？」

「リーフさんも、ジムバッチ手に入れるために頑張ってください！」

しばらくして、リーフはヤマブキシティのジムへ向かって行き

ましろは再びシオンタウンに向かってカラカラのお母さんを探す事と

フジ老人に会う為、ロストタワーに向かっていくのであった。

ましろ達の旅はまだ続く…

## 27話

シオンタウン　ロストタワー　F 6

前に倒れたという場所まで戻ってきたましろ達。道中でスコープを頭にセットしてかけてみると今まで見えなかった幽霊達の正体がポケモンである事がわかり、少し冷や汗かきつつもパートナーであるリザードと共に登っていった。

F 7に繋がる階段前

「うう…でもここを通らなきゃいけないんだよね…」

怪しい空気がましろの身体を通り過ぎていく。寒いとはいえ少し長袖を着ていても寒いと感じていた。勇気を絞っていざ階段へ行くと

どこからか声が聞こえて来た。前とおんなじ声が頭に響きそして

上を向くと、そこには幽霊がいて。道を通さないように立ち塞いでいた。

「ハ、ハのスコープ…で！」

ましろはスコープを目につけて、幽霊の正体を見破る

そこにはカラカラと同じ姿であり、身体が大きく。おそらくカラカラのお母さんだろうか？。ガラガラがいかり狂った表情で見つめていた

「お、落ち着いて！ガラガラ！」

「ガラア！」

ガラガラは、骨を槍のように裁き、決して近づけないような勢いがありましろは、リザードを出し。暴走しているガラガラに攻撃を仕掛けた。

一瞬だが、技は中断されたのにも関わらず、骨をリザードに向けて

ブーメランのように投げて来た。それをみたましろは避けてと指示して骨を回避した。

「リザード！そのまま火炎放射でガラガラに攻撃して！」

「グオン！」

ましろの指示の元、口から炎を吐き出し。幽霊のガラガラにダメージを与えた。が。一向に弱らせる事がなく、むしろヒートアップした感じで

暴れていた。どうやら本気でこの階段には通さないようだ。

「…うう…どうしよう…余計に怒らせちゃったかな…でもこれ以上戦うとガラガラが…」

その時だった、遠くから鳴き声が聞こえてきた。ふと振り返るとそこにはカラカラが走ってガラガラのところへ向かい、二人で会話をしていた

「カラア！」

「ガラ……！」

親であるガラガラの怒りが弱まっていき、優しい表情に変わっていく

さつきまでの勢いがなくなっており、完全に戦う意志がな 感じられなかった。カラ  
カラと再会できたガラガラはカラカラを抱きしめて。

やがてガラガラの身体は光に包まれていき。天国へ旅立っていった

残されたカラカラは、ましろの方を見つめていた

「カラア……」

「カラカラ……私と一緒にいく？」

そういうと、カラカラは喜んでましろに思いつきり抱きついていき涙を流しながら泣  
いていた。泣き止むまでましろはカラカラを抱きしめるように暖かい温もりを与えて  
いく。しばらくして、カラカラは泣き止み

ましろは手に持っていたボールをカラカラのおでこにちよんと当てて

中に入れてあげた。こうしてましろの手持ちに新たに5匹目のポケモンが仲間に加  
わり、最上階にいるフジさんに会いに行く

ロストタワー 7F

先程とは違い、一本道であり何個か柱が立っていた。

奥に行くと、お祈りしているご老人がいたが、その前にいた黒い服を着たロケット団

の姿があった。

「あ、貴方達は……！」

「あ？てめえは？ガキが来る場所じゃねーんだよ！」

「おいまで、こいつ確かブラックリストに載ってた要注意人物だぜ？」

「おいおいマジかよ、だったら3人で掛ければ勝てるんじゃないか？おい」

「ゆ、誘拐したフジ老人を連れ戻しに来ました！今すぐに解放して！」

「お前には関係ない話だ！だか、これ以上しつこいならここで痛い目にあつて貰うぜ？  
いけゴルバット!!」

ロケット団3人はそれぞれのボールからポケモンを繰り出してきた。

左右端からゴルバット真ん中には黄色と白のバグみみたいなポケモンが

ましろに襲いかかる、ましろは対抗しようと同じく3匹のポケモンを出して、お互いに戦闘場に飛び出してきた。

「リザード！左にいるゴルバットにメタルクロー！」

ピッピ！光の壁でリザードとカラカラにサポートして！

カラカラは骨ブーメランでそこにいる……えーと？バグみみたいなものに攻撃して！

ましろ」指示通りに見事なコンビネーションを果たす

リザードピッピカラカラはゴルバットを先に片付け、もう1匹のゴルバットにはピッ

ピの強烈な往復ビンタで壁にめり込み戦闘不能になり。その後にはバグみたいなポケモンに一齐に攻撃するが

「スリーパー！サイコネシスでカラカラの動きを止めな！」

強力な念力でカラカラは宙に浮かび、むこうの壁に激突させようとしていた。いち早く気付いたピッピはリフレクターを壁の前に二重に貼り

カラカラのダメージを減らした。多少骨に汚れがついたが、カラカラは気にもせずスリーパーに向かって骨棍棒のように振り回す

「カラアア！」

「カラカラ！スリーパーにホネブーメランで叩きつけて！」

「がぁあ?!?!」

カラカラの攻撃が見事にスリーパーの股？だらうか

思いっきり骨ブーメランに当てて、青ざめた表情でスリーパーは倒れ込み泡を吐きながら気絶していた。ロケット団3人はボールに戻し慌てた様子で階段に駆け込んでいった。

「みんな！お疲れ様！」

ましろのみんなの怪我を戦闘後の回復を済まし、お墓の前でお祈りしているお爺さんに話しかけた。

「あの……」

「…おや…？貴方は…？ああここにいるということは下の階にいたガラガラは成仏したようなんですな…？ところでお嬢ちゃん？名前は？」

「ましろと言います、あの…フジ老人ですよね？」

「ええ、私はフジと申します」

…先程騒がしかったようですが何かありましたかな？」

事情を説明するとフジは納得した表情でましろの顔を見た。

その後、ましろとフジ老人はロストタワーから降りていき、フジの家に邪魔することになった。

シオンタウン フジ老人の家 ポケモンハウス

お茶を出されて、ましろはそのお茶を頂いた。

フジ老人も座布団を引き、座り込み話をする事になった

「して…なんのご様子でしたっけ？」

「実は……」

次の街に行こうとする道にカビゴンが寝ているとましろはフジに説明をする。しばらくフジ老人はなにかを考えていてはっと何かを思い出したかのように立ち上がりタンスの中を探り、不思議な笛をましろに渡した。



「こ、これは…笛?」

「これはの…ポケモンの笛と言ってな、寝ているポケモンを起こす道具じゃ。ましろちゃんのためにきつと役立つはずだから持つておきなさい」

「あ、ありがとうございます! フジさん!」

「ほつほつ良いのじゃよ。それより今日は遅い」

明日になったらタمامシシティに行くといい」

ましろはフジ老人の家で一晩泊まる方になり

翌朝、旅の支度を済ませて。止めてくれた人たちに感謝をして

飛び立とうとすると、フジ老人に呼び止められて。話を聞くことにした

「ましろちゃん、決して。ポケモンとの友情を忘れてはならないぞ?」

どんな時もあきらめない勇気がいる。それは時間と共に過ごしたポケモン達はきつと君の事を答えてくれる、だから…元気で旅を続けるんじゃないやよ?」

「…はい! ありがとうございます! フジさん!」

こうして、ましろはフジ老人に別れを告げて再びタمامシシティに向かい  
タمامシジムに挑戦するのであった。

ましろ達の旅はまだ続く

## 28話

タママシシテイ

ましろはタママシシテイに着き。

ポケモンセンターに寄った後に、タママシジムに向かう事にした。

道中邪魔な気が道を塞いでいたため、リザードの力を借り道を切り開いた。ボールに戻そうとして、リザードをボールに向けるが。

リザードの容態が少しおかしかった。心配になり、ましろはポケモンセンターにまた立ち寄るとジョーイさんの検査で、リザードはしばらくの合間戦闘は控えなさいと伝えられた。ましろはリザードを使わない事を決めたましろ。再度、タママシジムに向かい、入り口にいき、中へと入っていく。

タママシジム

お花の匂いが部屋じゆうに漂っていた。中には女トレーナーが沢山いることや、奥には大きな木の下でぐっすりと眠っている着物姿の女がいた。その人の近くに寄ろうとすると、近くにいたトレーナー達が行手を遮るように立ち塞がる。

「ジムに挑戦かしら？ その可愛い子ちゃん？」

「はい！そ、そうです！」

「いい覚悟ね、だけどエリカ様はお昼寝の最中の間

私を倒せたらエリカ様に近づいてよろしいですわ！」

そう言い、ジムトレーナーの一人がボールをましろに向けて

ポケモン勝負を仕掛けてきた。ましろもボールを出しリザード以外のポケモンを繰

り出し、勝負を仕掛けた。

トレーナーの勝負に勝つたましろは勝負に出た、バタフリーの回復を済ませて、そこでお昼寝しているエリカに話しかけようとした。しかし先程の戦闘で覚めたのか、目を擦りながら欠伸をして、ましろの方へ向く

「あら…新たなチャレンジャーですか？」

「エリカ様に挑戦しようとするお方です。彼女、お強いですわ」

「えつと…はじめまして、ましろと言います」

「あらあら…ここのタマムシジムをやってます、草タイプの使いのエリカと申し上げますわ…すう…」

エリカは自己紹介をした後、足つたまま眠りについた。

数秒もかからないうちにパツ！と目が覚めて、ましろの方へ向く

「失礼しましたわ、いい気持ちのちょうど良い暖かさでまたウトウトしておりますわ。

それではチャレンジャーましろさん。指定された場所へ向かいますわ」

「あ、はい！」

エリカの後についていくましろ。指定された場所に向かい

その場に立つと、先程までの草が公式試合のフィールドに、代わり。広いエリアと化した。

「ふあ…それでは始めましょうか」

「これより！ジムバッチをかけた勝負を開始します！」

チャレンジャーましろと！ジムリーダーエリカ様の公式試合…開始！

審判の掛け声で、エリカとましろのお互いのポケモンがそれぞれフィールドにでて、相手のポケモンは糸で絡まっている、謎の生命体を出してきた。

「あれは…何?！」

「あら、これはモンジャラと言いますわ。」

「モンジャラ…なんか凄そうな名前」

「ふふ、見た目で判断してはダメですよ？そちらのポケモンは…あらピツピではないですか」

ましろの戦鬨に出てきたのは自身満々に満ち溢れているピツピが

背後を向き、親指をグツとした。苦笑いをするましろはエリカと目を合わせて、そし

て。モンジャラとピツピの戦いが幕を開けた。

開幕、先に先行を取ったモンジャラの身体の一部のムチがピツピに突っ込んでくる。それを避けるピツピだが、それを合わせるかのように横にムチが横へと迫っていき、避けるのに避けきれずにピツピはモンジャラよつるのムチが当たってしまう。

「びいー」

負け時とピツピも得意の往復ビンタで攻撃をしようとするが避けられてしまい、モンジャラの長靴の足蹴りがピツピに直撃する。吹き飛ばされるピツピは空中からマジカルリーフを放つがそれを読んでいたかのようにとあちらの攻撃もマジカルリーフで反撃させる。地面に着地したピツピは一度距離を取りつつ、ましろの指示で自身の周りにリフレクターを張り様子見をする事にした。

「なかなかいい判断です、ですけどモンジャラの攻撃は止まりませんよ？モンジャラ！溶解液でピツピのリフレクターを剥がしなさい！」

何処から出したのかわからない溶解液をピツピのリフレクターに浴びさせる、少しづつだが、溶けていき、ピツピは一度リフレクターを解除し、今度は気合がこもった拳を握りしめて、勢い余ってそのままモンジャラの顔面にパンチを与えた。もちろん避けられると思っていたモンジャラも少し油断したところを突いたピツピ。

「ナイスだよー！ピツピ」

「やりますわね。ですけど、モンジャラはまだまだまだ元気がありますわよ?」

確かに相手のモンジャラはまだまだ元気があり余っていた。

ピツピの体力も残り少ないと判断して、ましろはピツピと顔を合わせて

お互いに息を吸い吐き、そして。

「ピツピ!メガトンパンチでモンジャラを、む、向い合つて!」

「びい!!」

「モンジャラ!ギガドレインで相手の体力を吸うのよ!」

「モジア!」

モンジャラのつるからなにかを感じるような気配を感じ

ましろは周りにある障害物を利用して、とピツピに伝える

ピツピはフィールドの周りにある木や岩などをまるで自分の道のようにと走り、すぐ近くのモンジャラに近づくが、つるがピツピの行手を阻むがお構いなく、ピツピのメガトンパンチがモンジャラの身体に直撃して

壁に激突し、目を回しながらになり戦闘不能になった

「モンジャラ戦闘不能!チャレンジャーましろ!」

「お疲れ様!ピツピ!」

「びい!」

ましろとピッピはハイタッチをし、エリカはモンジャラに近づき

優しく頭を撫でてあげたあとボールに戻し。次のポケモンを繰り出してきた

「ウツボ!!」

「あれは…」

「凶鑑が光、説明の声が流れた

「ウツボット…危険なポケモンだね…ピッピは休んでて？」

ましろはピッピをボールに入れて、エリカと同じようにポケモンを交代する。

「さあここからですね。草タイプにどう対処するのか見せてもらいますわよ、ましろさん」

「…いけ!カラカラ!」

「カラア!」

ウツボットとカラカラが戦闘に飛び出し、第二ラウンドの勝負が始まろうとしていた。

果たして、ましろはエリカに勝負に勝つことが出来るのか

次回に続く。

## 29話

タママシジム

「カラカラ！ホネこんぼうで叩きつけて！」

カラカラはウツボットにホネをこんぼうのように叩きつけようとするが避けられてしまい、横からはっぱカッターを受けてしまう。

幸い、軽傷に済んだ程度だった、

「ウツボット、カラカラを逃さないようにつるのムチで行手を阻みなさい！」

対するエリカのウツボットは長いツタでカラカラの逃げ場所を封じたり、行かせなかつたり邪魔な行為を繰り返して、カラカラの息が上がったところでウツボットもたつきつける攻撃がカラカラの頭にズシンッ！

と大きな音を立てた。

「か、カラカラ!?!」

「か、カラア……！」

カラカラはふらふらになりつつもなんとか立ち上がりウツボットに強い睨め付けるをした。ウツボットにはそこまで効果はなかったが。



それでもまだ戦う意志を見せるカラカラの姿を見たましろはそのまま戦闘を続行させた。

「カラカラ、無理だけはしないで！」

「あらあら……いいですわね……ですが、私も手加減なんてしません

ウツボット、弱ってるカラカラにつるのムチで抑えた後にギガドレインをしなさい。」

ウツボットは長いツタをカラカラに向けて向かっていく、だがその攻撃を見切り、カラカラはほんの数センチのつるのムチを避け、ホネを拾い

ブーメランのように投げ飛ばす。投げたホネはそのままウツボットのつるを切るかのように真つ二つに切り刻んでいく。

もちろんウツボットのツタはすぐに再生してが痛みは引くには時間がかかるようだった

「さすがですわ、ましろさん。ですがまだ終わりではないですわ。ウツボット！ヘドロ爆弾でカラカラに向けて発射しなさい！」

「エリカさんも、なかなかお強いです……ですけど私だつて負けるわけにはいきませんか！カラカラ！そのまま接近して頭突きをかまして！」

ウツボットのヘドロ爆弾がカラカラに向かつて発射されるが、カラカラはそれを避けながらウツボットに近づき、足に力を込めて思いっきり頭をツノのようにして、頭突き

をかます。避けきれずにウツボットは直撃をくらい、空中に飛ばされるがカラカラも空中に飛びホネでウツボットは地面に叩きつけた、地面に窪みができて、目を回した状態のウツボットがいた。

「ウツボット、戦闘不能、カラカラの勝利！」

「お疲れ様ですわ、ウツボット」

エリカはウツボットを戻し、最後の1匹だろう。ボールを手に持った

「カラカラ？まだ…いける？」

「カラア！」

カラカラのやる気がまだあると感じ、ましろはそのまま戦闘を実行した。

「ましろさん、次で最後の1匹ですわ。いってー！ラフレシアー！」

最後の1匹がましろ達の前に出てくる、それはとても大きな花で甘い香りがあったりを漂っていた。

相手のラフレシアはとても気合が入っており、今までと違うオーラを纏っている事を。それに負け時とカラカラは一步前に踏み出し、今戦いが始まるうとしていた。

「カラカラ！」

「ラフレシアー！」

お互いが共に動き、先に技を繰り出せたのはラフレシアの方だった

カラカラの動きを読み、大きな花でカラカラの攻撃を防いだ後、粉を巻き、カラカラの身体は痺れてしまう。なんとかしてはなれようとするが思うように動かず、三度、ラフレッシュの攻撃を許してしまう

「これでおしまいです！ラフレッシュア！ギガドレイン！」

「カラカラ!?!」

ラフレッシュのギガドレインが身動き取れないカラカラの体力を吸い取っていき、解放されたあと、カラカラは倒れ込み、戦闘不能になっていた

ましろは、ボールを持ち、近くに駆け込みカラカラを抱き抱える。

顔を伏せ泣くところを見せないようにその場に立ち、自分の持ち場に戻って行き、カラカラをボールの中に戻した。

「…お疲れ様、カラカラ」

「ましろさんのカラカラはとてもお強かったですわ。ですけど一歩わたくしの方が上の方でしたわ」

「…まだ、終わってない…ピッピお願い、出てきて！」

リザードは体調不良で出せないのが最後はピッピで対抗する事になった

フィールドに出てきたピッピは背伸びをして、首を鳴らした。

「びゅー！」

「ピッピ、頑張つて！」

「ラフレシア！ギガドレインです！」

「らふー！」

ラフレシアのギガドレインがピッピに向かって養分を吸い取ろうとしたが、ピッピはそれを見切り、横へ飛びかかりその隙を突いてラフレシアにピンタをかます。何発か当たったあと、相手の背後に素早く移動して

ラフレシアの足を足払いをかけ、転ばせる。バランスを崩したラフレシアは花から胞子を出そうとするが、砂煙をピッピは周りにお越して

胞子を無効化にした。様子見でピッピはラフレシアから離れてラフレシアが立ち上がるのを見守り、しばらくして立ち上がったラフレシアは

自分がいた場に戻り、戦闘態勢を整えた

「やりますわね、ましろさんのピッピは。でも負けてはいませんわ！ラフレシア！、はなびらのまい。ですわ！」

ラフレシアの周りにはなびらが舞い、竜巻のようにピッピについてくる

草むらを走り、壁に追い込まれて、ピンチだったが壁を床のように走り込み、そのままラフレシアに向かってキックをかました。頬にキックをくらい、ラフレシアは倒れそうになるが踏ん張り、そしてお互いの体力がなくなっていく。これが最後の技の出し合

いだと、エリカとましろはそう思っていた。

「ラフレシア！はなふぶきです！」

「ピッピ！メガトンパンチ！」

ラフレシアの花吹雪とピッピのメガトンパンチの技が炸裂する花吹雪をピッピは自身の周りに光の壁を貼り、花吹雪の中に突っ込んでいく、強烈な攻撃を耐えつつ、抜けた先にラフレシアがいて、ピッピのメガトンパンチが目の前にいるラフレシアに直撃をくらわせた。その衝撃が強く、ラフレシアは壁に衝突し、大きな窪みができ、地面に落ちていくラフレシアは目を回しながら、戦闘不能に落ちいていた。

「ラフレシア戦闘不能！よって！勝者！チャンジャーましろ！」

「……や、やったよ！やった！ピッピいい!!」

「びい♪」

ましろはピッピに抱きつき、嬉し泣きをしていた。

エリカはラフレシアのところに近づき、よく頑張ったわねと一言言い  
モンスターボールの中に入れた。

「ましろさん」

「は、はい！」

「これが、私達のジムバッジである、レインボーバッジですわ

私に勝ったのですから受け取ってください、おめでとうございますわ」

「あ、ありがとうございます！」

エリカからジムバッチを受け取りましろはエリカにお礼を言った。

みんなに歓迎されながら、ましろはエリカたちにもう一度お礼を済ましたあと、タマムシジムを後にした。その帰り道

「リザード、大丈夫？」

「グオン……」

試合中一度もリザードを出していない、心配になり。ボールからリザードを出す、息切れが激しく先ほどまでの状態がおかしいと気づき、ましろはポケモンセンターへ走っていく。

ましろたちの旅はまだ続く……

## 30話

タママシシテイ ポケモンセンター

ジム戦が終わり、リザードの様子がおかしいとましろは心配して再びポケモンセンターに向かい、リザードの検査をした。

しばらくして、ましろはリザードの元に離れていき、受付に向かいジョーイさんの元へ向かっていった。

「ましろさん、そこにいたのね」

「ジョーイさん、リザードは…大丈夫ですよね？」

「そのことなんだけどね、安心して。リザードはどこも悪くないわ、けど」  
「けど？」

ジョーイさんの話を聞くましろ。どうやらリザードの調子が悪かったのは、『進化』をする事に怖がっていたという事らしい。

ポケモンには進化すると強くなるがごく稀に進化を拒否むポケモンもいて、そのポケモンのために『変わらずの石』が必要らしいのだが、

その石が最近となって貴重な石らしいので現時点では入手方法が厳しいらしい、リ

「ザードは自分の意思で進化はしないようにしていたが、限界が訪れて来た、という理由だった」

「じゃ、しばらくは戦闘には出さない方がいいのですか？」

「可能ならね、でもましろさんのリザードは何かしらの意思で進化しないようにしてると、わたしはそう思うな。例えばあなたの危機が訪れた時にかしてね？」

「私が…ピンチの時、に…そうなんだね…リザード…」

ましろは安心して、近くの側にあつたソファに座り一息つく事に。

ジョーイさんの助手であるラッキーが暖かい飲み物を持って来てくれたようで、ましろはその飲み物をいただき、小さい声で『いただきます』と、言った。

次の日

寝室で寝ていたましろは、扉を開けたジョーイさんの声で目が覚めて

リザードが目覚めたという理由で急ぎ足でリザードの元へ向かった。

診察に、入り、リザードが元気に背を伸ばしていた。ましろはリザードの所へ向かい、そして抱きついた

「グオン!?!」

「リザード!!」

ましろはリザードの顔を見て、一言



「おはようー！」

と、伝えた。

しばらくの合間、リザードは戦闘に出さないと決めたましろは

本当に危ない時に助けてもらおうという事だけでリザードを出す事に決めた、本人であるリザードは戸惑っていたけど。理解はしたような表情をしていた。

セキクチシテイに向かう道路に行こうとするましろ。だが。

「グウ…グウ」

デカくて高いポケモンが眠っていた、いくら叩いても引つ張つても殴つても起きないポケモン。

「どうしよう…起きないじゃ…あつー！」

何かを思い出したかのように。ましろは、前にシオンタウンでフジ老人からもらったポケモンの笛をバックから笛を取り出した

「う、うまく…吹けるかな…ううん…や、やってみなきや…」

何事もチャレンジ…しよう！うん！」

ましろは、息を吸って吐いて、笛を吹き始めた。

「ー♪」

すると、その音を聞いた巨大なポケモンが目を覚ましたが

「カビィー」

寝ぼけてましろを掴み

「えっ…」

ましろは、察した

「カビィ♪」

その後、彼女の姿を見た人は誰もいなかったようだ。

## セキクチシテイ ヤマブキシテイ編

## 31話

サイクリンググロード 休憩所

「いたた…あ、ありがとうね？バタフリー、ピッピ」

ましろはあの後カビゴンというポケモンに喰われそうになったがポケット、からピッピとバタフリーが助けてくれたおかげでましろは助かった。その後にかビゴンと戦闘になり、バタフリーの眠り粉を巻き眠らせて、ピッピの連続メガトンパンチが炸裂して、その後ボールを投げて捕獲する事に成功した。

成功した後、ましろは先にある休憩所に、向かい。

そこで休憩をしていた、カビゴンに、掴まれた後がヒリヒリしている

今はそこで軽い怪我の治療をしていた。

「これでよし、ありがとうね？みんな」

これで新しいメンバーが一人加わり、新たにカビゴンという仲間を加えた。6匹目のメンバーであり、これまで一緒に戦ったりザード、ピジョン、バタフリー、ピッピ、カラカラ、カビゴンがましろの手持ちになった。

「さてと、みんな戻って。そろそろ行くよ」

そう言い、ましろはポケモン達をボールへ戻し、サイクリンググロードに向かっていく。警備員に自転車乗るように言われ、ハナダシティで買って貰った折りたたみ式の自転車をバツクから取り出して、外に出て行く

サイクリンググロード

海の景色が見えると評判で、沢山のポケモン達がいる、南に降っていくとセキクチシティに辿り着くことができる、ましろはのんびりと自転車を漕ぎながら漕いでいた。道中でトレーナー達とバトルをしたり楽しむましろの姿があった。そして中間時点、ましろはポケモン達とお昼をする事になった。

セキクチシティに着いた頃には夕方になっていて、ましろはのんびりとポケモンセンターに向かっていき、隣にはジムがあったが今は空いてないのを確認してから中へ入っていく。

夜、ポケモン達と触れ合いながら。手入れをしていると、ジョーイさんに呼ばれて、電話ボックスに向かい、電話を取る。声の主からヤマブキシティに向かって行ったりリーフの声がした。

「リーフさん？お久しぶりですね！」

「久しぶりね、ましろ。その調子だとセキクチシティには着いたみたいだね？」

「はい、それよりリーフさん。そちらは大丈夫ですか？」

「私？うん、大丈夫だよ。ジムのナツメさんに勝てたからね。しばらくはヤマブキシテイにいる予定なの。シルフカンパニーの見学でもしようかなって」

「そうなんですね、私も明日、ここのジムリーダーの人と戦っていきます、リーフさんもお身体にはお気をつけて」

「ありがとうねー。あ、それと余裕があつたらサファリパークとか行ってみてね？それじゃあね！」

ましろは、リーフと電話を終えた後、ポケモン達と一緒に部屋に入り

一夜を過ごしたのであった。後日、ジムがまだ空いていなかったため、先にサファリパークにいき、ポケモン達を探したり、謎の入れ歯を見つけたり、謎のCDみたいなものをもらったましろは、再びセキクチジムへ向かって行った。

ましろ達の旅は続く…

## 3 2 話

セキクチシテイ セキクチジム

中に入ると、誰もいなくそつと入るましろの姿。するとどこからともなく声が聞こえてきた。

「フアフアフア…よく来たな、チャレンジャー」

「ひゃ!?ど、どこからともなく声が聞こえて来るけど…どこなの…」

あたりを見回すと、一つだけ色が違う壁があつて、ゆっくりと近寄るましろ。壁の前までいき、触れようとした瞬間。壁が剥がれ、そこには忍者の姿をした、人がましろの目の前にいた

「流石だな、良く見破った」

「えつと…他のと違う壁の色でしたので気になったので。あのセキクチジムの人で良いのですよね?」

「いかにも、拙者の名前はキョウだ。お主、名は何という?」

「ま、ましろと言います、よろしくお願いします」

「ましろか、良かろう。では、拙者とバツチをかけた勝負で良いのだな?」

「はいー！」

「では、持ち場に着こう」

キョウとましろは離れて、指名された場所に移る。すると先程まで木の床だったのが専用のフィールドへと変わり果てた。

「わあ…凄い…」

「フアフアフア、それではポケモン勝負といこうではないか。審判！」

気がつくくと、審判が居た。

「これより！ジムリーダーキョウと、チャレンジャーましろの試合を行う！なお、チャレンジャーのみ、ポケモンの交代を認めるとする！」

「いくぞー！ベトベトン！」

「いってー！ピジョン！」

お互いにポケモンを出し合ったましろとキョウ。二人の戦いは始まる

「あれは…ピジョン！油断しないで！」

「いぎ、ベトベトン！ピジョンにヘドロ爆弾だ！」

ベトベトンの強烈なヘドロ爆弾が、ピジョンに向かって発射される

空を飛び回避するピジョン。相手の攻撃が収まり、次第にピジョンの反撃が始まる

「ピジョン！」

翼を広げ、ベトベトンに突撃するが

「そのまま掴み！投げ飛ばしだ！」

キヨウの指示でベトベトンはピジョンを鷲掴みして、投げ飛ばすように壁に放り投げた。ピジョンはそのまま壁に激突し、地面に落ちたがなんとか体を立ち上げて、翼を広げ羽を飛ばした。

「ピジョン……！」

「そのまま押し切れベトベトン！ヘドロ爆弾！」

再び、ベトベトンのヘドロ爆弾が飛んでくる、ピジョンはそれを見て大きく翼を広げて、強い風を巻き起こした。暴風並みの威力でヘドロ爆弾は受け流されてベトベトンに向かい、そして直撃をくらう

「ベトオ!？」

「ぬ！ベトベトン！かわらわりだ！」

ベトベトンは手をチョップの形に変え、ピジョンに襲いかかる。

「ピジョン！フェザーダンスで！身を守って！」

ピジョンは大量の羽を出し、自身の周りをカバーした。攻撃を弾かれ、ベトベトンの隙を見つけ、ピジョンは翼を広げてベトベトンに突撃を喰らわす。

「そのまま！つばさでうつ攻撃！」



「ピジヨオオ!!」

「ベトオ?!?!」

見事に攻撃を喰らわし、ベトベトンは倒れ戦闘不能に化した。ピジョンは地面につき、体力を少し回復する感じで休暇を挟んだするとましろのピジョンは体が光だした。

「えっ?!し、進化…?」

ピジョンから姿形変わり、やがて長い髪を慣らした鳥。勇敢にたくましくなり、大きな鳴き声で、ジムの中を響き渡った。

「ピジヨオオオン!!」

「ピジョン…?凄いや!進化…したんだね!おめでとう!」

ましろはピジヨットに抱きつき、もふもふをしてあげた。審判の人に注意されたあと、持ち場に戻り戦闘を続行した。

「フアフアフア…流石だな、ましろ。ちなみにその子の名前はピジヨットだ、覚えておくが良い」

「ピジヨットね?…よし、覚えた」

「では、拙者の2体目いくぞ!マダドガス!」

2体目のポケモンは爆弾のようで顔が3つ付いているポケモンがフィールドに出た。ましろはさつきに進化したピジヨットで2連戦目を開始した。

「ピジヨット！つばさでうつつ攻撃ー！」

「ピジヨオオオオン!!」

素早い動きでマダドガスに近づくが、攻撃を外した

「ピジヨット!?!」

よく見ると、顔をしかめており。その場に飛び続けていて。ましろはマダドガスを見ると、周りにはガスみたいなものが充満していた。

「どうやら、臭いには耐えきれなかったようだな、マダドガス！煙幕でピジヨットの目を潰すのだ！」

ピジヨットが臭いで身動きが取れない合間に煙幕がピジヨットの周りを囲み、むせるピジヨット。ましろは指示をするがだんだんと落ちていき床に足をつけた時。

「マダドガス！ダブルアタックだ！」

強烈な攻撃を喰らわし、ピジヨットは壁に激突し。その衝撃でピジヨットは目を回し、戦闘不能になった。慌ててましろはピジヨットに近づき抱き抱える。

「ありがとうね、ピジヨット…ゆっくり休んで」

ボールに戻し、ましろは立ち上がり。キヨウの方を見つめた

「キヨウさん、次は負けません！勝ちます！」

「…良いだろう本気で来い！」

ましろは元いた場所に戻り、次のボールを取り出した。  
「毒を食らったら自滅！眠ってしまったら無抵抗！」

我が忍びの術の極意！毒ポケモンの恐ろしさを！受けてみるが良い！」  
「っ！…いって！カビゴン！」

それは、セキクチシテイに向かう前に手に入れた、新たなポケモン。

カビゴンだ、果たして、ましろはセキクチジムのバツチを手に入れることができるのか。

次回に続く…

## 33話

セキクチジム

「かびー」

「こやつがタمامシシティとセキクチシティに向かう道中にいたカビゴンっていうのは？」

「はい、あの時は食べられそうになりましたけどね……」

「フアフアフア……そうか、では見させてもらおうぞ！ マダドガス！ カビゴンに向かってダブルアタックだ！」

先制必勝でマダドガスに攻撃を喰らうが、カビゴンは息を吸いお腹を膨らませて、攻撃を凌いだ。マダドガスはお腹の吸収力に惹かれ、技の威力が弱まってしまった。

「ほお？ なかなか面白い戦略だ、だがな！ マダドガスへドロ爆弾でカビゴンに攻撃だ！」

「そうはさせない！ カビゴン！ のしかかり！」

「かびー！」

カビゴンは足に力を込め飛び、自慢のお腹をマダドガスに全体重を乗せた。一瞬で床がへこみ、マダドガスも押し潰されたがまだ体力があつた

「…す、すごい威力…あんなので押し潰されたら…」

「確かに凄い威力だ、だがその場にカビゴンがいる時点でお主の負けだよ。」

「えっ?…え?か、カビゴンよけ!」

マダドガスの身体が光、そして近くにいたカビゴンを巻き込んだ。辺りは煙で充満していて、治ると、マダドガスが戦闘不能になっていたがカビゴンはギリギリ耐えていた。

「カビゴン!大丈夫!」

「かびー!!」

どうやらまだやれると言っているようだが、先程のマダドガスの攻撃を食らって立ち上がるのがやつとの状況。ましろはボールをカビゴンに向けて戻していく。ましろは「しばらく休んでいて。お願い」とボールに話しかけたあと、次のポケモンを繰り出した

「いって!!ピッピ」

「びいー!」

やる気十分なピッピが戦闘に出てきた

「カビゴンを戻したか。拙者のマダドガスの奥の手である自爆を耐えたことは褒めてあげよう。」

「…ピッピ、油断はしないでね?」

「びい!!」

「さて、これが拙者の最後のポケモンだ！ゆけ！クロバットー！」

キョウの最後のポケモン、クロバットがフィールドに繰り出してきた先程のマダダガスやベトベトンとは違い。相手のクロバットは素早い動きで放浪しているのだろう。気合が充分に入っているようだった

「ピッピ！往復ビンタ！」

ピッピの往復ビンタがクロバットに向けて攻撃するが簡単に避けられてしまい、背後を取られ、ピッピが振り向く瞬間に

「クロバット、噛みつく攻撃だ！」

大きな牙と口を開き、ピッピの頭をガブリと噛み付いた

「び、びいい!？」

なんとかしてピッピは振り払おうとするが、空中の方ではクロバットが有利な為、いくら振り払おうとしても払えない状態でした。

「そうだ、ピッピ！月の光をして！」

「びいい!!」

ピッピとクロバットの真上に月の光が差し込んで来た、眩い光がピッピを回復をするが、クロバットにとつては明かりが弱点でもあり、噛みつきをやめて、ピッピを離れた。

「なるほど、月の光でクロバットの攻撃を辞めさせたのか。良い考えではないか？」

「たまたま思いついただけです、ここから反撃だよ！ピッピ！マジカルリーフ！」

マジカルリーフでクロバットの方に向けて飛んでいく、いくら素早いクロバットでもピッピから技を避けきれずに多少だが、ダメージを与えていった。飛び回るクロバットの次の攻撃がキョウの一言で技を繰り出す

「クロバット、クロスポイズンだ！」

翼を毒に纏い、突撃してくるクロバット。ピッピは避けようとするが間に合わず、攻撃を喰らう。だが、ピッピは毒に効果抜群ではないと思っていた、しかし

「びいびいびいびい?!?!」

「ピッピ!?!」

驚きのあまりましろは驚いた。もがき続けるピッピはなんとか耐えてたが。体力がない状態であった。

「これでとどめだ！、クロバット！エアカッターだ！」

「クロツ！」

「ピッピ！リフレクターでカバーして！」

目の前に壁を貼るが、ましろは勘違いをしていた。

「無駄だよ！エアカッターは物理ではない！」

そして、その技がピッピに辺り。吹っ飛んで行った。そして床に叩きつけられたピッ

ピは戦闘不能になっていた。

「お疲れ様、ピッピ」

ボールを取り替え、そして新しいボールを取り出した

「キョウさん、これが私の最後のポケモンです。」

「ぬ？ ましろ。お主は。後2体残してるはずだ？ 理由を聞かせてもらおうか？」

ましろはキョウにこれまでのことを伝えた。

「…わかった、事情は把握した。ではその1匹のポケモンが最後になるんだな？」

「はい、出ておいで！ カラカラ！」

「カラア！」

「クロバット、まだいけるな？」

「クロッ！」

「カラカラ！ 頑張ろ！」

「カラア！」

お互いに、フィールドを飛び出して。そしてクロバットとカラカラの戦いが始まる。先に動いたのはキョウのクロバットだった。いきなりに攻撃をかまして、カラカラは避けるが。一瞬で背後を取られ手に持っていた骨を振り回すが、背後にいたクロバットは分身であり、前を向くと目の前にクロバットか翼を毒を纏い、その場に斬り払いた



「カラア!？」

「カラカラ! そのまま空中で骨をブーメランにして、投げて!」

カラカラの骨を思いっきり振り回して、骨をブーメランのように回転させる。あつちこつちで飛んでいたクロバットは骨ブーメランにあたり、地面に落ち叩きつけられた。すぐに起き上がり飛び離れた所で

「エアカッターだ!」

と、キョウはクロバットに指示を送った。地面に着地したカラカラはクロバットのエアカッターを当たる寸前に避け、近くに落ちていた骨を拾い、クロバットの方に向かって走っていく

「避ける!」

「カラア!」

カラカラの骨棍棒がクロバットにあたる直前だったが、ギリギリに避けられてしまい、更に動きが読めなくなっていく、むしろはカラカラに骨を投げて!と指示したが、その隙にクロバットの翼がカラカラの顔…否、骨冠に当たりヒビは入らなかつたが、強打して少しカラカラは混乱をしよう。

「カラカラ! 大丈夫!？」

私はカラカラに声をかける、まだフラフラしている状態だが、次第におさまっていく、

が。キョウさんのクロバットは口を大きく開け、噛みつこうとしていた。カラカラは混乱が収まり、間一髪のところまで避けてくれなようだ

「フアフアフア…それじゃあ、行こうか！ ましろ君！」

「はい！ カラカラ！ いくよ！」

「カラア!!」

「これが拙者の最後の技だ…毒の忍びの極意！ とくと味わうがいい！」

クロバットは空高く上がり、やがてフィールドが当たり一面色が紫に変わる。地面にいたカラカラは毒を貰った状態でいた、いくら体力が残っているカラカラでもどくどくの長時間には耐えられるのも時間の問題だった

「こっとなつたら…カラカラ！ 頭突きを喰らわせて！」

「カラア！」

カラカラはましろの呼び掛けに答え、思いつきり地面を足で蹴り飛ばし頭を槍のようにして、クロバットに向かっていく。

「クロバット！ 避ける！」

「クロオ!!」

だが、避けきれず頭突きがクロバットに当たりカラカラと共に天井へと大きな穴を開けた。同時に2匹のポケモンが落ちていき。あたり一面砂煙が舞う。

「カラカラ！」「クロバット!!」

煙がやがて消えていき、カラカラ及びクロバットは戦闘不能になっていた

「か、勝った…?もしかして…」

「ただいまの勝負!チャレンジャーましろ!」

「フオファア…拙者の負けだな、おめでとう!ましろ君!」

キヨウはましろに近づき、手を差し伸ばしましろも手を彼に手を差し出して、握手をした。審判がジムバッチが入ったケースを彼女に渡した。

「カラカラ!お疲れ!本当お疲れだよ!」

ましろはカラカラの頭を撫でてあげると、本人も喜んでいた。その後

ボールに戻して、セキクジムの外に出る、キヨウ達もましろを見送りをした後、ポケモンセンターで疲れを癒した

ポケモンセンター

「リザード…大丈夫?」

ボールの中にいたリザードの様子を伺いながら手入れを行っていた。

以前よりも体調が悪いのか、少し息切れをしていた、やはり進化を恐れているのかそのせいでストレスを抱えているのだろうか。

「…リザード、もし、私がピンチの時は…助けてくれるよね?」

「グオン?」

「あつ、ご、ごめんね。心配しないでね」

リザードはましろを見つめる、それは本人もわかっていた。

そう抱えながら、ふとTVを見ると、それはヤマブキシティの映像が流れていた。黒い服を着た集団がシルフカンパニーを占拠していたからだ

「嘘…ロケット団!」

ましろは驚きを隠せなかった、まさか音沙汰なく唐突にロケット団が現れたからだ。ましろはポケモン達を引き取り、リーフに電話をかけるが通信妨害を貰っているのかいくら掛けても出なかった。ましろは急いでリーフがいるヤマブキシティに向かうのであった。

ましろ達の旅はまだまだ続く

## 34話

道中

リーフさんがいるヤマブキシテイに向かう私。セキクチシティを出る。途中でキョウの姿を見かけたけど、見失ってしまう。だけど今はヤマブキシテイにリーフさんが心配であり、私は急いでそちらに向かつていく。自転車で急いで漕ぎながらシオンタウンに到着、途中で休憩を挟んでそれから道なりに進み大きな建物が見えて来た、そこには沢山の人たちが立ち往生していて、私は自転車を降りて、ヤマブキシテイにあるシルフカンパニーに向かうけど、入り口にはロケット団がいて、入れない状態でした。ちなみに着くのに3日は掛かった

ヤマブキシテイ

「あう…どうしようこの中にリーフさんがいるはずなのに…」

そう呟いてると、聞き覚えのある声が聞こえて私は振り向くとリーフさんの姿が見えた。私はリーフさんの元へ向かっていく。

「リーフさん！良かった…無事だったんですね！」

「あはは…まああね、ましろはセキクチジムのバッチゲットできたんだね。」

「はい、そうですよ！…あ、ここじゃ話しにくいですしポケモンセンターに行きましょう？」

私はリーフさんと共にポケモンセンターに向かう、中に入ると大勢の人達がいた、どうやら先ほどのロケット団がシルフカンパニーで襲撃した原因により不安でポケモンセンターに避難する人達が居たらしく引きこもっている状態になっていた。

私達も座る場所をなんとか確保して、何かあったのかりーフさんの話を聞いた

「あの後ましろちゃんと離れて私はここ、ヤマブキシティのジムに向かったわ、もちろんナツメさんとの勝負はこちらの勝ちだったわ。しばらくしてロケット団の一人がジムに訪れたわ、もちろん追い払ったけど、その時にロケット団は下見で来ていた可能性があると私は勘付いて、ヤマブキシティの情報を回ってたわ。そして数日経った直後、ロケット団の襲撃に襲われてあつという間にシルフカンパニーは占拠されたのよ

…外の情報が遅れたのはそのため、外部との連絡も使えなくなったのもロケット団の一味よ」

「そうだったんですか…通りで何度も連絡を入れても出なかった訳ですね？」

「うん、その後はましろちゃんがここに来て私と合流したって感じかな。…そういえばなんでましろちゃん？、ポケモンに空を飛ぶを覚えさせてないのかしら？」

私は一瞬考えた、確かに大急ぎで空を飛ぶを使えばすぐについたのに、と。だけど私

は空を飛ぶ？を覚えたポケモンなんて居ないと思い、恐る恐るリーフさんに聞いてみた「…え？…まさか知らなかったの…？」

リーフさんは私の顔を見て、驚いていた、確かゲームでNPCが秘伝技で貰える空を飛ぶを貰うのを忘れていたからだ。あれだけ私がいる世界だと貰うより、見て教えてもらったって癩癩であってるのかな？

そう考えていると、リーフさんが私に何度も声を掛けていたのに気づかず数分後我に戻っていく。

しばらくして、私達はシルフカンパニーにどう入るか悩んでいるとリーフさんがいきなりテーブルをパァン！と叩きつけて私は驚き彼女の方に向く。

「こうなったら！強行突破よ！ましろちゃん！」

と、自信満々でリーフさんは私の顔を見つめた、私はポカーンとしと表情をしていたのだろう、だけど。私は正直、怖いと思った。だけどシルフカンパニーの魔の手から解放しなければロケット団の思う壺になるからだ。私も喉に唾を飲み込み、リーフさんと一緒にシルフカンパニーへ向かうのであった。

ましろ達の旅はまだまだ続く…？

## 35話

ヤマブキシテイ シルフカンパニー F1

入り口でロケット団の一人が居眠りをしていて、運良く入れたリーフとましろ達は、シルフカンパニーの受付前にいる受付の人に今の状況を聞くと、どうやらロケット団のリーダーがシルフカンパニーの社長と大事な話があると理由で自由を封じ団ためだという。そのおかげでロケット団に捕まってる人達が大勢いるため、ましろ達は人々を解放するカードキーが必要だと聞き出す二人

「ましろ、どうしよっか？」

「ふ、二手に分かれて探索した方が良く私は思いますよ。」

「そうだね、だったら私はF1からF4階まで探索してみるからましろはその上をお願いできる？」

「うん、任せて！リーフさんも気をつけて！」

ましろとリーフは二手に分かれて、カードキーを探しずつ、人々達を解放するため救出戦へと始める。

シルフカンパニー F7



5階から6階まで、搜索しながら人々達を救出する、ましろ。だが簡単にはうまくいくわけでもなく、行手にロケット団達が邪魔をしてくるが

ましろのポケモン達がいるため、なんとか撃破する事に成功する

そして、カードキーのありかを聞いたあと、7階までやってきたましろ。広いルームへ入ると、一人の女性が彼女の存在に気がついた。

「ロケット団の人…じゃなさそうね、まさかボスに逆らう人かしら？」

「貴方は…？それにここで何をしてるんですか？」

女性はテーブルに置いてあったカードキーをましろに見せつけた。微笑みを見せつつ、団扇のように仰いでいる姿。

「そうね…一言言えば、私はヤマブキシティのジムリーダーでもあって、このロケット団の幹部の一人でもあるわねえ」

「ヤマブキシティ…ジムリーダーで…まさか？ナツメ…さん？」

「ご名答、そうよ。にしてもまさか予定よりも早く来るなんてねえ？しかも可愛い子じゃないの。」

ナツメはましろの顔を近づき、見つめあったあと、一旦離れてどこから出したのかモンスターボールを宙に浮かばせていた。ましろも勝負をする態勢へ変わり、ナツメとポケモン勝負をする事になった

「私に勝てたら、このカードキーを貴方にあげるわ、そのかわりに負けたら私の下部になる事、良いかしら?」

「負けるわけにはいきません!…貴方を倒してシルフカンパニー社長を助けます!」

「ふふつ、良い覚悟、ね? だけど私にそう簡単に勝てるかしら?」

ナツメは、ボールからバリヤードを繰り出してきた。

「バリツ!!」

「バリヤード…、だったら行っておいで! バタフリー!」

「フリー♪」

ましろはバリヤードに対して、バタフリーを繰り出し、お互いに持ち場についた。そして、先に攻撃を仕掛けるましろ…だが。

「バリヤード! サイコキネシスよ!」

動かれる前に相手のバリヤードの攻撃「サイコキネシス」がバタフリーの身動きを取れなくしてましろは命令をするが抵抗出来ず、宙に浮かばせるまるでボールみたいに弄んでいる仕草をした後、壁に向かって激突をさせた。

「バタフリー!?!」

なんとか、攻撃を耐えたバタフリー。さらにナツメのバリヤードは、ましろのバタフリーに手を手刀にして、攻撃を仕掛ける、当然避け切れる余裕もなくそのまま攻撃を、く

らい、戦闘不能にさせた

「ふ、フリー…」

「…お疲れ様、バタフリー…ゆっくり休んで」

ボールに戻したあと、次のポケモンを繰り出そうとするましろだが、突如ナツメは急に笑い始めて、お腹を抱えていた。まるでゴミを見るような心が籠つてない声でましろを煽っていく

「まさか!!そんな程度でええ?キャハハハハ!!!よくここまで戦つてこれたみたいね、そんな糺魚なトレーナーさんでバタフリーちゃんかわいそうにねえええ!?キャハハハハハハ!!!」

「ツ:は!貴方つて人は…」

ましろは涙を堪えて次のポケモンを出そうとした瞬間。バックに入れていた、ボールが飛び出していき、そこにはリザードが決してましろに見せた事なかった、睨め付けるような顔でナツメを威嚇していた。いつもより尻尾の炎が燃えていて、まるでハナダジムであった出来事が始まろうとしていた。

「り、リザード…な…んで」

「グオオオオオンンンンンンガアア!!」

リザードは、バリヤードを掴み、蹴りをお見舞いする、その衝撃に耐えられずバリヤー



「グオオ！」

先程まで暴走していた、リザードはましろのピンチにリザード自身もましろの後を追うように飛び降りる。破れたビル内からナツメはふつと鼻で笑っていた。

「(ごめん…ね…リザード…みんな…)」

ましろは目を閉じ、死を覚悟して。が。リザードの鳴き声が聞こえてましろは目を開ける、さつきまで我を忘れていたリザードの目が正気に戻っていたからだ。ましろはまぶたから涙をこぼし、そして

「リザード…お願い…」

リザードも答えるように返事をして、突如身体が光り始めた

「グオオオオオオオ!!!」

助けて、と呼ぶ声が聞こえた。

……次回は続く……

## 36話

やがてリザードの姿は大きな翼を広げて、落ちていくましろをキャッチした。ましろは進化したリザードの姿を見て、驚いた表情で見つめた

「リザード…良かった…良かったよお!!」

ましろは溜まっていた涙をリザードの胸に顔を当てて泣いた。一緒に冒険したからこれまでの感情が生まれたからだ。ましろは一言リザードにこう呟いた

「ありがとう…リザード…」

「グオオオオン！」

大きな翼で先程まで落ちたビル内に入り、その様子を見ていた。

シルフカンパニー 7階

「チィ、そのまま落ちていれば良かったものの…しかもまさかりザードからリザードンに進化するとわね、あいつの情報も少し違ってたみたいだし」

「…あいつ？」

「あ？メスガキには関係ない話よ、…でもこのままじゃかわいそうだから

少しだけ教えてあげるわ。貴方にも会ったことある人よ」

ましろは旅先で出会った人を思い出そうととする直前、フリーデインの攻撃がリザードンに対してサイコキネシスで動きを封じ、油断したましろはリザードンに指示を送る。

「リザードン！ 貴方なら、打ち破れるはずだよ！ 頑張つて！」

「グオオガアア！」

フリーデインのサイコキネシスを打ち破り、大きな翼を広げて、遠吠えをした。一瞬だがフリーデインは怯み、さらに追い討ちをかけるようにとリザードンの攻撃が炸裂する。さらにフリーデインは壁張りをしようとするが間に合わず、そのまま直撃を食らう。リザードンは一度ましろの近くに戻り体制を戻した

「まだよ！ フリーデイン！ 気合玉！」

フリーデインの中央に気合いのこもった玉が発射させる、リザードンは爪を大きくし、両爪をクロスしそのままお返しした。跳ね返った気合玉はフリーデインに直撃して、煙を上がる。やがて煙が収まっていき、フリーデインは戦闘不能になっていた。

「あらら、負けたのねえ。アハハ、けど面白かったわ。また今度。それじゃあたしは次の任務があるので。」

「待つてください！ ナツメさん！」

「…何よっ？」

「なんで貴方は、ロケット団の幹部なんかには？」

ナツメは少し黙ったあと、ましろに振り向き、彼女に聞こえるような声で話しかけてきた。

「サカキ様に忠誠を誓ってるからかしらね？フフフ」

「サカキ…って！あ、ま、まって！ナツメさんまだお話が！」

「また会いましょう？それまではせいぜい、ポケモンを戦闘不能にさせないことね。フフフ」

影のように消えたナツメ、テーブルに置いてあるカードキーを入手したましろは一度、ポケモンを休憩するべく休憩室を探した。ようやく休憩室を見つけたましろはそこに隠れてた人を見つけ、しばらくの合間、バタフリーを預ける事にした。

「ふり…」

「バタフリー、迎えに来るからここでゆっくり休んでてね？…それじゃお願いします」

「任せて、社長室へ向かうフロアには4階の、会議室にありますので

お気をつけて！」

ましろは4階に向かい途中でリーフと会う、先程までの出来事を話した後、ましろ達はカードキーを開き、社長室へのフロアマップを踏んだ。

別の部屋にたどり着き、奥へ進もうとすると

「きゃー！」「うお!？」



「えっ、ぐ、グリーン君…?」

そこにはグリーンがいた。久しぶりの再会でましろ、リーフと、グリーンは喜んでいった。どうやら事件当日、グリーンは社長と会っていたらしいがロケット団に捕まりしばらく身動きが取れなかったのだっただけらしい。

「大変だったんだね、グリーンさん。」

「まあ、誰かが侵入したとかで騒ぎになってたからその隙に抜け出したのは良いがカードキーがなくて立ち往生してたわけさ。…それよりもさ、ましろ」

「えっ、な、何…?」

グリーンの手にはボールを構えていた、それは勿論グリーンとのポケモン勝負を挑む合図だからだ。ましろもボールを構えて、リーフはその場を離れてもう一人の近くで見学する事になった。

シルフカンパニー 4階 通路

ましろの最初に出したのはカビゴンからだった。グリーンの繰り出したポケモン、それはましろと同じピジョットだった。

「ピジョット!」 「かびー!」

「ましろはカビゴンから相手なんだな!」

「そういうグリーンだってポツポから進化させたんでしょ!」

「へっ、そうだけどな！だが、今までと一緒と思うなよ！ピジヨット！つばさでうっ攻撃だ！」

ピジヨットの大きな翼がカビゴンに向かって突撃する。が、自慢のお腹で防御を固めてピジヨットの翼で打つ攻撃は無効化にされた。

「カビゴン！炎のパンチで追撃！」

カビゴンの手が真つ赤に燃え始める握りしめてピジヨットに攻撃を仕掛ける、だが、相手は空を飛んでいて、読めない動きで翻弄をしている

それでもカビゴンは落ち着いて対処して、狙いを済ませて炎のパンチを喰らわした。  
「ピジヨオ?!?!」

お腹に当たり火傷を負い、ピジヨットは足を地面についた。羽休めだろうと思いきろはさらに追尾を開始する。

「カビゴン！噛み砕く！」

カビゴンの大きな口を開けて、ピジヨットに飛びかかり、そしてタイミングよくピジヨットは空を飛び、ギリギリのところまで回復を済ませた様子だ、その直後ピジヨットの超落下でカビゴンの頭に直撃をするが混乱にはならなかった。その代わり

「びじょよ…」

ピジヨットは混乱をしていた。ましろはチャンスと思いい、カビゴンに指示を伝えた、

グリーンはピジョットに呼びかけるが一方に混乱が収まることもなくカビゴンの拳があたり壁に激突して、戦闘不能にピジョットはなった。

「やるな、ましろのカビゴン。だが次はうまくいかないぜ？ いけ！ ギャラドス！」

「ギャオオ！」

2匹目はギャラドスを繰り返す、グリーン。ましろとカビゴンはお互いの顔を見て戦闘を続行した。先に動いたのはギャラドスの方だった。

「滝登りで奴を怯ませろ！」

「カビゴンギャラドスを受け止めて！」

前をガードしようとするが、とつさにギャラドスは技をキャンセルして、カビゴンの背後へ回り、急な対応でカビゴンは付いていけずギャラドスの破壊光線を背中に大ダメージを食らってしまう

「カビ……」

カビゴンはそのまま倒れ込み、戦闘不能へなった。ましろは近くによりカビゴンを撫でた後、ボールに戻し、次のポケモンを繰り出した。

「ぴいー！」

「ピッピか、やっぱましろらしいは。それじゃ始めよう！」

「ピッピ、油断しないでね！」

「びん」

グリーンとましろの戦いは後半へ続くのであった。  
次回に続く

## 37話

シルフカンパニー 4階

ましろのピツピとグリーンンのギャラドスの戦いはまだ始まったばかりだ

ギャラドスは噛みつきこうとピツピに向かっていくが華麗に避けてその合間にピツピは往復ビンタでダメージを与えていく。お互いの技と技がぶつかり合い、やがて一瞬の隙で技が決まる勝負でもあった。

「ギャラドス！ 滝登りだ！」

「ピツピ！ リフレクター！」

ピツピのリフレクターを張り、ギャラドスの滝登りを抑えた。

壁がなくなつた瞬間、ピツピのメガトンパンチがギャラドスの顔面に直撃を喰らわして、ようやくギャラドスを戦闘不能にさせる。手持ちに戻したグリーンンは次なるポケモンを繰り出そうとしていた

「相変わらず、強いなピツピは。」

「グリーンンのギャラドスも強かったよ！」

「へへ、次のポケモンは新しい新メンバーだ。出てこい！」

3匹目はサイドンを出した、大きな身体で硬そうなボディをしていた。ましろはピッピだと不利だと感じ、戻そうとするがピッピはこのままいけると余裕は表情を見せつけた。仕方なくましろはそのまま戦闘を続行した。

「ピッピ、往復ビンタ！」

「びいー！」

ピッピは動かないサイドンに向かって往復ビンタを繰り返した。が、何やら様子がおかしかったが、それに気がつくのはすぐにわかる事だった

「よし、そのままカウンターだ！サイドン」

「どっさあー！」

「しまっ…ピッピよけっ」

避けてという指示が間に合わず、ピッピはサイドンのカウンターをモロにくらい地面に叩きつけられた後、戦闘不能になっていた。ましろはすぐに回復を使い少しでも痛みを和らげるようにと優しく手を握りしめた

眠るようにとピッピはボールに入れ、ましろは次のポケモンを出した

「行っておいで！カラカラ！」

「カラア！」

「お、ロストタワー以来のカラカラだな、久しぶりだな、元気だったか？」

「カラア！」

「カラカラも元気だよって言うてるよグリーン。」

「そうか、そうだな。良し。カラカラの先行からで良いぜ？」

「わかった、カラカラ！骨棍棒！」

「カラア」

カラカラは右手にある骨を棍棒のように振り回しながらサイドンに向かっていく。一方でサイドンはカラカラの攻撃を避けようとするが、カラカラの身動きな動きで骨棍棒がサイドンの、あっちこっちに、ダメージを与えてゆく。

「サイドン！カラカラを掴め！」

サイドンは真ん中に行くであろうカラカラを予測した後両腕を使い、カラカラの動きを封じ込めた、カラカラはもがくか、振り落とせなくサイドンの、叩きつける攻撃を食らった。

「から…あ！」

なんとか、耐えたカラカラは起き上がりサイドンを見つめ、骨を構えた

「一気にとどめだ！サイドンつのでつく攻撃！」

ツノを尖らせて、足を蹴り飛ばし、カラカラに向かっていく。

「カラカラ！あなをほる攻撃でサイドンの動きを止めて！」

カラカラは地面に穴を掘り、攻撃を避ける。サイドンは一度立ち止まりあたりを警戒する、すると足元から地面が盛り、カラカラの骨が真下から攻撃。受け、軽くだが少しだけ吹っ飛んでいき、仰向けになりサイドンは倒れた。

「よくやった、サイドン戻れ！」

「お疲れ様カラカラ」

ましろはカラカラの頭を撫でた、お互いにポケモンは1匹ずつだったため、カラカラをボールに戻し、リザードンと相手のカメックスがフィールドに出てきた。

「ガメエ」「グオオン!!」

「リザードンか、へへ、面白くなってきたじゃん！」

「あれは…カメックスかな？つ、強そうだよ…」

カメックスの事自体まだ知らないましろ、それでもリザードンと戦うと決めている彼女は、リザードンと顔を合わせて、そして、先制攻撃を仕掛けたのはグリーンのカメックスの方からだった

「みずのはどう！」

「リザードン！りゅうのいぶきで跳ね返して！」

波動と息吹がぶつかり合い、周りに煙が舞う、その中に同時に2匹のポケモン達は



入っていく。見えない状況の中、中で技が炸裂しお互いのポケモンが弾き出されたようだ。

「カメックス！ハイドロポンプだ！」

「リザードン！空高く飛んで交わした後に切り裂く攻撃！」

飛び回り攻撃をかわす、リザードン。カメックスの砲台から水が出なくなつた瞬間にリザードンの切り裂く攻撃があたり追尾に回りながら蹴りを喰らわした。お腹を抑えるカメックスはもう一度ハイドロポンプを繰り出し、今度はリザードンに直撃をくらい吹っ飛んでいく。びしょ濡れになりつつもリザードンの尻尾は燃え続けた。

「グリーンさん！これで決めます！」

「なら、こつちもいくぜ！カメックス！」

『リザードン カメックス!!ドラゴンクローだよ！ ロケット頭突きだ！』

リザードンの爪とカメックスの頭突きが同時に当たり、周りに衝撃が走る。お互いの技のぶつかり合いで、押し返したのはましろのリザードンだった。

「ここで決めて！リザードン！メガトンキック！」

跳び、空中でよろろついているカメックスに向かつてキックをかます、リザードンの技が当たり、グリーンのカメックスは目を回してその場に倒れて、勝利した。

「カメックス戻れ！……ましろ君の勝ちだな、ありがとうよ！」

カメックスを戻したグリーンはましろに近づいて、ましろも大慌てでリザードンにお疲れ様を伝えてボールに戻していく。

「グリーンもお疲れ様、あ、今回私が回復するから!」

「良いって事よ、俺様がましろのポケモン達を回復してやるからよ、ほら、いままでのポケモン達を出せ、この先ロケット団のボスがいるんだしよ」

グリーンは、傷ついたポケモン達をましろのポケモン達と一緒に回復をさせてもらい、近くにいたリーフもましろ達のポケモンな回復の手伝いをした。

「それじゃ俺は行くからな、リーフ。ましろ君を頼んだぜ?」

「むう、わかってるわよ」

そう言い、グリーンは左手で振りながら、ワープパネルへと乗っていった。

「それじゃ行きましょうか?リーフさん?」

「そうね」

奥のワープパネルに行こうとすると、先程の社員の人がましろ達を呼び止めた。リーフは、先に向かつて行き、ましろは社員の人と話しを聞くことになった

「先程の戦い、見てて凄かったよ。」

「あ、ありがとうございます。」

「もし、よかつたらこいつと一緒に旅してくれないか?こいつはラプラスといって、海で

泳ぐのが好きなポケモンだ。ここの狭い世界よりもっと広い世界で旅をしてもらいたいんだ。お願いだ」

ましろは、社員からラプラスを受け取った

これで彼女の手持ちは6匹になった。

「ありがとうございます、必ずシルフカンパニーを、解放します」

ましろは奥に進んだリーフを追い、ついにロケット団のボスと会う

そして、目に見たものは。

それを知るましろは、もう少し先の話である。

オマケ、ましろの手持ち

リザードン エース

ピジョット 最初の捕まえたポケモン

バタフリー 怪我で治療中だか：

ピッピ とある漫画のギャグ修正はかかっているが、そもそもこいつ女である、勇敢な

性格。

カラカラ ついていく心優しいポケモン

カビゴン ましろを食べそうになった居眠り

ラプラス 癒し担当、海が好き

次回へ続く…

## 38話

シルフカンパニー 社長室

社長室の前にはいた、ロケット団の下っ端を片付けたリーフの姿

既に手にはカードを奪っていて、ましろとリーフはついにロケット団のボスに出会した。そこにいたのはましろにとって久しぶりに会う人物だった

「あ、貴方は…」

「まさかと思っていたがお前だったか、ましろ君。我がアジト以来だな、それにもう一人の君は誰だ？」

「ましろの友達よ、貴方がロケット団のボス？」

「そうだ、だが今は私は社長と大事なお話をしている。邪魔をするなら容赦はしないぞ？ ましろ君」

ましろはとっさにポケットからボールを取り出し、カラカラを繰り出した。対するロケット団のボス。サカキも同じようにポケモンを繰り出した。

「カラア！」「ガラア！」

「サカキさん！」

「覚えていてくれたか、私の名前を。だが、このガルローラを倒すことはできるかい？」

以前に戦ったとは思えないぐらいだ。けど前にメンバーを変えているのか、サカキの手持ちであるガルローラは初めて見る姿だ。つるどい目つきでカラカラを見ていた。

「カラカラ！お願い！」

「カラア！」

カラカラの骨をブーメランのように飛ばし、ガルローラに向かっていく、が。ガルローラはそれを受け止めてそのままカラカラに送り返した。

驚いたカラカラはギリギリにあたる瞬間に避け、壁に突き刺さった骨を拾いにいく。

「リーフちゃん！」

「わかってる！」

リーフは、社長と秘書を連れてこの場を去っていく、ましろとサカキの2回目の戦いが幕を開ける。

「私に勝てるぐらいには慣れたか？」

「あの時は…負けましたけど…でも、私はパートナー達と共に強くなっています！だから…サカキさん。貴方に勝ちます」

「フツ…なら見せてみる！ガルローラ。のしかかりだ！」

ガルローラは空を飛び、カラカラに向けてのしかかりを仕掛ける。カラカラはそれを避

けて、ガルーラはほんの少し油断した隙に、骨こんぼうでガルーラのおどところを叩きつける。衝撃が強く、ガルーラは踏ん張りを見せるが、カラカラのコンボが続き。

「カラカラ！ 頭突き！」

強烈な頭突きを構まし、ガルーラの顎に直撃を喰らわせる。

「……」

サカキは驚いた表情でましろのカラカラをみていた。すぐにガルーラほ状態を見ることが回っていて戦闘不能になってすぐさまボールに戻していく。

「…フツ、次のポケモンを倒すことはできるかな？ ゆけ！」

2体目のポケモンはサイホーンだ。だけど前と戦った時には違々とましろは勘付いていた。ましろは一度カラカラを戻し、プリンを繰り出す

「ぷりー！」

「ほお？ 勇敢なプリンか。だが相性は不利だぞ？」

「それでも、サイホーンにはプリンでいかせてもらいます。それと前にリザードと戦ったサイホーンじゃないと思っっています。」

「ククク、面白い。ならかかってこい！ このサイホーンを打ち破れるならばな！ サイホーン！ 突進だ！」

「プリン！ 往復ビンタで立ち向かって！」

お互いの技がぶつかり合う、それは一瞬でも気が抜けない勝負。

「サイホーン！みだれづきだ！」

「プリン！リフレクターを張って！」

「あまい！後ろに回れ！サイホーン！」

「(きた) プリン！飛んで！」

相手の攻撃を読み、プリンは飛んだ。サイホーンは後ろに回り込んだが、常に目の前にいなくて技は不発をしまう。

プリンは足を地面につき、思いつきり足を蹴り飛ばしサイホーンに向かい、メガトンパンチを喰らわす。

「グガアン!？」

怯んだサイホーンの間を逃さないプリン。もう1発技を当てようとするが。サイホーンの目つきが変わり、ツノが突然回り出す。その状況を見た、ましろはプリンに指示をするが、時すでに遅く。サカキの口から技の指示を繰り出した。

「サイホーン、つのドリルだ」

「!!プリン避けて！」

「遅い！」

指示が間に合わずに、プリンはサイホーンほつのドリルが命中し



ましろのプリンは戦闘不能に陥った。

「あ…プ…プリン…！！！！」

ましろは大声を出し、駆け寄ってプリンの方へ向かっていく

「ごめん…プリン…」

「ぷり…」

プリンはましろの手に持っていたボールに戻されていく

「フハハ、前とおんなじだなましろ君。次は君のパートナーであるリザードかな？」

「…そうですよ。」

ましろはボールを握りしめそして

パートナーであるリザードンを繰り出した。

## 39話

シルフカンパニー F1

リーフは、社長を連れて、なんとかF1階まで避難する事ができ一息ついた。周りには社員達が大量にいて、避難してきた人達がここに集まってある状態だった。

「ましろ…無事にいて」

リーフはロケット団のボスに一人で立ち向かうましろを心配し無事に戻ってくることをただ祈るだけだった。

シルフカンパニー 7F 社長室

ましろはサイホーンに対して、リザードンを繰り出し。

2匹のポケモンは二度目の対面を果たした。

「グオオオオオオオオン！」

「リザードン、いける？」

リザードンはましろの方へ向く。お互いに信頼を得ているからこそ。

お互いのパートナーだからこそ今の自分があると、リザードンとましろは思っている。

「前に戦ったリザードからリザードンに進化したか。フハハこれは面白い戦いになりそうだな。」

サカキは微笑みをこちらに見せる、まだ余裕がある表情だ。

ましろは一旦呼吸を整えて、自分の胸に手を当てて落ち着かせる

「……いこう！リザードン！」

「フツ、サイホーン！突進だ！」

「リザードン火炎放射でサイホーンの突進の動きを遅くして！」

リザードンの火炎放射がサイホーンに向かって発射される

熱気がサイホーンの身体を浴び、火傷を負い、サイホーンの動きが少し程度だが、遅くなっていた。

「リザードン！切り裂く攻撃！」

翼を広げて、急接近して、爪をたて、サイホーンを切り刻む

一瞬だがサイホーンは怯み、その隙にましろのリザードンの攻撃が炸裂する

「リザードン！メガトンキックでサイホーンに向けて蹴り飛ばして！」

空高くから真下にいるサイホーンの顔に急降下で蹴り飛ばし

サイホーンは壁に激突し、戦闘不能になった

「戻れ、サイホーン。……クククなかなかだな、ましろ君。しばらく見ないうちに強くなっ

ているとはな。」

「サカキさん…なんで貴方は…」

「今のお前には関係ない。さて、次でラストだ。君にもわかる通りさつき戦ったのは前にリザードと戦ったサイホーンではない。無論、進化させている。これを倒す事ができるか?」

「…!」

「グオオン!!」

「リザードン?、そうだよね。うん。」

ましろは前を向きサカキに伝えてた。

「私は貴方に勝ちます。そしてシルフカンパニーのみんなを、解放します」

「そうか、なら。ゆけ!サイドン!」

3匹目のポケモン、それはリザードンと同じぐらいの大きさで

それはとてつもなくでかいポケモン。サイホーンとは違う姿であるサイドンが出てきた。

「あれは…サイホーンの参加した…サイドン…?」

「フツ、さあましろ君のリザードンはどういう戦いをみせてみる」

ましろはサカキのサイドンに向かい、リザードンの切り裂く攻撃を指示する。

「サイドン、受け身をしろ！」

リザードンの攻撃を受け身で受け流し、リザードンはさすがに遠くへ放り出される。翼で壁に激突を和らげ、風を起こし。そのまま突撃をしてサイドンのお腹にパンチを当てるが、サイドンは怯みをせずに攻撃を受けとめ、リザードンの腕を押さえつつ、リザードンのお腹に同じようにサイドンの攻撃が当たった

「グオン!？」

「リザードン!!？」

「ふっ、サイドン、そのままリザードンを振り回せ！」

地面に足跡がつくほどの威力が付くほどの火力サイドンの足裏に焦げ目が付くほど焦げた臭いが漂う。リザードンは一度離れようとするそれを逃さずにサイドンはリザードンの尻尾を掴み、その場で回転をし始める

「リザードン！ 火炎放射で振り払って！」

「無駄だ！ サイドン！ そのまま壁に向かって投げ飛ばせ！」

火炎放射を放とうとするが常に回転し始めていて、身体ごと回し回転が勢いよくそして、リザードンの尻尾を離す。リザードンはそのまま壁は激突をくらい、壁が崩れてガレキの地下になってしまいが、幸いにも炎の尻尾だけは埋まらずにいる状態でした。

「リザードン!!」

「よく頑張った方だが、これでお終いだ！サイドン！つのドリル！」

ツノをドリルのように回転し始めて、突進をする。ましろの必死の呼びかけで、リザードンは瓦礫から脱出をして、高く飛びサイドンの攻撃を交わした。そのままサイドンは穴が開いた壁に向かい

「何!?!」

「リザードン！火炎放射！」

ましろの指示でリザードンは上空から火炎放射を放つ、サイドンは避けようとするが、先ほど飛び散った瓦礫がサイドンの足に引っかけり転んでしまい、リザードンほ火炎放射を直撃を食らい、あたり一面炎と煙があたりをフロアに広がっていった

「サイドン!!」

「……」

煙が収まり、2匹の姿が見えてくると、サイドンは戦闘不能になっていて、リザードンは膝をついていたが、踏ん張り立ち上がった。

「…戻れ、サイドン」

サカキはサイドンをボールを戻し、ポケットに入れて、この場を去ろうとし、ましろはサカキ。呼び止めた

「あ、あの待ってください、サカキさん」

「…次会う時は、またお前と戦うことを楽しみにしているよ

今回ばかりは作戦が失敗してしまったのでな。では」

「あ、…行っちゃった…そうだ！リザードンの治療を済ませないと！」

ましろはリザードンのそばにより、治療を始めた。

しばらくして、下に行っていたリーフ達が出てきて、ましろは状況を説明した。その後、社長やスタッフ達がやってきて、今回の騒動はテレビでも中継される事になり、衝動が収まる気配がなかった。

数日経った日、ましろ達はセルフカンパニーの社長達に呼ばれる事になった。

## 40話

セルフカンパニー 7階

ましろ視点

ロケット団襲撃事件から数日達、私とリーフさんは社長きお呼ばれされた、中に入るというんな人たちに感謝を言われた、とても嫌な気持ちにはなれなかった。社長室に入り私達は社長に、新作のモンスターボールがあると言われ、私達はそのボールを受け取った。

ちなみにマスターボールというらしい

「ありがとうございます、社長さん」

「いいのじゃよ、気をつけて旅を続けるんじゃないよ?」

社長室を後にして、私はリーフさんと別れて、休憩室に預けたバタフリーを返してもらうために足を運んでいく。

セルフカンパニー 休憩室

「ふりー♪」

「良かった、バタフリー…心配したんだよ…もう…」



私はバターフリーの頭を撫でた、しばらく会えなかったから少し涙脆かったんだろうってそう思えた。

「気をつけてね？」

「はい、ありがとうございます」

私はバターフリーをボールに戻し、セルフカンパニーを後にした。

だけどひとつだけ私が気になっていたのはヤマブキジムのことだ

ヤマブキジム 前

「…あう、閉まってる…よね」

前にロケット団の襲撃の時に戦ったナツメさん。だけどジムが空いていなくて、私は諦めて7つ目のバッチがある、グレン島に向かう事になった。

グレン島に向かう途中、私は、ラプラスの歌声を聴きながら海を渡っていた、歌も上手いし、聴いていて少しウトウトし始めた頃

大きな声が聞こえて私は空を見上げた。

「あれって…!」

青く、雪のように空舞うポケモンの姿はグレン島の横にある大きな島へ消えていくのを見た私は、その島へ向かうとしたのだけど、グレン島に向かうため、寄らないで行こうとしたけれど、大きな岩があり

どうやら、行くにはこの島を通らないと行けなかった。

「ラプラス、戻って」

「らぷー」

ラプラスをボールに戻した後、近くの看板を見た

そこには双子島と書いてあった。私はリュックから防寒着を装着していき、双子島の洞窟へ探索を始めた。

中は一面氷でできていて、周りには野生のポケモンや、時折

子を守るポケモンなど、私にとってはとても芸術的だった

「うう…寒い…ってあれ？この水…少し流れが速い？」

「でも、ここを通らないと行けないのよねーラプラスー出てきて」

ラプラスを出して、流れが速い海を私は乗っていき。

コントロールができなくラプラスも困惑をしていた、それはそうだよ

流れが早くてどこかに降りられればと必死に流れる先にたどり着いた場所は、先ほど空で見かけた、ポケモンの姿があった。

「あ、あれって…確か…」

慌てて私はポケモン図鑑を取り出しデータを取ろうとポケモンに向ける

すると、大きな翼を広げて吹雪を吹き出すように私に攻撃を仕掛けてきた

「ふ、吹雪：！？ち、ちがう！私は荒らしに来たわけじゃないの！！」  
「グギャオー！」

大きな雄叫びを放つポケモン。どうやら私に攻撃的な患者を持っているようだ、ポケットからボールをなんとか取り出した私は、リザードンを繰り出した。

「リザードン！！お願い！フリーザーを静ませて！」

「グオオオオオン！！」

フリーザーとリザードンの戦いが始まった。

ましろの旅はまだ、続く…

## 41話

## 双子島

「リザードン！火炎放射でフリーザーに向けて発射して！」

私は、リザードンに技を繰り出す命令をして、フリーザーに攻撃を仕掛けた。当然相手も技でお返しをし、強烈な冷たい冷気がリザードンを襲いかかるが、かえんほうしやの火力が少しだが、フリーザーの冷気を溶かし、熱い放射がフリーザーの羽に当たった

「ギャオ!!」

「効果は抜群…だよな？」

フリーザーは飛ぶのをやめず今度は翼を羽ばたけて、強い風を引き起こした。地面に張り付いていた氷の礫達が宙を舞、その風の中に

リザードンがいて、身動きが取れずに巻き込まれていく。私は指示を出そうとするがフリーザーはその隙を逃さず、私に目掛けてクチバシを尖らし

こちらに突進してきた。避けようにも、私は運動音痴であるため

避けられずにその場に尻を打って目の前に迫ってくるフリーザーの攻撃が当たろうとしていた。

「だめ…間に合わない…!」

目を閉じ、死を覚悟した私はクチバシが私に突き刺さるの待ったけどすぐには来ず、私はゆっくりと目を開けると

「グオオオンン!!」

リザードンは、フリーザーのクチバシを片手で止めていて

翼で私のギリギリに当たる直前まで強く羽ばたいていた。

「り、リザードン!!無茶だよ!?私のことはいいから手を離して!」

「グオオ!!」

「リザードン…なんで…」

リザードンは、何があっても私を守ると、背中で伝わってくる

私は立ち上がり、前を向いて、リザードンに技の指示をした

「リザードン!フリーザーのクチバシを逆回転で利用して!」

その力をリザードンが得意とする地球投げで吹っ飛ばせて!」

リザードンの手は、フリーザーのクチバシをタオルのように回転をさせて二匹のポケモンは反対周りをする時計周りを始めて、フリーザーは一瞬の抵抗をやめた隙にリザードンはフリーザーの翼ごと抱き抱えて

空高く周りを飛んだ。やがて徐々にスピードが上がり

暴風並みに速くなった時、私はリザードンに聞こえるような声で言った

「そのまま地面に叩きつけて！地球投げっ！」

「グオオオオオンンン！」

思いつきりフリーザーを地面に叩きつけたリザードンは最後にもう一撃、尻尾でフリーザーを叩きつけた。床に穴が開くほどの衝撃がし

天井から、何番か氷柱が落ちてきた

「あわわ！氷柱こっちに！」

「グオ!？」

避けようにも避けられずにリザードンの技は繰り出す元気が先程なくて出せない状態だから、私は今度こそ死を覚悟した

その時だった、どこかで聞いたことがある声が響く

「カメックス！ハイドロポンプで吹き飛ばせ！」

勢いよく水の噴射が私の頭上に落ちる氷柱を砕けたり、粉雪のように

ひらひらと落ちていった。私は背後を振り返りそこには見慣れたトレーナーがいた「やっぱり、ましろではないか。」

「グ、グリーン……あう……」

安心したのか私はその場で座り込んだ、慌てたグリーン君は

私の近くに寄ろうとした瞬間、大きな地響きが鳴り大きな鳴き声が響き渡る、私とグリーンは声ができる方へ向くと

「ギアオオ!!」

「うそ…!?!」

「あれは、フリーザーか? やっぱり。姿が見えたから探索したらちょうどましろがいて、戦っていたわけか! つと! ましろ!

オレの背後に下がれ!」

「う、うん! リザードンも!」

私はリザードンとグリーンの後ろへ避難して。グリーンはもう一匹のポケモンを繰り出した。犬みたいな大きなポケモンが出てきた

「ウインディ! かえんほうしゃ! カメックスはハイドロポンプだ!」

二匹のポケモン達はフリーザーに立ち向かった、お互いの技が出されようとしたが、フリーザーは強烈な吹雪を繰り出したあと、白い霧を体内から放出して、姿を隠して、天井から飛び立つ姿が見えた。

どうやらフリーザーは自分の技を身を隠すためにやった行為だったこと

「逃げたか、けどましろが無事で何よりだ。大丈夫か?」

「うん、あ、ありがとうね…グリーン」

私はグリーンの手を重ねて、双子島の左の方の出口へ出た空を見上げるとあたりは真っ暗になっていた。

「夜か、オレがきた時は夕方だったからな。今日はここでキャンプ地とするか？」  
「えっ？で、でも…悪いよ。」

「悪いって何がだよ、それに旅は道連れっていうだろ？」

私とグリーンは、キャンプを準備をした。とはいえ私は慣れていない体験だったけどグリーンが色々と教えてくれた。時々、胸の奥が熱い気持ちになるのはどうしてだろうってあるけど、気のせいだよな？

って思いながらも、キャンプができて、リザードンの火起こしをしたあと。お互いに焚き火の音を聞きながら、たわいのない会話を楽しんだ

……えっ？その後どうなったかって？

……あつ……えつと……うん、ただ一緒にいた、ただだよ？

翌朝、グリーンと私は。西にあるグレン島に向けて出発をした

次回へ続く